

四国横断自動車道建設に伴う

# 埋蔵文化財発掘調査概報

平成10年度

1999. 3

香 川 県 教 育 委 員 会  
財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター  
日 本 道 路 公 団 四 国 支 社  
建 設 省 四 国 地 方 建 設 局  
香 川 県 土 木 部

## 例 言

1. 本書は四国横断自動車道建設に伴い、平成10年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の概要である。
2. 本調査は香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 本年度の調査体制は以下のとおりである。

総括	所長	菅原良弘		
	次長	小野善範		
総務	参事	別枝義昭		
	副主幹兼係長	田中秀文		
	主査	新 一郎		
調査	参事	長尾重盛	主任技師	松岡宏一
	主任文化財専門員	大山真充	主任技師	香西 亮
	主任文化財専門員	藤好史郎	技 師	豊島 修
	主任文化財専門員	長元茂樹	技 師	野崎隆亨
	主任文化財専門員	中西 昇	技 師	住野正和
	主任文化財専門員	蓮本和博	技 師	信里芳紀
	文化財専門員	植松邦浩	技 師	松本和彦
	文化財専門員	島田英夫	技 師	小野秀幸
	文化財専門員	西岡達哉	技 師	長井博志
	文化財専門員	樋本清輝	調査技術員	森澤千尋
	文化財専門員	濱松春水	調査技術員	陶山仁美
	文化財専門員	片桐孝浩	調査技術員	多田 歩
	文化財専門員	喜岡永光	調査技術員	東条貴美
	文化財専門員	森 格也	調査技術員	門脇範子
	文化財専門員	木下晴一	調査技術員	糸山 晋
	文化財専門員	岡本 利	調査技術員	中山尚子
	文化財専門員	池田道雄	調査技術員	香川直孝
	文化財専門員	多田佳弘	調査技術員	大屋敷慶子
	文化財専門員	山元素子	調査技術員	藤澤正則
	文化財専門員	森下英治	調査技術員	佐々木明子
	文化財専門員	宮崎哲治	調査技術員	滝井理加
	文化財専門員	多田 慎	調査技術員	山坂浩樹
	主任技師	佐々木正之	調査技術員	秋山 亮
	主任技師	溝渕大輔	調査技術員	正山泰久

4. 本書の執筆は第1章については大山・藤好が、第2章についてはそれぞれ調査担当者が行い、目次にその文責を記している。また、本書の編集は森が担当し、多田（愼）・藤澤が補佐した。

5. 各遺跡・地区の調査担当者は以下のとおりである。

中森遺跡	森下・蓮本・門脇
香川郡条里C地区	木下・香西・中山
林・坊城遺跡	森下・蓮本・門脇
正箱遺跡	森下・蓮本・門脇
東山崎・水田遺跡	山元・岡本・滝井
前田東・中村遺跡	宮崎・喜岡・溝渕・住野・東条・佐々木（明）・秋山
中山A～D地区	木下・香西・中山
坪井遺跡	小野・池田・山坂
三殿A・B地区	木下・香西・中山
町田地区	植松・豊島・香川
下屋敷地区	植松・豊島・陶山
金毘羅山遺跡	植松・豊島・陶山・香川
塔の山南遺跡	中西・島田・糸山
原間遺跡	片桐・樋本・松岡・佐々木（正）・多田（歩）・東条・佐々木（明）・森澤
樋端地区	片桐・樋本・松岡・佐々木（正）・佐々木（明）・森澤
成重遺跡	森・信里・松本・長元・多田（佳）・多田（愼）・藤澤・大屋敷・森澤・香川
谷地区	木下・香西・中山
善門池西遺跡	喜岡・溝渕・東条
池の奥遺跡	西岡・野崎・正山
塩屋A・B地区	西岡・中西・島田・野崎・糸山・正山
川北遺跡	木下・香西・中山
迹田A・B地区	西岡・中西・島田・野崎・糸山・正山
迹田谷川下池遺跡	長井・濱松・多田（歩）
鹿庭遺跡	長井・濱松・藤澤・多田（歩）

6. 挿図の一部に国土地理院地形図（1/25,000）、同地勢図（1/200,000）を使用した。

# 目 次

第1章 平成10年度調査の概要 .....	(大山・藤好)	1
第2章 調査の概要 .....		12
香川郡条里C地区 .....		12
1. 調査の方法 .....	(木下)	12
2. 調査の成果 .....	(木下)	12
正箱遺跡 .....		14
1. 調査の成果 .....	(森下)	14
中森遺跡 .....		15
1. 立地と環境 .....	(森下)	15
2. 調査の成果 .....	(森下)	15
3. まとめ .....	(森下)	18
林・坊城遺跡 .....		19
1. 調査の成果 .....	(森下)	19
2. まとめ .....	(森下)	23
東山崎・水田遺跡 .....		24
1. 調査の成果 .....	(山元)	24
2. まとめ .....	(山元)	27
前田東・中村遺跡 .....		28
1. 立地と環境 .....	(住野)	28
2. 調査の成果 .....	(宮崎・喜岡)	28
3. まとめ .....	(宮崎)	47
坪井遺跡 .....		48
1. 立地と環境 .....	(池田)	48
2. 調査の成果 .....	(小野)	49
3. まとめ .....	(小野)	52
金毘羅山遺跡 .....		55
1. 立地と環境 .....	(豊島)	55
2. 調査の成果 .....	(植松)	55
塔の山南遺跡 .....		60
1. 立地と環境 .....	(島田)	60
2. 調査の成果 .....	(中西)	60
3. まとめ .....	(中西)	61

原間遺跡 .....	62
1. 立地と環境 .....	(片桐) 62
2. 調査の成果 .....	(片桐・樋本・松岡・佐々木(正)) 64
3. まとめ .....	(片桐) 78
樋端地区 .....	79
1. 立地と環境 .....	(松岡) 79
2. 調査の成果 .....	(片桐・佐々木(正)) 79
3. まとめ .....	(片桐) 81
成重遺跡 .....	82
1. 立地と環境 .....	(信里) 82
2. 東側調査区(A区～D区)の成果 .....	(信里・松本) 83
3. 西側調査区(E区～G区)の成果 .....	(森・多田(慎)) 99
善門池西遺跡 .....	110
1. 立地と環境 .....	(溝渕) 110
2. 調査の成果 .....	(溝渕) 110
3. まとめ .....	(溝渕) 112
池の奥遺跡 .....	114
1. 立地と環境 .....	(西岡) 114
2. 調査の成果 .....	(西岡・野崎) 114
3. まとめ .....	(西岡) 121
川北遺跡 .....	124
1. 立地と環境 .....	(木下) 124
2. 調査の成果 .....	(木下) 125
辻田谷川下池遺跡 .....	131
1. 立地と環境 .....	(濱松) 131
2. 調査の成果 .....	(長井) 132
鹿庭遺跡 .....	133
1. 立地と環境 .....	(濱松) 133
2. 調査の成果 .....	(長井) 133
3. まとめ .....	(長井) 136

## 挿 図 目 次

第 1 図	埋蔵文化財発掘調査対象地位置図 …	4	第 46 図	N 区遺構配置図 ……………	44
第 2 図	香川郡条里 B 地区トレンチ配置図 …	5	第 47 図	N①区 S B01実測図 ……………	45
第 3 図	三殿 B・町田地区予備調査トレンチ配置図 …	5	第 48 図	N①区 S D01・03重複部分実測図 …	45
第 4 図	中山地区予備調査トレンチ配置図 …	6	第 49 図	O 区遺構配置図 ……………	46
第 5 図	三殿 A 地区予備調査トレンチ配置図 …	7	第 50 図	O①区 S B01実測図 ……………	47
第 6 図	原間遺跡・樋端地区予備調査トレンチ配置図 …	8	第 51 図	遺跡の位置及び周辺の遺跡 ………	48
第 7 図	下屋敷地区予備調査トレンチ配置図 …	9	第 52 図	S B04平・断面図 ……………	49
第 8 図	谷地区予備調査トレンチ配置図 …	9	第 53 図	S B06平・断面図 ……………	50
第 9 図	塩屋地区予備調査トレンチ配置図 …	10	第 54 図	S B06 (上)・S B07 (下) 出土遺物 …	50
第 10 図	辻田地区予備調査トレンチ配置図 …	11	第 55 図	S D18土層断面図 ……………	50
第 11 図	遺跡位置図 ……………	12	第 56 図	S D19・S D08・S R02土層断面図 …	51
第 12 図	調査位置およびトレンチ平面図 …	13	第 57 図	S D19出土遺物 ……………	51
第 13 図	第 5 地点西端断面図 ……………	13	第 58 図	S R02出土遺物 ……………	51
第 14 図	周辺既往調査地と条里型地割 ……	14	第 59 図	S R01土層断面図 ……………	51
第 15 図	正箱遺跡遺構分布図 ……………	14	第 60 図	S R01出土遺物 ……………	52
第 16 図	C 区包含層出土尖頭器 ……………	14	第 61 図	遺構配置図 ……………	53～54
第 17 図	周辺遺跡分布図 ……………	15	第 62 図	包含層およびⅡ区 S D32出土遺物 …	53～54
第 18 図	中森遺跡調査地区割図 ……………	16	第 63 図	金毘羅山遺跡遺構配置図 ………	57～58
第 19 図	中森遺跡 B 区石器分布状況 ………	17	第 64 図	Ⅱ区中央ベルト～Ⅰ区北壁土層断面図 …	57～58
第 20 図	ナイフ形石器実測図 ……………	17	第 65 図	遺跡位置図 ……………	60
第 21 図	接合資料実測図 ……………	17	第 66 図	周辺遺構及び調査区配置図 ………	63
第 22 図	林・坊城遺跡調査地概要図 ………	19	第 67 図	原間 2 号墳墳丘測量図 ……………	66
第 23 図	B 区縄文時代晩期～弥生前期遺構分布図 …	20	第 68 図	原間 2 号墳石室実測図 ……………	67
第 24 図	B 区 S D10平面図 ……………	21	第 69 図	原間 2 号墳出土遺物実測図 ………	68
第 25 図	S D10・S D11・S D25断面図 …	21	第 70 図	原間遺跡Ⅰ区 (西丘陵) 地形測量図 …	69～70
第 26 図	S D10・S D25出土土器実測図 …	22	第 71 図	原間 3 号墳平・断面図 ……………	71
第 27 図	円形周溝墓 S X01実測図 ……………	23	第 72 図	原間 3 号墳南周濠内出土遺物実測図 …	72
第 28 図	遺跡位置図 ……………	25～26	第 73 図	原間 4 号墳平面図及び遺物出土状況 …	73
第 29 図	周辺地割図 ……………	25～26	第 74 図	原間 3・4 号墳間濠内出土遺物実測図 …	73
第 30 図	調査区割図 ……………	25～26	第 75 図	原間 7 号墳平・断面図 ……………	75
第 31 図	遺構配置図 ……………	25～26	第 76 図	原間 8 号墳平・断面図 ……………	77
第 32 図	調査区配置図 ……………	28	第 77 図	原間 10 号墳平・断面図 ……………	78
第 33 図	H 区遺構配置図 ……………	29	第 78 図	樋端 A 地区地形測量図 ……………	80
第 34 図	H①区 S B02実測図 ……………	30	第 79 図	樋端 2 号墳平・断面図 ……………	81
第 35 図	H①区 S P68実測図 ……………	31	第 80 図	樋端 2 号墳出土遺物実測図 ………	81
第 36 図	H①区 S F01実測図 ……………	32	第 81 図	調査区割図 ……………	82
第 37 図	H①区 S E01実測図・出土遺物実測図 …	33	第 82 図	A 3 a 区第 1 面土坑列平面図 ……	83
第 38 図	H②区 S E01実測図 ……………	34	第 83 図	A 3 a 区第 1 面 S K06平・断面図, 出土遺物 …	84
第 39 図	I 区遺構配置図 ……………	36	第 84 図	A 3 a 区第 1 面 S K01平・断面図 …	84
第 40 図	I③区 S D19出土遺物実測図 ……	38	第 85 図	成重遺跡 A～F 区第 1 面土坑分布図 …	84
第 41 図	J 区遺構配置図 ……………	39	第 86 図	A 4 区第 2 遺構面 S H01・02出土遺物 ……	85
第 42 図	J④区 S R02出土遺物実測図 ……	41	第 87 図	A 4 区第 2 遺構面 S H01・02平・断面図 …	86
第 43 図	J④区 S R01出土遺物実測図 ……	42	第 88 図	A 4 区第 1 遺構面 S K06平・断面図 …	86
第 44 図	J④区 S D09出土遺物実測図 ……	42	第 89 図	A 区～D 区第 2 面遺構配置図 …	87～88
第 45 図	J⑥区・K 区遺構配置図 ……………	43	第 90 図	B 区第 2 面集石状遺構 7 平・断面図 …	90

第91図	B区第2遺構面集石状遺構6出土遺物実測図	91
第92図	D1a区第2面SH04・05平・断面図	93
第93図	D1a区第2面SH04・05出土遺物実測図	93
第94図	D1・D1a区第2面竪穴住居群平面分布	94
第95図	A区～D区第1遺構面遺構配置図	95～96
第96図	D3区第1面SP33出土遺物実測図	98
第97図	F2区東橋脚部第2面SH01平・断面図, 出土遺物	99
第98図	F2区東橋脚部第2面SH02平・断面図	100
第99図	E区～G区第2面遺構配置図	101～102
第100図	G3区第2面方形周溝墓7平・断面図, 出土遺物	103
第101図	G3区第2面集石18平・立・断面図, 出土遺物	105
第102図	E区～G区第1面遺構配置図	107～108
第103図	F2区東橋脚部第1面SK02平・断面図	109
第104図	遺跡位置及び周辺遺跡	110
第105図	調査区割図及び遺構配置図	111
第106図	VIIb区SX01平・断面図	113
第107図	IA・C区, IIA区遺構配置図	117～118

第108図	池の奥遺跡地区割図	123
第109図	磨製石剣実測図	123
第110図	調査位置と周辺の遺跡	124
第111図	I区出土遺物実測図	126
第112図	調査区割およびグリッド図	127
第113図	土層柱状図	127
第114図	遺構配置略図	128
第115図	I区遺構配置図	129
第116図	SB04平・断面図	130
第117図	遺跡の位置及び周辺の遺跡	131
第118図	遺構配置図	132
第119図	遺跡の位置及び周辺の遺跡	133
第120図	調査区割図	133
第121図	SK02平・断面図	134
第122図	SK02出土石器実測図	134
第123図	第1遺構面遺構配置図	135
第124図	第2遺構面遺構配置図	135

## 写真目次

写真1	第5地点溝(南東から)	13
写真2	第3地点調査風景(東から)	13
写真3	E区中世屋敷地空中写真(南から)	18
写真4	A区条里型地割坪界交点部分(南から)	18
写真5	B区石器ブロック1検出状況(西から)	18
写真6	A区黄色粘土層旧石器出土状況(北から)	18
写真7	B区SD25および北側柱穴群(東から)	20
写真8	SD10突帯土器群出土状況(南から)	21
写真9	SD10・SD11全景(東から)	21
写真10	H区全景(西から)	25～26
写真11	H区(東半)全景(東から)	25～26
写真12	A区全景(東から)	25～26
写真13	B区全景(東から)	25～26
写真14	C区(東半)全景(東から)	25～26
写真15	G区全景(東から)	25～26
写真16	J区全景(南から)	25～26
写真17	H①区SB02検出状況(南から)	30
写真18	H①区SP68礎板・柱痕検出状況(西から)	31
写真19	H①区SF01検出状況(東から)	31
写真20	H①区SE01木柁検出状況(南から)	32
写真21	H①区SE01曲物検出状況(南から)	32
写真22	H②区SE01井筒検出状況(南から)	34
写真23	H③区SB01検出状況(南西から)	35
写真24	H③区SB03検出状況(南東から)	35
写真25	H③区SB02・04検出状況(南から)	35
写真26	I④区上層全景(西から)	37
写真27	I③区SB他(南から)	37

写真28	I④区SB01・SA01(南から)	37
写真29	I④区SR01西遺物出土状況(南東から)	38
写真30	J②区上層全景(西から)	40
写真31	J②区下層全景(東から)	40
写真32	J④区上層全景(東から)	40
写真33	J④区下層全景(東から)	40
写真34	J⑤区上層全景(西から)	40
写真35	J⑤区下層全景(東から)	40
写真36	J④区SR02(北東から)	41
写真37	J④区SR02遺物出土状況(南から)	41
写真38	J④区SD19・SR02(北東から)	42
写真39	J④区SD19遺物出土状況(西から)	42
写真40	K①区西半全景(南から)	43
写真41	K②区全景(東から)	43
写真42	N①区SD01・02・03検出状況(東から)	45
写真43	O①区SB01検出状況(北西から)	46
写真44	SB06・07, SD08・09, SR02遠景(西から)	50
写真45	SB01周辺遠景(東から)	53～54
写真46	SB01・SD22近景(南から)	53～54
写真47	SH04焼失面検出状況(東から)	55
写真48	SH04完掘状況(東から)	55
写真49	SH05完掘状況(西から)	56
写真50	SX02遺物出土状況(北から)	56
写真51	SH02完掘状況(南から)	56
写真52	II・III区航測時遠景(南から)	57～58
写真53	I区航測時全景(南から)	57～58
写真54	中世柱穴・土坑群完掘状況(南西から)	59

写真55	S X11遺物出土状況 (東から) ……	59	写真85	D1a区第2面SH04・05検出状況 (西から) …	92
写真56	砂糖竈壁・焼土出土状況 (東から)	59	写真86	D1a区第2面SH05炭化材検出状況 (南から) …	92
写真57	表土除去後全景 (南東から) ……	60	写真87	D3区第1面完掘状況 (北から) …	97
写真58	石蓋土壙墓 (奥)・箱式石棺墓 (手前) 検出状況 (北から) …	61	写真88	D3区第1面SP33遺物出土状況 (西から) …	97
写真59	原間遺跡遠景 (北から) ……	62	写真89	D3区下層埋積谷全景 (北東から) …	98
写真60	東丘陵遠景 (西から) ……	64	写真90	F2区東橋脚部第2面SH01 (右)・SH02 (左) (西から) …	100
写真61	原間2号墳検出状況 (東から) ……	66	写真91	G3区第2面方形周溝墓群 (北から) …	104
写真62	原間2号墳遺物出土状況 (東から) …	66	写真92	G3区第2面方形周溝墓7周溝内遺物出土状況 (西から) …	104
写真63	西丘陵遠景 (東から) ……	68	写真93	G3区第2面集石18検出状況 (西から) …	104
写真64	原間3号墳主体部検出状況 (南東から) …	71	写真94	G3区第2面集石18断面 (南から) …	106
写真65	原間3号墳第2主体部検出状況 (南東から) …	71	写真95	F2区西橋脚部第2面集石群検出状況 (東から) …	106
写真66	原間4号墳検出状況 (東から) ……	73	写真96	F2区東橋脚部第1面全景 (南から) …	109
写真67	原間4号墳遺物出土状況 (南から)	73	写真97	G3区第1面全景 (北から) ……	109
写真68	原間7号墳検出状況 (西から) ……	74	写真98	G3区第1面SB01 (北から) …	109
写真69	原間7号墳検出状況 (北東から) …	76	写真99	VIa区全景 (北から) ……	112
写真70	原間7号墳検出状況 (蓋石除去後) (北東から) ……	76	写真100	SH01 (南から) ……	112
写真71	原間8号墳検出状況 (東から) ……	76	写真101	SX01 (東から) ……	112
写真72	原間8号墳検出状況 (蓋石除去後) (東から) …	76	写真102	IA区 (北から) ……	123
写真73	西丘陵東部遺構検出状況 (西から) …	78	写真103	SH01 (北から) ……	123
写真74	原間10号墳検出状況 (西から) ……	78	写真104	SH13 (北から) ……	123
写真75	樋端A地区遠景 (西から) ……	78	写真105	IIA区 (南から) ……	123
写真76	樋端2号墳検出状況 (北から) ……	80	写真106	SK01 (北から) ……	123
写真77	樋端2号墳周濠内遺物出土状況 (北から) …	80	写真107	I区全景 (南から) ……	125
写真78	樋端2号墳主体部遺物出土状況 (北から) …	80	写真108	SB04・SP06断面 (北西から) …	125
写真79	A3a区第2面全景 (東から) ……	83	写真109	IV区全景 (南から) ……	126
写真80	A3a区第1面土坑列全景 (南西から) …	83	写真110	II区全景 (北西から) ……	126
写真81	A4区第1面全景 (東から) ……	85	写真111	調査区遠景 (西から) ……	127
写真82	A4区第2面SH01・02全景 (東から) …	85	写真112	B区SK02遺物出土状況 (東から) …	134
写真83	B区第2面集石状遺構7検出状況 (北から) …	89	写真113	B区SB01全景 (西から) ……	136
写真84	B区第2面集石状遺構7遺物出土状況 (西から) …	89			

## 表 目 次

第1表	四国横断自動車道建設に伴う 埋蔵文化財調査一覧……………	3	第2表	SD10・SD25・SP39 出土土器観察表……………	22
-----	---------------------------------	---	-----	--------------------------------	----



# 第1章 平成10年度調査の概要

四国横断自動車道のうち高松市内区間及び津田引田間建設に伴う埋蔵文化財調査は平成8年度から開始され、本年度で3年目となった。本年度の当初計画では高松市内区間が約27,000㎡、津田～引田間が約84,000㎡を調査する予定であったが、用地買収・家屋撤去の遅れ、工事工程との調整、また予備調査の後に本調査に至らなかった遺跡などがあり、当初計画とは異なる進行となった。

高松市内区間の本年度の調査面積は154,969㎡で、昨年度までの実績と合わせると全体(約37,000㎡)の65%が終了したことになる。一方津田～引田間については、本年度の調査面積は71,399㎡で、昨年度までの実績と合わせると全体(約150,000㎡)の83%が終了したことになる。

## 1. 高松市内区間調査の概要

高松市内の横断道関係埋蔵文化財発掘調査対象地は、高松・善通寺間と高松市内区間の2工区に分かれる。西部の高松・善通寺間に該当する遺跡としては正箱遺跡・香川郡条里B地区、東部の高松市内区間では香川郡条里C地区西部、香川郡条里D地区、林・坊城遺跡、東山崎・水田遺跡、前田東・中村遺跡がそれぞれ年度当初の調査対象地で、合計26,691㎡を調査する計画であった。このうち香川郡条里B地区は、東側の国道11号に面したインターチェンジの建設省施工箇所とその西の公団施工のR区間に分かれる。年度当初に実施した建設省施工の香川郡条里B地区では予備調査の結果、中世の集落域が判明し、中森遺跡として引き続き発掘調査を実施した。香川郡条里D地区は、用地買収の目処が立たず、平成11年度調査対応予定であった香川郡条里C地区の東部に調査工程を変更対応することとなった。平成10年度、最終的には、高松・善通寺間で正箱遺跡が800㎡、香川郡条里B地区の公団施工区間が200㎡、中森遺跡で3,015㎡の発掘調査を実施し、高松市内区間では香川条里C地区で770㎡、林・坊城遺跡で2,000㎡、東山崎・水田遺跡で1,978㎡、前田東・中村遺跡で7,206㎡の発掘調査を実施した。

平成10年度の調査の中では、工事計画が確定している調査については、正箱遺跡、林・坊城遺跡、東山崎・水田遺跡の発掘が終了し、他の遺跡については、家屋撤去予定部等を中心として次年度以降の対応となった。

## 2. 津田引田間調査の概要

中山地区はA～Dの4地区に分かれ、6月に予備調査を実施した。A～C地区は丘陵部で、寺院跡や山城跡の存在が予想されたが、尾根上のトレンチからは遺構・遺物は検出されなかった。D地区は平地部で丘陵寄りから古代の遺構・遺物が検出され、9月から本調査を実施した。本調査の結果、奈良時代の掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡等が検出された。遺跡名は中山という地名が広範囲を指すことから、字名をとり「坪井遺跡」となった。

三殿地区は7月に予備調査を実施した。A地区は番屋川を挟んだ平地部で、川北部では遺構・遺物は検出されなかったが、川南部では山寄りの箇所から弥生時代の包含層を検出した。南部については3月に追加の予備調査を実施し、本調査は次年度の前年度である。丘陵のB地区は予備調査で終了した。

町田地区は墳墓の存在が予想されていたが、9月に予備調査を実施した結果遺構・遺物は検出されなかった。楠谷A地区についても墳墓の存在が予想されていたが、3月に予備調査を実施したが遺構・遺物は

検出されなかった。

下屋敷地区は4～8月に本調査を実施し、縄文時代から中世までの遺構・遺物を調査した。本遺跡は本年度で調査完了予定であったが、金毘羅山斜面の切り土が頂上まで及ぶことが明らかとなったため、次年度以降に山頂付近の調査が残ることになった。なお、遺跡名は下屋敷が広範囲を指すことから、「金毘羅山遺跡」となった。

別所A地区は昨年度予備調査を実施して墳墓を確認していたもので、本調査を実施した。調査の結果、石蓋土坑1基、箱式石棺1基、土壙墓4基を検出した。なお遺跡名については、遺跡北部の丘陵名を採用して「塔の山南遺跡」となった。

原間遺跡は昨年度からの継続調査で、本年度は東西の丘陵上の古墳の調査を中心に実施した。西側の丘陵では粘土槨を埋葬主体とする古墳等、東側の丘陵では横穴式石室墳等を調査した。

樋端地区はA～E地区に分けられているが、原間遺跡と併行して予備調査を実施した後、A・C・D地区について本調査を実施した。A地区では土壙墓から鉄刀が出土した。C地区では壺棺墓12基等を検出した。D地区では横穴式石室1基、壺棺墓8基等を検出した。

成重遺跡は、昨年度調査で検出された集石墓の取扱いが今年度の大きな課題であった。集石墓については四国北東部の地域色を示す弥生時代中・後期の墳墓で、積石塚や前方後円墳の成立を考える上で貴重なものであるとの考古学的評価をもとに、現状保存について関係機関が協議を重ねた結果、国道西側の集石墓集中箇所（約7,000㎡）については盛土構造を橋梁構造に変更することが本年度初めに決まり、橋脚位置以外の集石墓は現状保存されることになった。これを受けて本年度調査は橋梁の脚部分の調査や東西両端の調査を行った。

谷地区は7月に予備調査を実施し、位置不詳であった近世窯跡の位置を確認した。本調査は次年度以降の予定である。

池の奥遺跡は4月から本調査を実施し、弥生時代中・後期の集落跡を調査した。池の奥地区の善門池西遺跡は12月から昨年度調査区の南側を本調査し、古墳時代の竪穴住居跡等を発掘した。

塩屋地区はA・B2地区に分かれるが、4月に予備調査を実施した結果、A地区において遺構が確認されたため8月より本調査を実施した。調査の結果奈良時代を中心とする時期の掘立柱建物跡が12棟発掘された。

辻田地区は本年度4・5月に予備調査を実施した後、B地区の本調査を実施した。本調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡が検出された。A地区の本調査は次年度の予定である。なお遺跡名については、調査地点の通称からA地区は「辻田石垣遺跡」、B地区は「辻田谷川下池遺跡」となった。

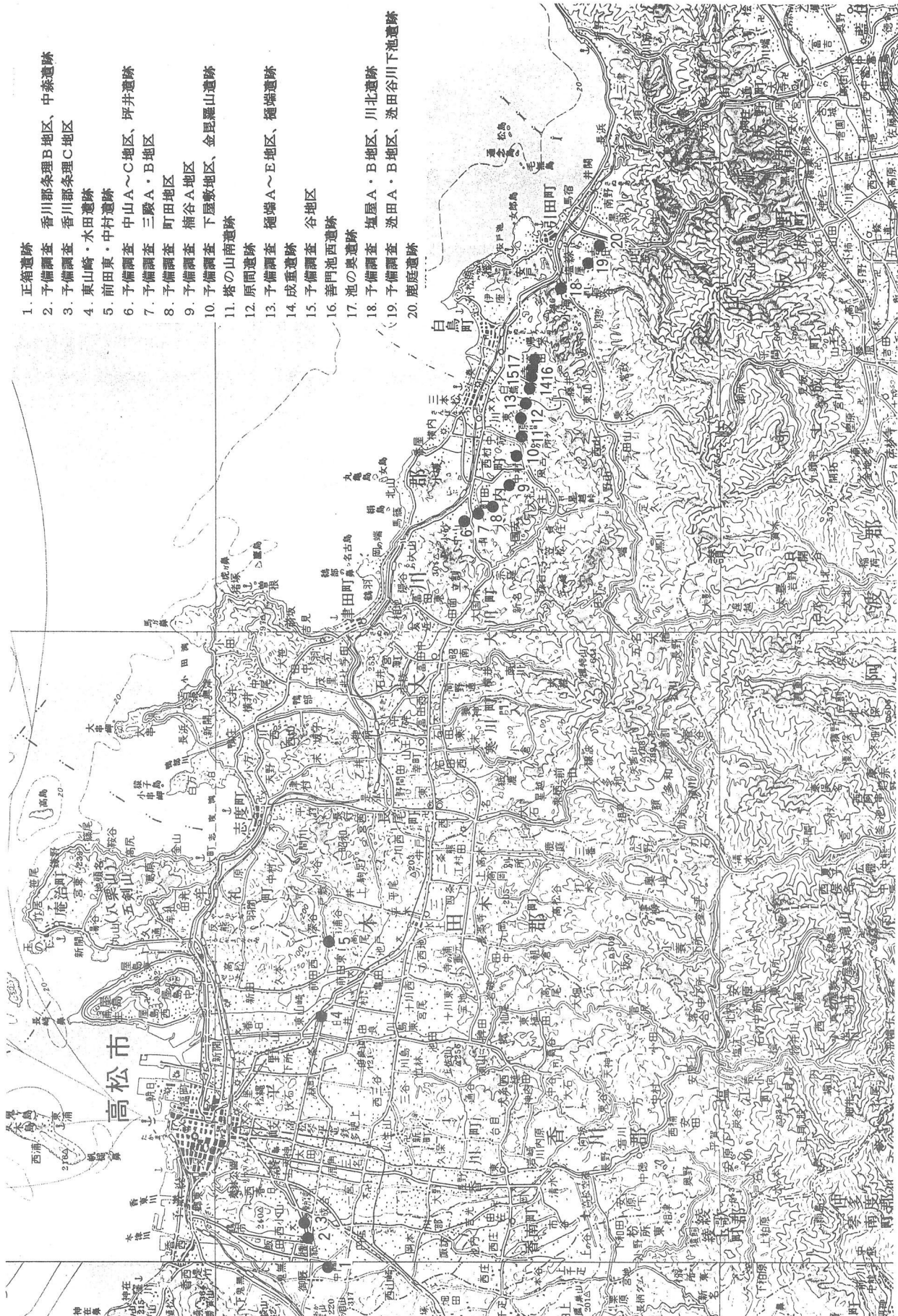
鹿庭遺跡は4～8月に本調査を実施した。弥生時代ではサヌカイトの集積土坑が検出され、中世では掘立柱建物跡を13棟検出した。本遺跡の調査は本年度で完了した。

以上の津田引田間調査の大半は日本道路公団四国支社の委託を受けて実施したものであるが、別所地区300㎡、原間遺跡530㎡、樋端地区446㎡、成重遺跡179㎡については香川県土木部の委託を受けて実施したものである。

NO	区 間	地 区 名	遺 跡 名	所 在 地	調査総面積 (㎡)	年度別調査面積 (㎡)			
						8年度	9年度	10年度	11年度以降
1	高松市内区間	香川郡条里A	中間東井坪	高松市中間町	709	709	0	0	0
2		正 箱	正 箱	高松市檀紙町	800	0	0	800	0
3		香川郡条里B		〃	4,200	0	0	200	4,000
4		香川郡条里B	中 森	〃	7,605	0	0	3,015	4,590
5		香川郡条里C		高松市勅使町	896	0	0	770	126
6		香川郡条里D	( 田 村 )	高松市田村町	2,500	0	0	0	2,500
7			上 天 神	高松市上天神町	190	0	190	0	0
8		林・坊城	林・坊城	高松市林町	2,971	481	490	2,000	0
9		山田郡条里A	林 浴	〃	2,626	2,626	0	0	0
10		東山崎・水田	東山崎・水田	高松市東山崎町	1,978	0	0	1,978	0
11		前田東・中村	前田東・中村	高松市前田東町	13,146	0	4,040	7,206	1,900
市 内 区 間 合 計					37,621	3,816	4,720	15,969	13,116
12	津田～引田	中 谷	中 谷	大川郡津田町鶴羽	518	518	0	0	0
13		大 山	大 山	〃	2,113	2,113	0	0	0
14		馬 篠 A～D	—	大川郡大内町馬篠	620	0	620	0	0
15		小 砂	—	大川郡大内町小砂	100	0	100	0	0
16		中山 A～D	坪 井	大川郡大内町中山	6,566	0	0	6,566	0
17		三 殿 A・B		大川郡大内町三殿	8,250	0	0	135	8,115
18		町 田	—	大川郡大内町町田	69	0	0	69	0
19		楠 谷 A		大川郡大内町水主	1,000	0	0	1,000	0
20		楠 谷 B・C	楠 谷	〃	2,038	460	1,578	0	0
21		高 原	—	〃	11	0	11	0	0
22		下 屋 敷	金 毘 羅 山	〃	5,446	446	100	3,600	1,300
23		別 所 A	塔 の 山 南	大川郡大内町川東	1,315	0	15	1,300	0
24		別 所 B	—	〃	29	0	29	0	0
25		杖 の 端	西 谷	〃	2,092	0	2,092	0	0
26		原 間	原 間	〃	43,997	500	19,254	24,243	0
27		樋端 A・B・D	神越 2号墳他	大川郡白鳥町白鳥	2,033	0	0	2,033	0
28		樋 端 C	神 越 遺 跡	〃	2,825	0	0	1,425	1,400
29		樋 端 E	神 越 遺 跡	〃	3,750	0	0	132	3,618
30		成 重	成 重	〃	26,885	1,500	14,650	6,543	4,192
31		谷		〃	2,500	0	0	111	2,389
32		池 の 奥	善 門 池 西	〃	7,116	0	3,566	2,500	1,050
33			池 の 奥	〃	8,700	0	0	8,700	0
34		法 月	—	大川郡白鳥町帰来	510	0	510	0	0
35		塩 屋 A・B	川 北	大川郡引田町引田	6,038	0	0	6,038	0
36			天 王 谷	大川郡引田町塩屋	2,675	0	0	1,200	1,475
37		辻 田 A	辻 田 石 垣	大川郡引田町引田	2,854	0	0	554	2,300
38		辻 田 B	辻田谷川下池	〃	1,450	0	0	1,450	0
39		鹿 庭	鹿 庭	大川郡引田町吉田	4,110	0	310	3,800	0
40		黒 羽	庵 の 谷	大川郡引田町黒羽	3,978	0	3,978	0	0
津 田 ～ 引 田 合 計					149,588	5,537	46,813	71,399	25,839
総 計					187,209	9,353	51,533	87,368	38,955

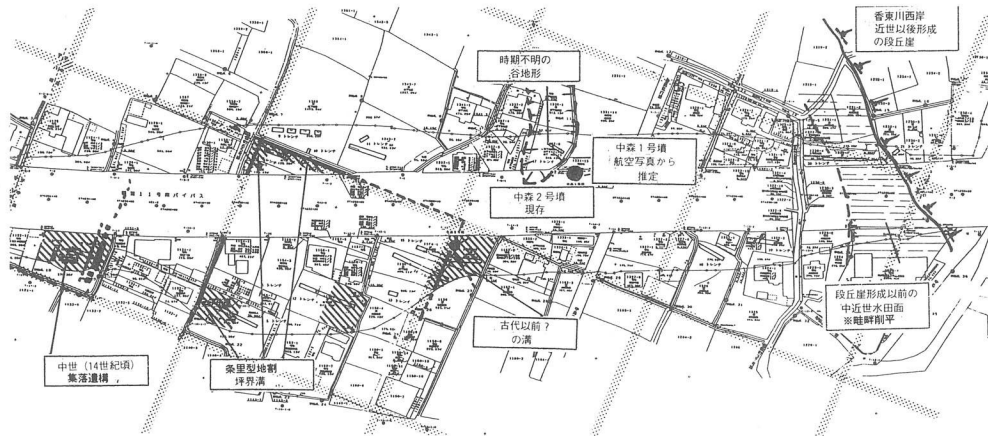
※ 調査面積には県及び建設省負担分を含む。

第 1 表 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査一覧

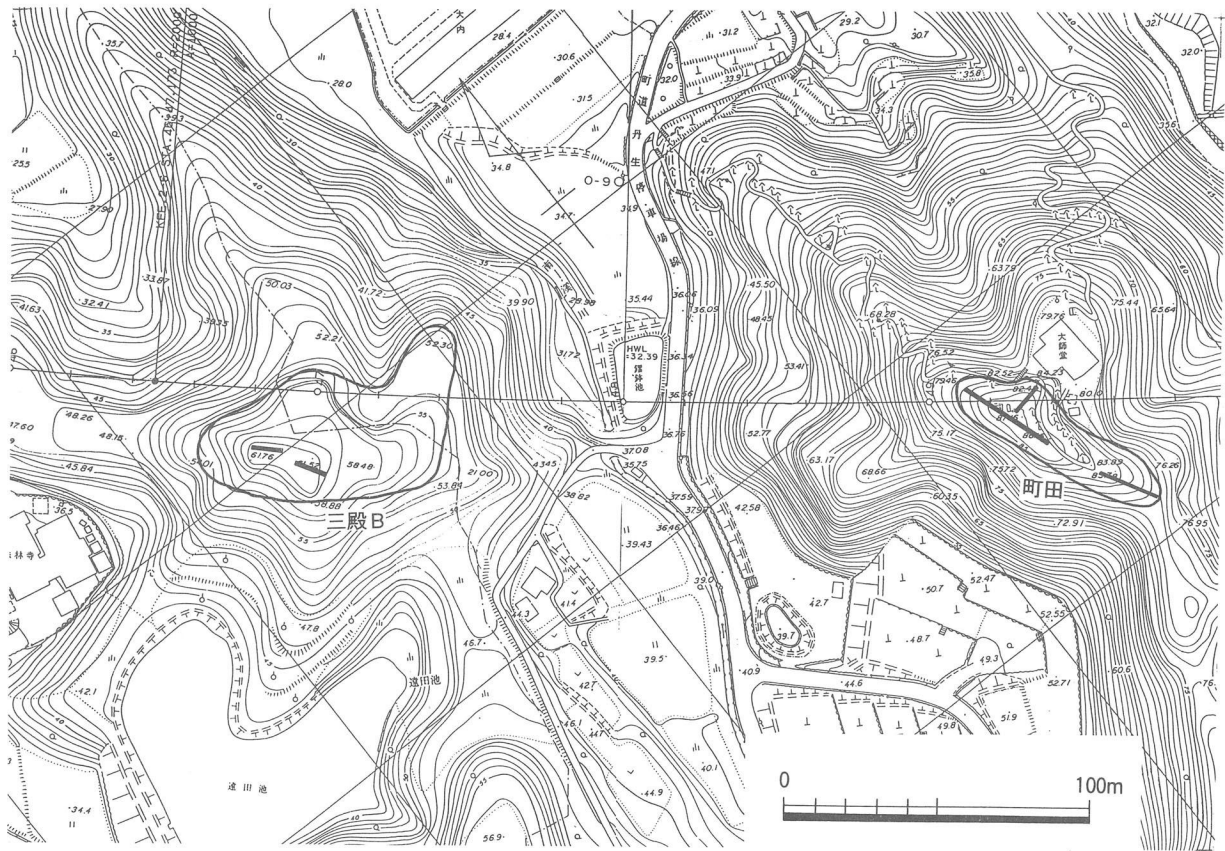


1. 正箱遺跡
2. 予備調査 香川郡桑理B地区、中森遺跡
3. 予備調査 香川郡桑理C地区
4. 東山崎・水田遺跡
5. 前田東・中村遺跡
6. 予備調査 中山A～C地区、坪井遺跡
7. 予備調査 三殿A・B地区
8. 予備調査 町田地区
9. 予備調査 楠谷A地区
10. 予備調査 下屋敷地区、金屋羅山遺跡
11. 塔の山南遺跡
12. 原間遺跡
13. 予備調査 榎端A～E地区、榎端遺跡
14. 成重遺跡
15. 予備調査 谷地区
16. 善門池西遺跡
17. 池の奥遺跡
18. 予備調査 塩屋A・B地区、川北遺跡
19. 予備調査 迹田A・B地区、迹田谷川下池遺跡
20. 鹿庭遺跡

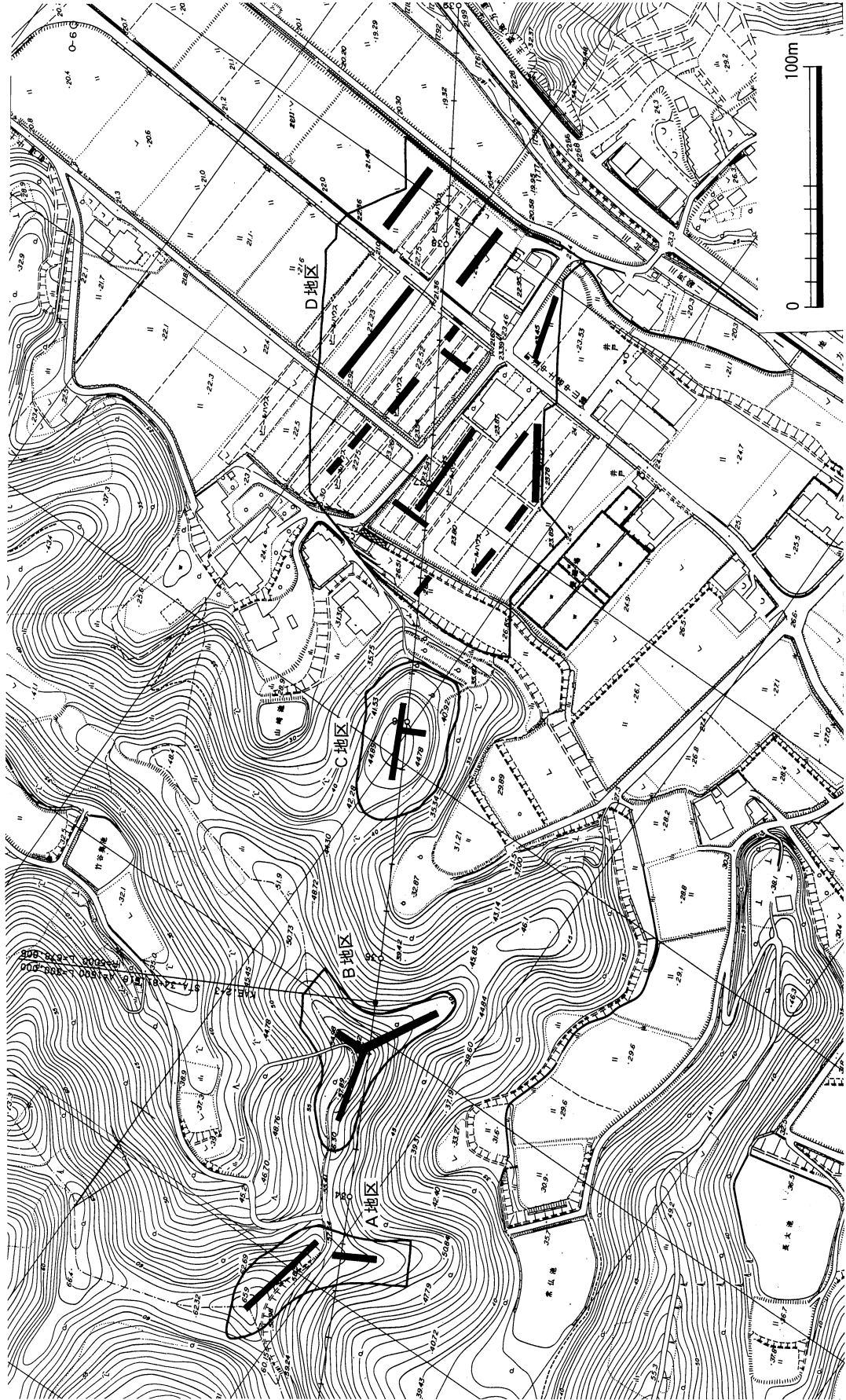
第1図 埋蔵文化財発掘調査対象地位置図 (1/200,000)



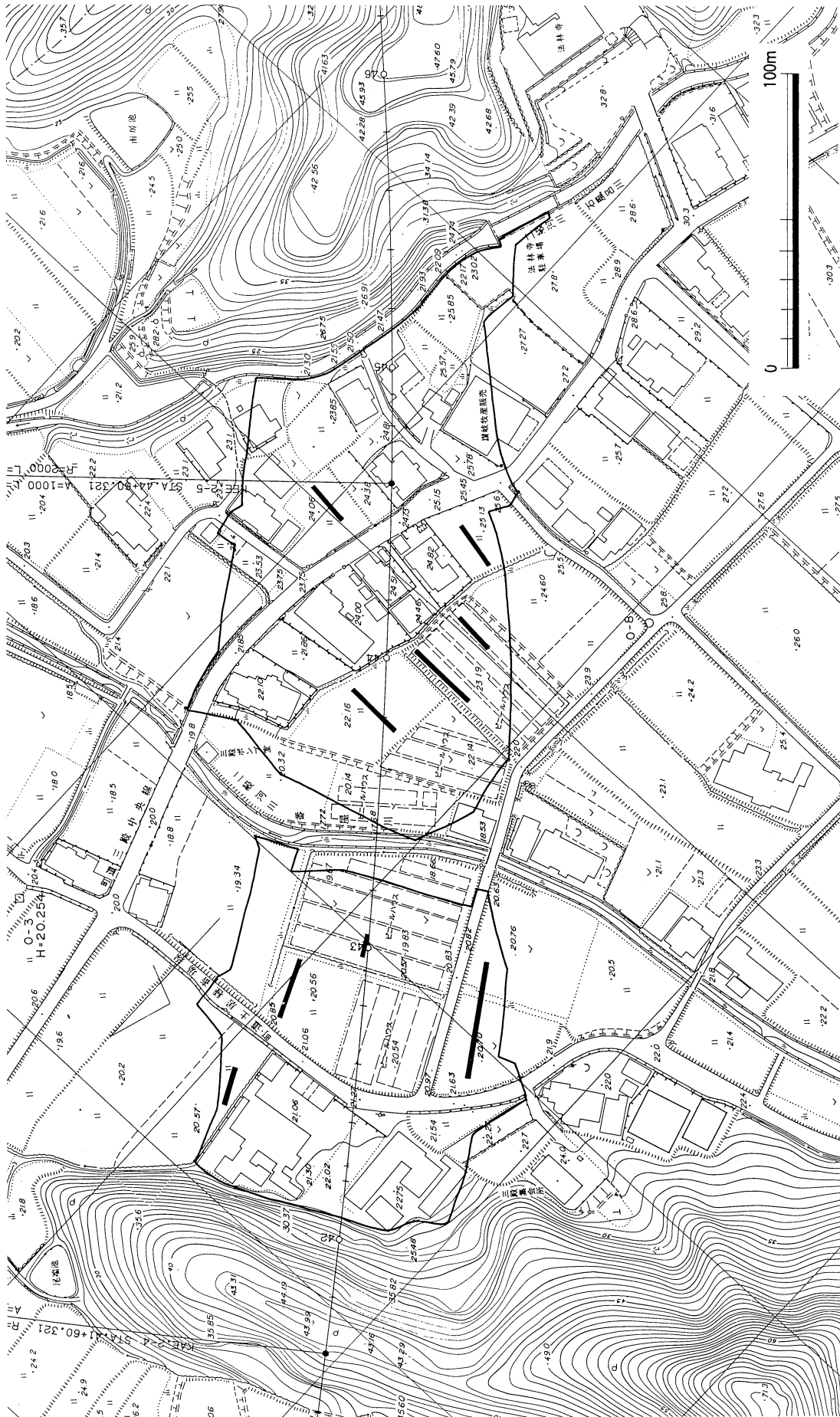
第2図 香川郡条里B地区予備調査トレンチ配置図 (1/2,000)



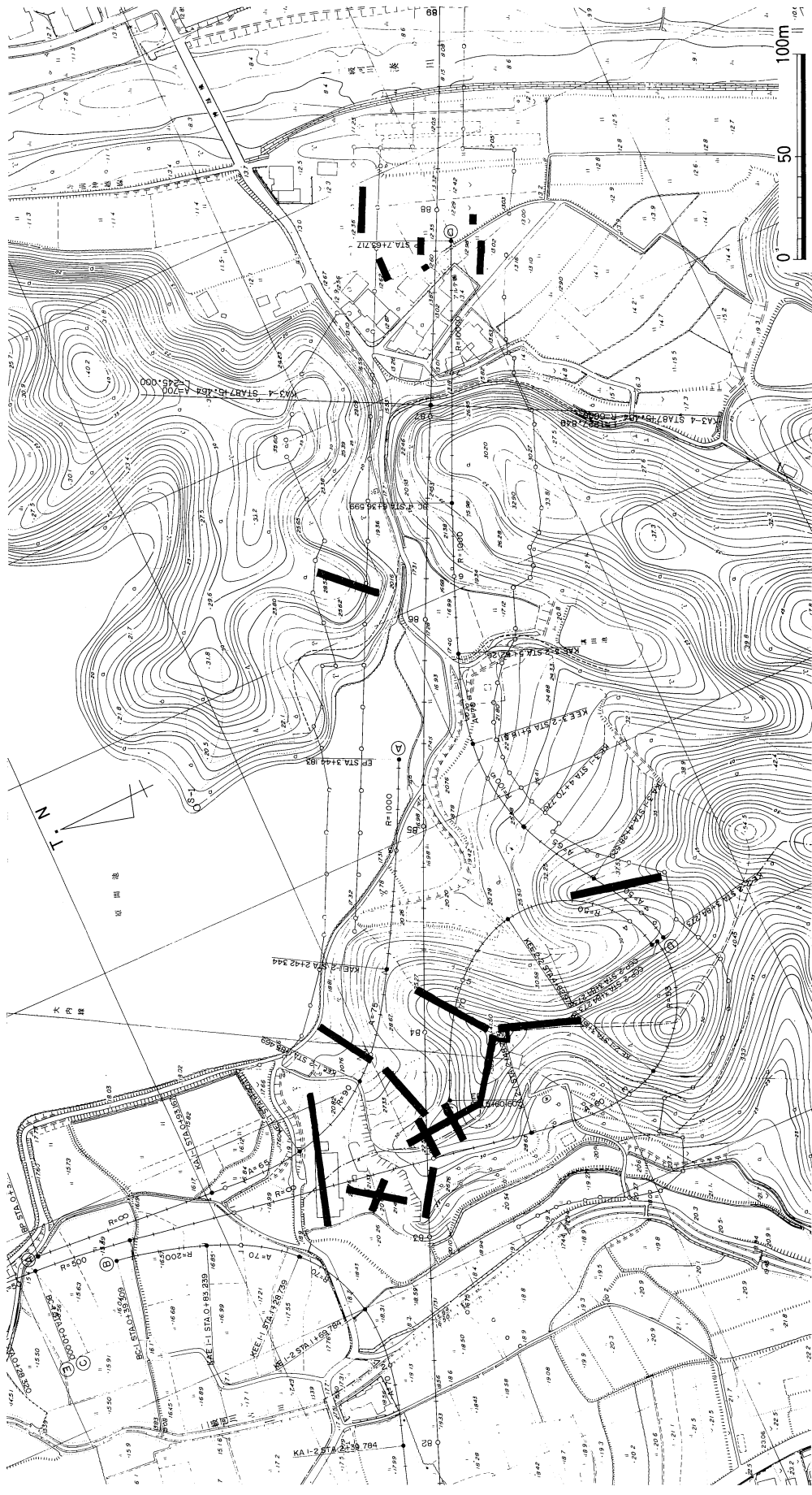
第3図 三殿B・町田地区予備調査トレンチ配置図 (1/2,500)



第4図 中山地区予備調査トレンチ配置図 (1/2,500)

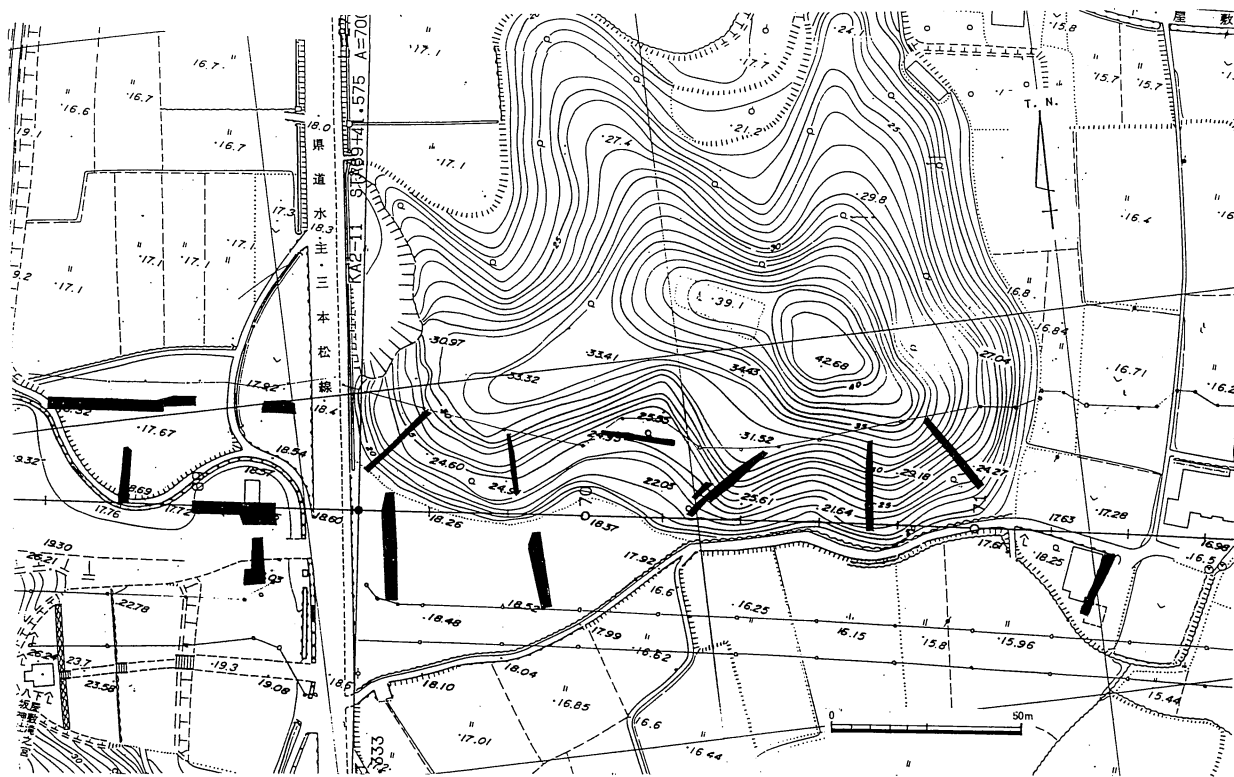


第5図 三股A地区予備調査トレンチ配置図 (1/2,000)

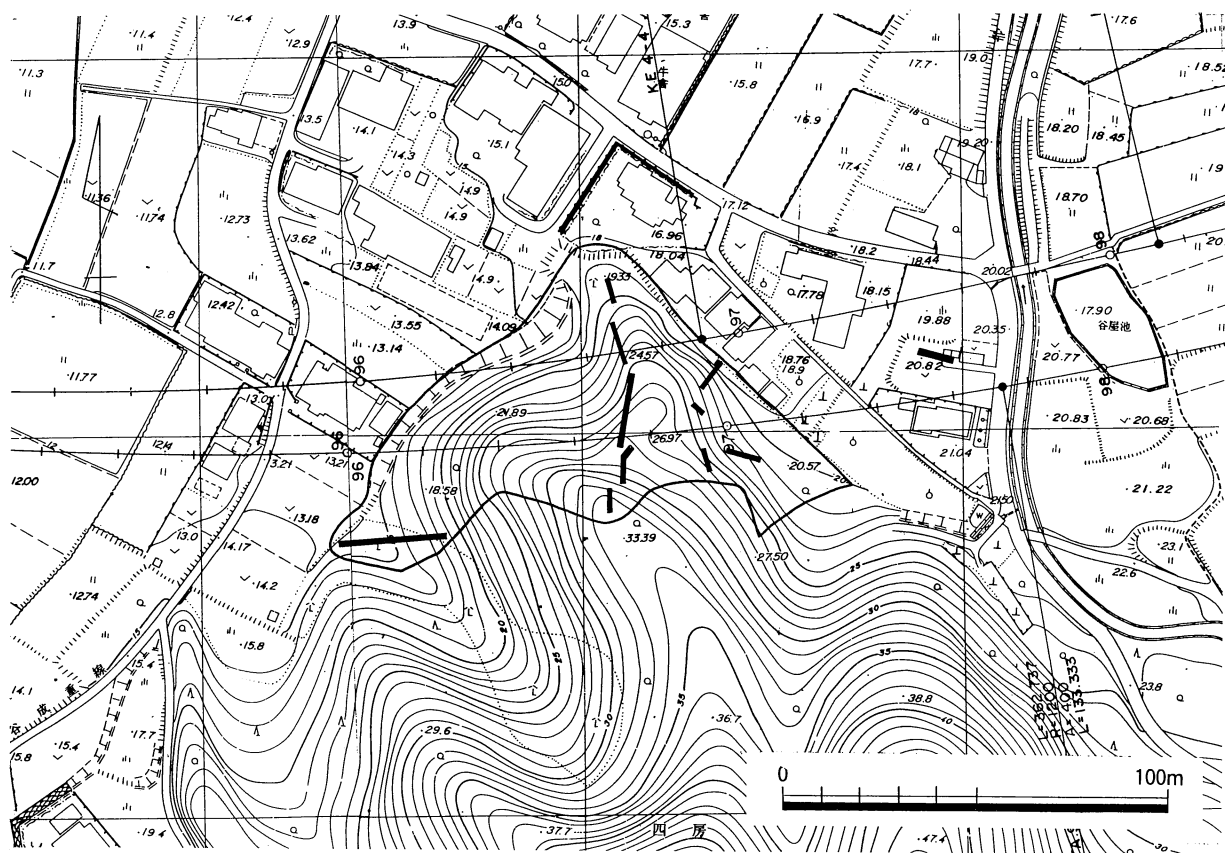


第 6 図 原間遺跡・樋端地区予備調査トレンチ配置図

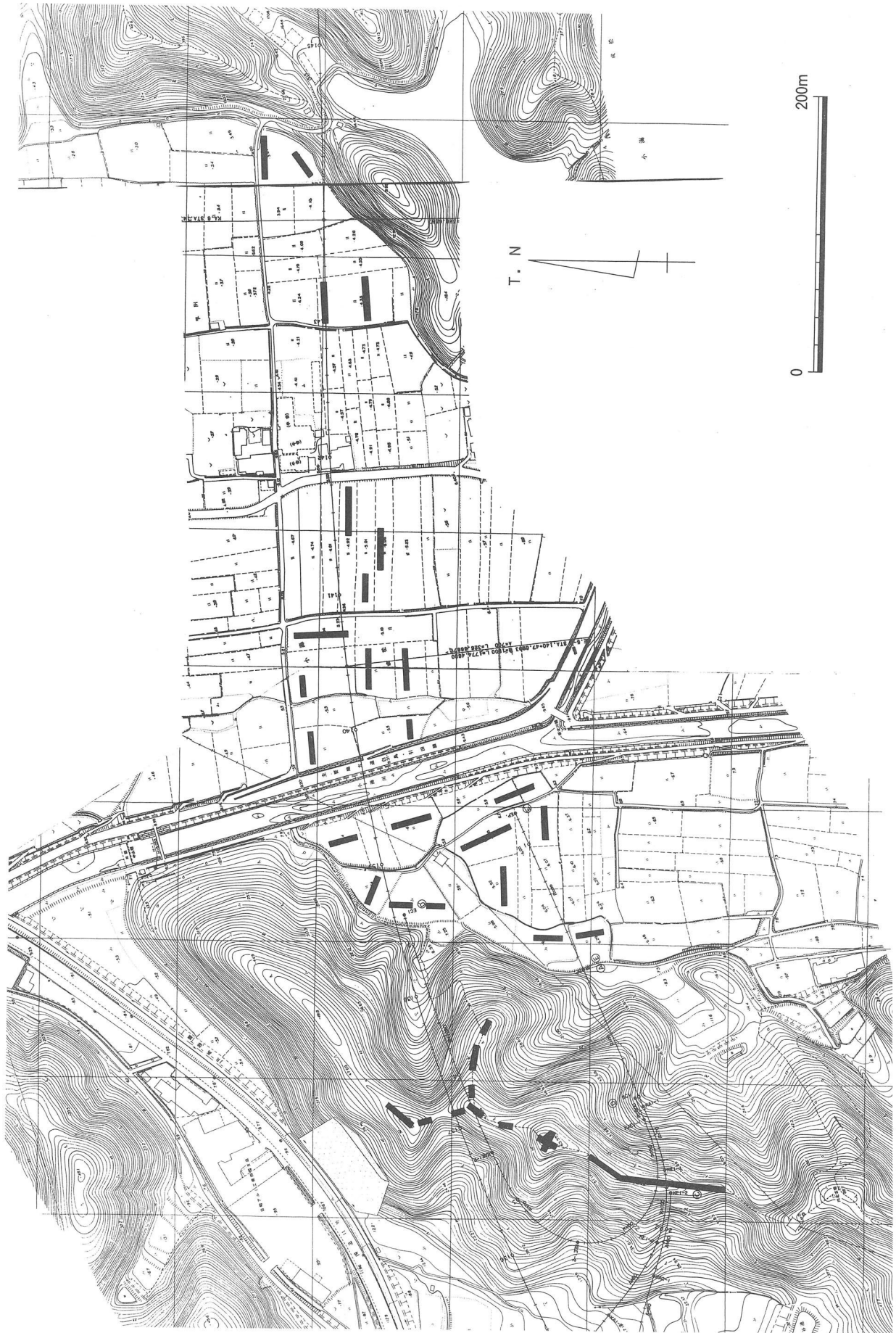




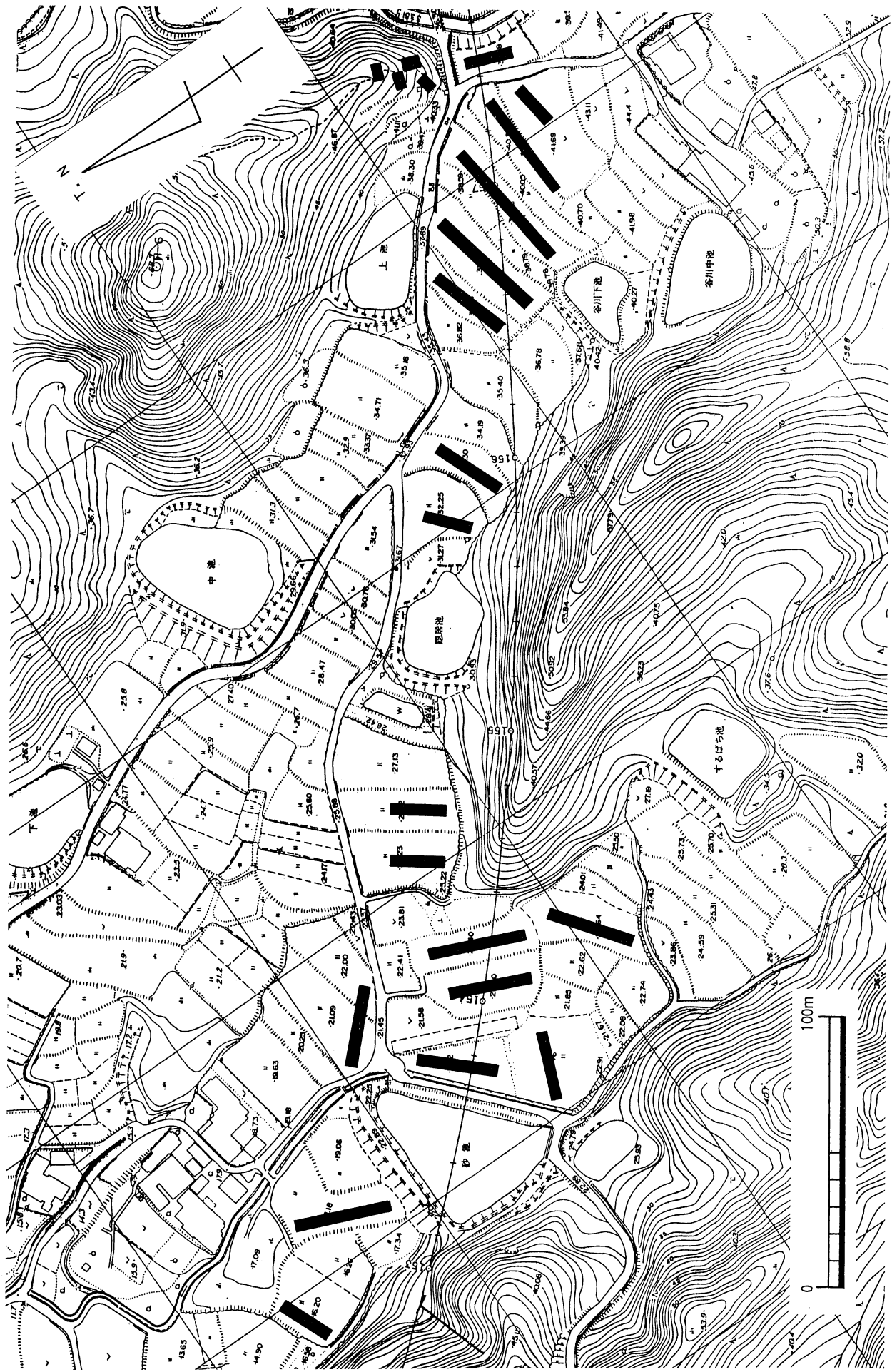
第7図 下屋敷地区予備調査トレンチ配置図 (1/2,000)



第8図 谷地区予備調査トレンチ配置図 (1/2,000)



第9図 塩屋地区予備調査トレンチ配置図 (1/4,000)



第10図 辺田地区予備調査トレンチ配置図 (1/2,000)

## 第2章 調査の概要

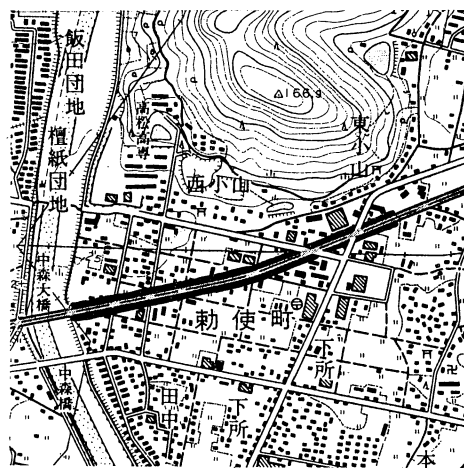
### 香川郡条里C地区

#### 1. 調査の方法

香川郡条里C地区は、高松市勅使町に所在する。遺跡の北側は紫雲山山地の南端にあたる浄願寺山があり、東方の御坊川(旧香東川)と西方の香東川に挟まれた平野上である。

今回の調査対象地は、四国横断自動車道(高松市内)の建設により国道11号線が両側に各々約4m拡幅される地域である。対象地は国道に面してかなりの部分が店舗、工場、駐車場などに造成され、元の地表面より1~2m嵩上げされている。このため重機の進入路の確保、掘削土置き場や掘削断面の安全勾配、埋め戻しの際の締め固めの問題など様々な技術的問題があった

ため、本来の地表面の残る水田や畑地においてトレンチ調査をおこない、遺跡の内容や拡がりを確認したうえで嵩上げ部分の対応を検討するとともに、トレンチ調査で遺構が確認された場合は可能な限り調査地を拡張して調査をおこなった。調査は年度の上半期と下半期に分け、上半期は香川郡条里C地区の西側7割(延長1km)の範囲について平成10年4月1日から5月31日までの2ヶ月間で実施した。



第11図 遺跡位置図(S=1/25,000)

#### 2. 調査の成果

上半期は4地点においてトレンチ調査を実施した。各トレンチの概要を記す。

第1地点(トレンチ幅1m, 長13m) 約70cmの造成土下に水田耕作土, 灰色粘質土, オリーブ色粘質土の順で堆積する。時期不明の遺物細片を2点採集したが、遺構は検出されなかった。

第3地点(トレンチ幅1m, 延長6m) 耕作土下に②灰色シルト質土, ③灰色粘質土が堆積し、地山となる。②③層は状況から溝状遺構の埋土と考えられ、トレンチ全体が溝状遺構に含まれると判断したが、調査範囲の関係で、規模・流向は確認できなかった。②層中から内面黒色の黒色土器碗の底部が出土した。

第4地点(トレンチ幅1m, 長17m) 深さ0.9m幅2m以上の溝状遺構を検出した。湧水のため壁面が崩落し十分な調査ができなかった。埋土は黒褐色粘土の上層, 淘汰の良い灰色砂の下層よりなる。条里型地割の坪界線に一致する溝と考えられる。遺物は採集されなかった。

第5地点(幅1m, 長31m, 拡張1.5×4.5m) 西端で重複する溝状遺構を検出した。これは幅1.5m深さ0.45mの溝(SD2)が埋没した後, 新たに幅0.6m深さ0.3mの溝(SD1)が掘削されている。SD2は黒褐色粘質土の上層, 褐灰色砂の下層よりなり, 下層から弥生時代後期の甕(下川津B類)の破片が出土した。SD1,2ともに条里型地割の坪界線に近接し流向も合致するものであるが,1点の出土遺物が遺構の年代を示すかどうかは確定できない。

以上, 第3~5地点から溝状遺構が検出され, 条里型地割との関連が想定される。このことから未買収地であった第2地点の調査ほか, 条里型地割の坪界にあたる部分において工事施工時に立会等を行う必要がある。

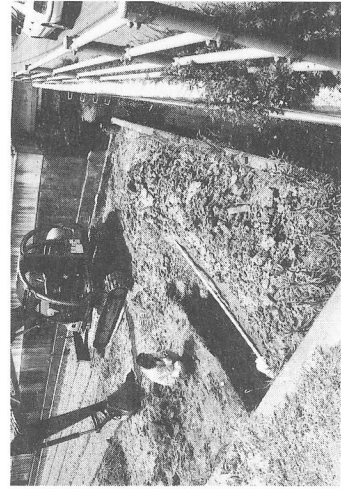
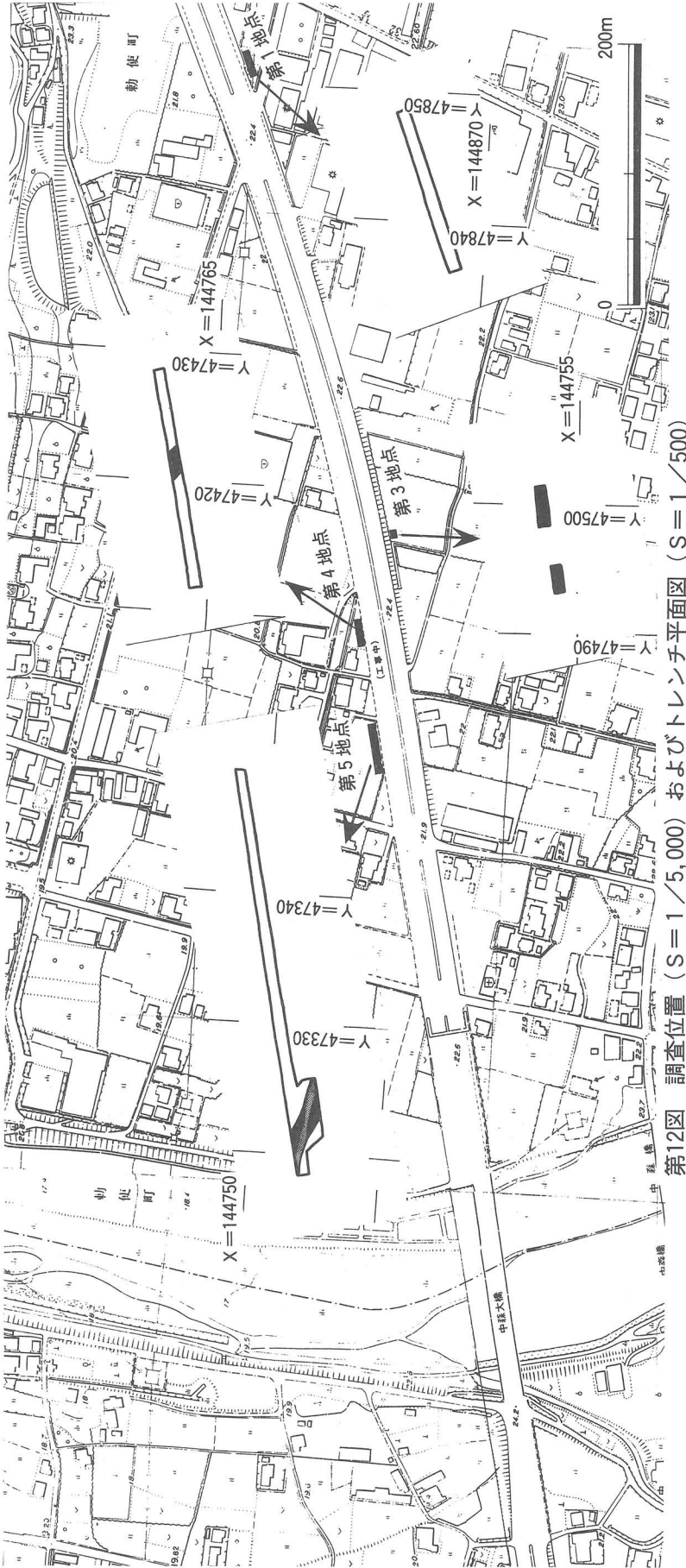


写真2 第3地点調査風景 (東から)

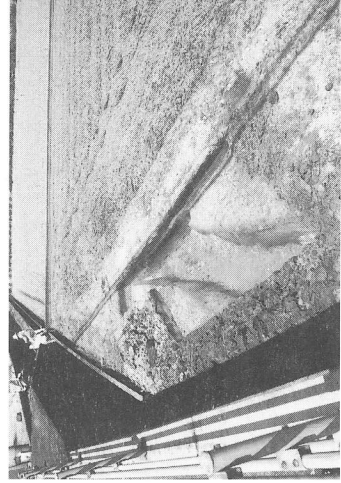
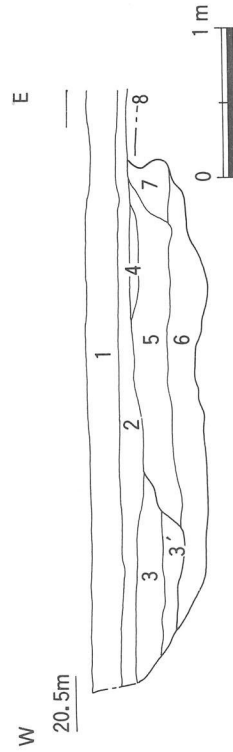


写真1 第5地点溝 (南東から)



- 1. 黒色シルト質土 (10YR 3/1) (水田耕土)
- 2. にぶい黄色シルト質土 (2.5Y 6/3) (Fe含)
- 3. 黄灰色シルト質土 (2.5Y 5/1) } SD 1
- 4. 褐灰色シルト質土 (10YR 5/1)
- 5. 黒褐色粘質土 (10YR 3/1) } SD 2
- 6. 褐灰色砂 (10YR 5/1)
- 7. 灰白色シルト質土 (10YR 7/1)
- 8. 灰白色粘質土 (10YR 7/1)

第13図 第5地点西端断面図 (S=1/500)

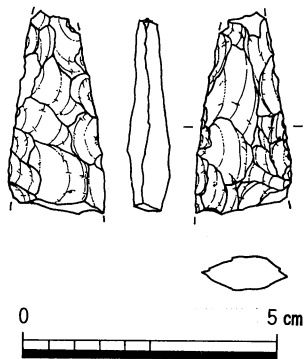
# 正箱遺跡

## 1. 調査の成果

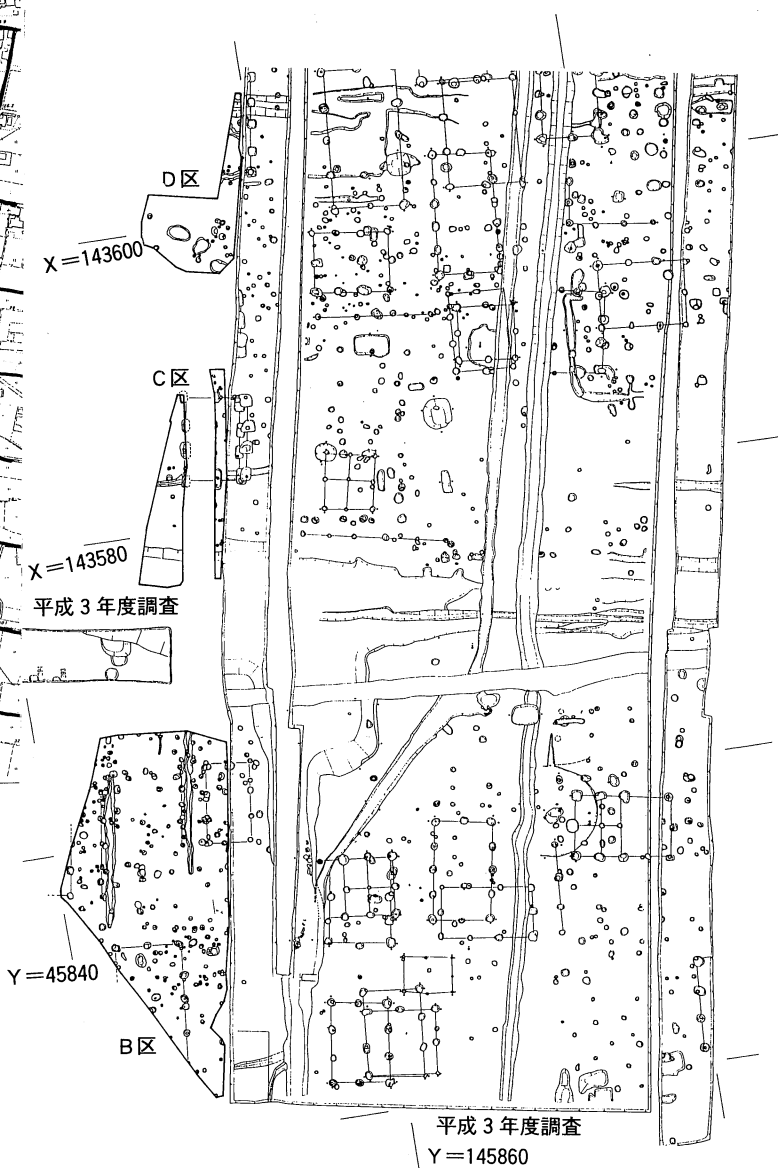
当遺跡は高松平野西南部を北流する古川の東岸、標高約26mの河岸段丘上に立地する。平成3年に県道檀紙御厩線部分で発掘調査が行われ、奈良～平安時代の集落跡が確認されている。今回は集落跡本体の西に隣接する地区を調査対象として、A～D区の4区画に分けて調査を行った。A区は現状で比高差約2.5mの段丘下面にあたる。古川による砂礫層の厚い河川堆積がB区の遺構面を切り込んで見られ、段丘化の時期は古代以降であることが判明した。B～D区では従前と同様8世紀前半～9世紀の柱穴が多数存在し、少なくとも4棟の掘立柱建物を復元することが可能である。いずれも南北棟で、北から約10度東偏する条里型地割の方向に合致する。そのほか弥生時代中期前半の土器溜状遺構が確認され、遺構面を形成する黄色系粘土層中および後世遺構に混在して尖頭器・横長剥片などの旧石器が出土した。



第14図 周辺既往調査地と条里型地割 (S=1/1,000)



第16図 C区包含層出土尖頭器 (S=2/3)



第15図 正箱遺跡遺構分布図 (S=1/400)

# 中 森 遺 跡

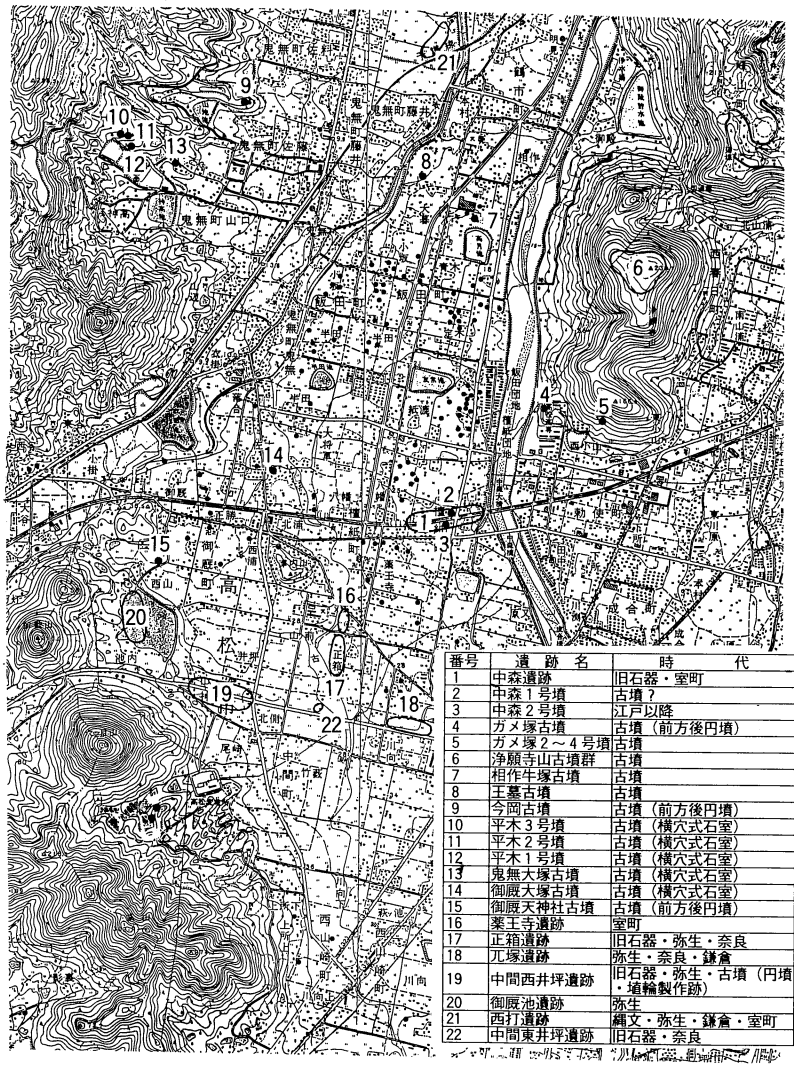
## 1. 立地と環境

現在、高松平野西部には瀬戸内海に向けて北流する本津川と香東川の2本の中規模河川がある。このうち香東川は江戸時代中期に改修工事が行われるまで、本流は高松平野中央部を流れていたことがわかっている。したがって現在の香東川の東岸には香東川の氾濫によって形成された沖積層が著しく発達し、網目状の旧河道跡が各所に残るのに対して、西岸は古期の扇状地面を留めており、表土層直下に安定した黄色粘土層や扇状地礫層を確認することができる。中森遺跡は香東川と本津川の支流である古川との間の標高約20mの扇状地上で新たに確認された遺跡である。

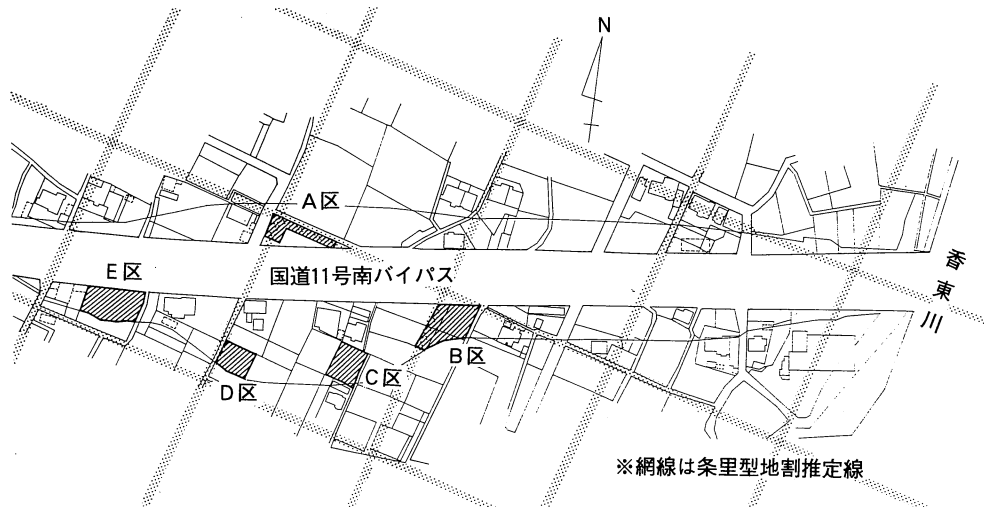
扇状地礫層を覆う黄色系粘土層中にはしばしば旧石器を包含することがある。中間東井坪遺跡では瀬戸内技法を反映する石器群がA T火山灰層直上から出土し、中間西井坪遺跡では角錐状石器を主体とする石器群が確認されている。そのほか正箱遺跡でナイフ形石器、角錐状石器もあり、上記の扇状地地帯において多くの旧石器時代の遺構が遺存していることが近年明らかになった。正箱遺跡では8世紀前半から9世紀にかけての集落が展開する。建物群は条里型地割に合致する方向性や配置をもっており、高松平野の地割の施工の初現期の状況を示している。平安期には一部建物の方向性などの変容が見られるが、その後中世の建物群は元塚遺跡などでみられるように地割に則した区画を復元する様子が窺え、さらに現在の条里景観に至っている点は、扇状地面を留めた高燥的な土地条件に由来して径水路網の局所的な変更が合理的でなかった環境がすでに古代において成立していた可能性を示すものである。

## 2. 調査の成果

当初は現状で遺存する条里型地割の地下遺構の状況を確認することを目的として、小規模に分断するA～Eの5ヶ所の調査区を設定した。調査の結果、条里坪堺の溝に加え、扇状地礫層を覆う黄色系粘土層で旧石器時代の遺構が確認され、また中世の屋敷地も確認されるなど、新たな知見を得ることができた。



第17図 周辺遺跡分布図 (S = 1 / 50,000)



第18図 中森遺跡調査地区割図 (S = 1 / 4,000)

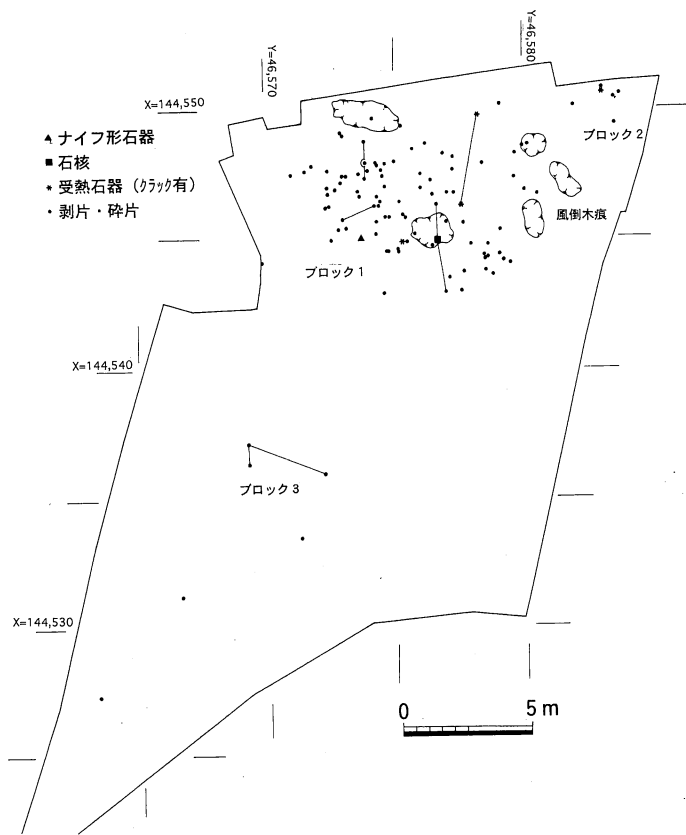
### <旧石器時代>

旧石器時代の遺構はA区、B区で合計3ヶ所の石器ブロックがある。A区ブロックはサヌカイト素材の大形横長剥片石核1点、横長剥片2点、ハリ質安山岩素材の石核素材1点の合計4個体で構成される直径2mの小規模なブロックである。B区ブロック1では直径約10mの範囲にナイフ形石器、横長剥片石核を含む合計100点の石器が出土した。ブロック2はブロック1の東に2mの間隔を隔てて4点の石器が分布し、さらに調査区外に広がるものと推定される。ブロック3はブロック1の南10mの地点で合計5点の石器が分布する散漫なブロックである。これらのブロックは旧香東川の扇状地堆積に起因すると推定される南東から北西にのびる幅5mほどの礫層隆起帯がやや窪む位置に該当するが、流路堆積層ではなく、礫層を覆う灰色粘土および黄色粘土層中に原位置を留めて遺存するものである。したがって出土した石器は風化は進むが、摩滅はほとんど見られない。ただし、表土直下で石器包含層が確認できることから、後世の削平を少なからず被っており、すでに散逸した石器も当然考慮する必要がある。なお、火山灰分析の結果、A区の石器包含層はAT火山ガラスのみでアカホヤを全く含まないが、B区の一部では混在程度の分量のアカホヤ火山ガラスが含まれる部分もある。

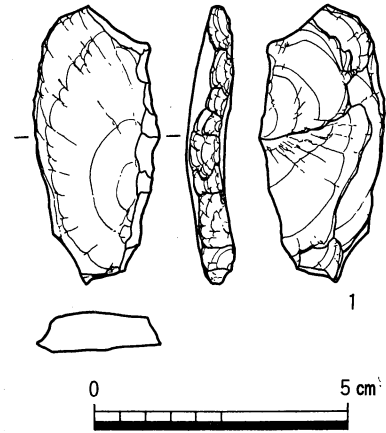
### <中世屋敷地跡>

E区で検出した中世の屋敷地には、幅約20mの範囲を溝で区画した掘立柱建物3棟、溝の外側に井戸1基が存在する。建物1は2間×3間の東西棟で南に縁が付属するもので、屋敷の中心となる母屋と推定される。建物3はその東に接する南北棟で、建物を取り巻く溝が付属する。建物3の廃絶後、区画溝が再掘削され、建物1が2間×5間に拡張する。建物2は建物1の北西側に位置する南北棟で、南に縁、東西に庇が付属する。各建物の形状や配置から、母屋(建物1)を中心に東が納屋、北西が離れと推定され、屋敷地における一つの単位を示している。出土した遺物は14世紀後半から16世紀までの時期幅をもつ。貯蔵具の甕・壺は備前焼や亀山焼、調理具の播鉢やこね鉢は在地産に加えて東播系が見られる。そのほか瀬戸・美濃系陶器、中国青磁も少量ある。注目できる資料として、金属器の鑄造を示す「鑄型片」「溶解炉片」「鉄滓」がある。いずれも小片であるが、屋敷地内で金属器生産を行った局面があったことを示す重要な資料である。また、ほとんど風化が進行せず、周縁に顕著な敲打痕を留めるサヌカイト製の塊石が出土した。その素材となりうる大形の塊石も認められる。これらは形状や使用痕などから、「火打石」であった可能性が高いと考えられる。

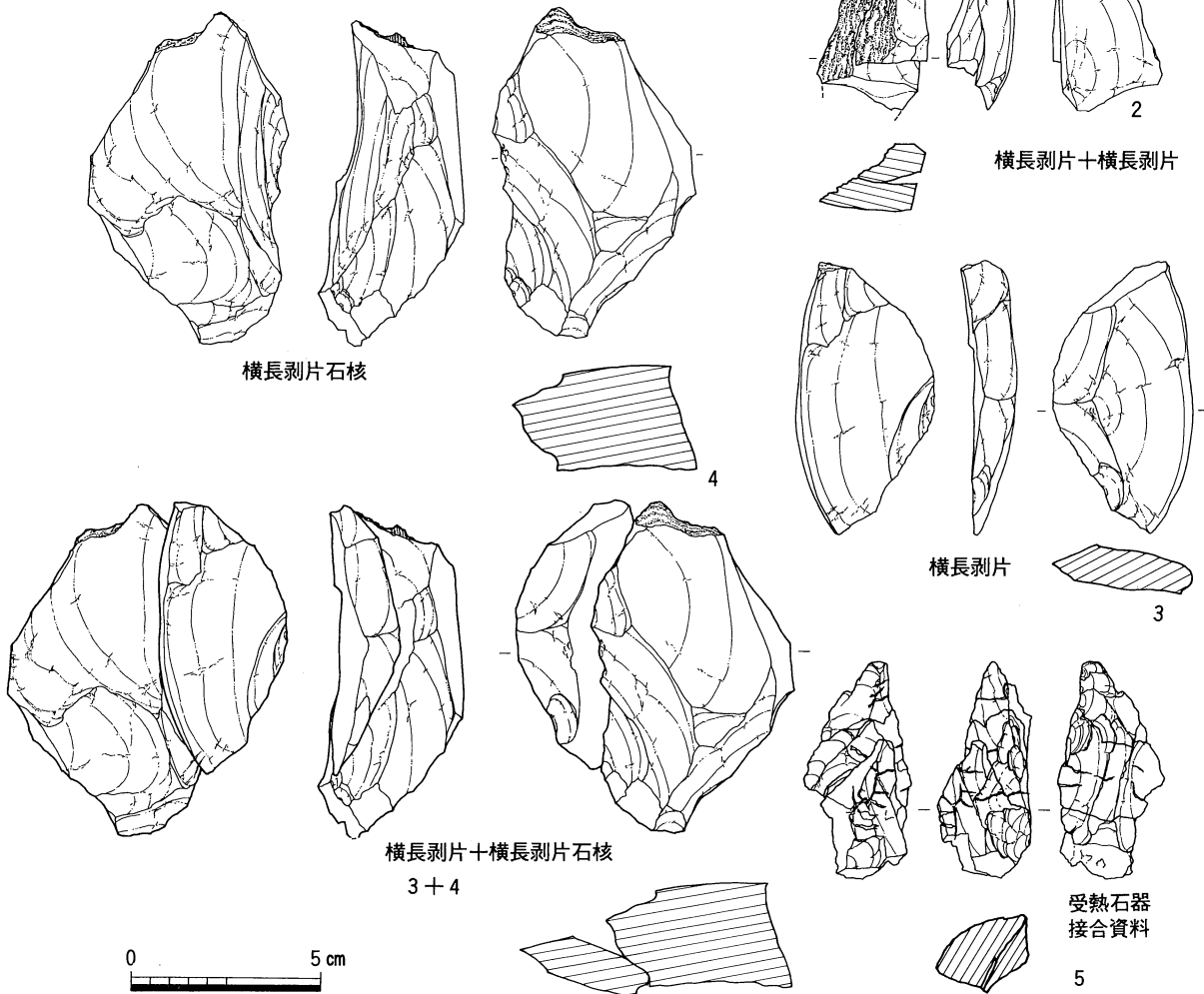




第19図 中森遺跡B区石器分布状況 (S = 1 / 300)



第20図 ナイフ形石器実測図 (S = 2 / 3)



第21図 接合資料実測図 (S = 1 / 2)

### <条里型地割溝>

各調査区で現状の坪界相当の位置において地割溝を確認した。これらの溝は14世紀後半以降に掘開されたもので、E区の屋敷地の時期と概ね一致する。A区では坪界線の交点部分において、2条の並走する南北水路のうち、東の1条が直角に屈曲する状況を確認した。またC区では坪界以外の場所で大溝が南北から東西に屈曲する状況も見られた。これらは地形の全体的な傾斜である南北方向のみならず、東西にも幹線水路を設定して広範な径水路網が存在したことを示し、坪界に合致しない基幹水路は細かな土地の起伏に応じて、坪内の田地割が適宜設定されたことを示唆する。また、これらの大溝は16世紀を下限として埋没することが判明した。

### 3. まとめ

中森遺跡の調査は次年度に継続する事業である。各時代ごとに今後の課題をまとめておく。旧石器時代は4ヶ所の石器ブロックが出土したが、扇状地礫層の起伏を広範に追跡すると、A区、B区ともに礫層の隆起の縁辺付近に存在することがわかる。礫層の隆起は当時の微高地の分布を示しており、その縁辺付近では今後旧石器の有無に注意を払う必要がある。中世の屋敷地は今回の3棟の建物が一つの単位を形成するものと推定されるが、条里景観における坪内の土地利用の実態を隣接地の調査で明らかにしていくことが必要となる。条里型地割の施工はこの地域に集落が形成される時期と同じく14世紀代に下ることが判明したが、正箱遺跡など比較的近隣で古代において施工された地域における坪界線との整合性の問題など、調査データを照合して実態を把握し、時代を大きく超えて方格子地割の規格が維持される技術的要因とその背景を検討する作業が今後必要となるであろう。

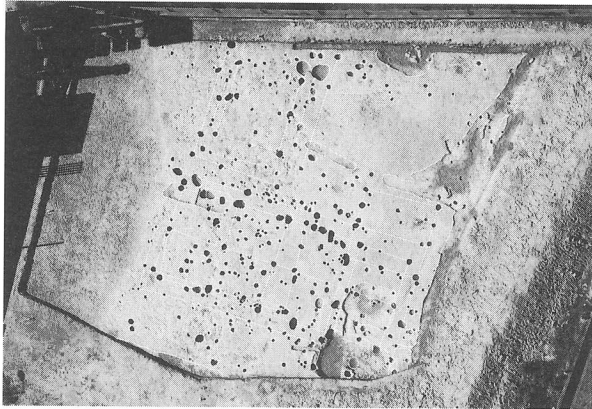


写真3 E区中世屋敷地空中写真



写真4 A区条里型地割坪界交点部分(南から)



写真5 B区石器ブロック1検出状況(西から)



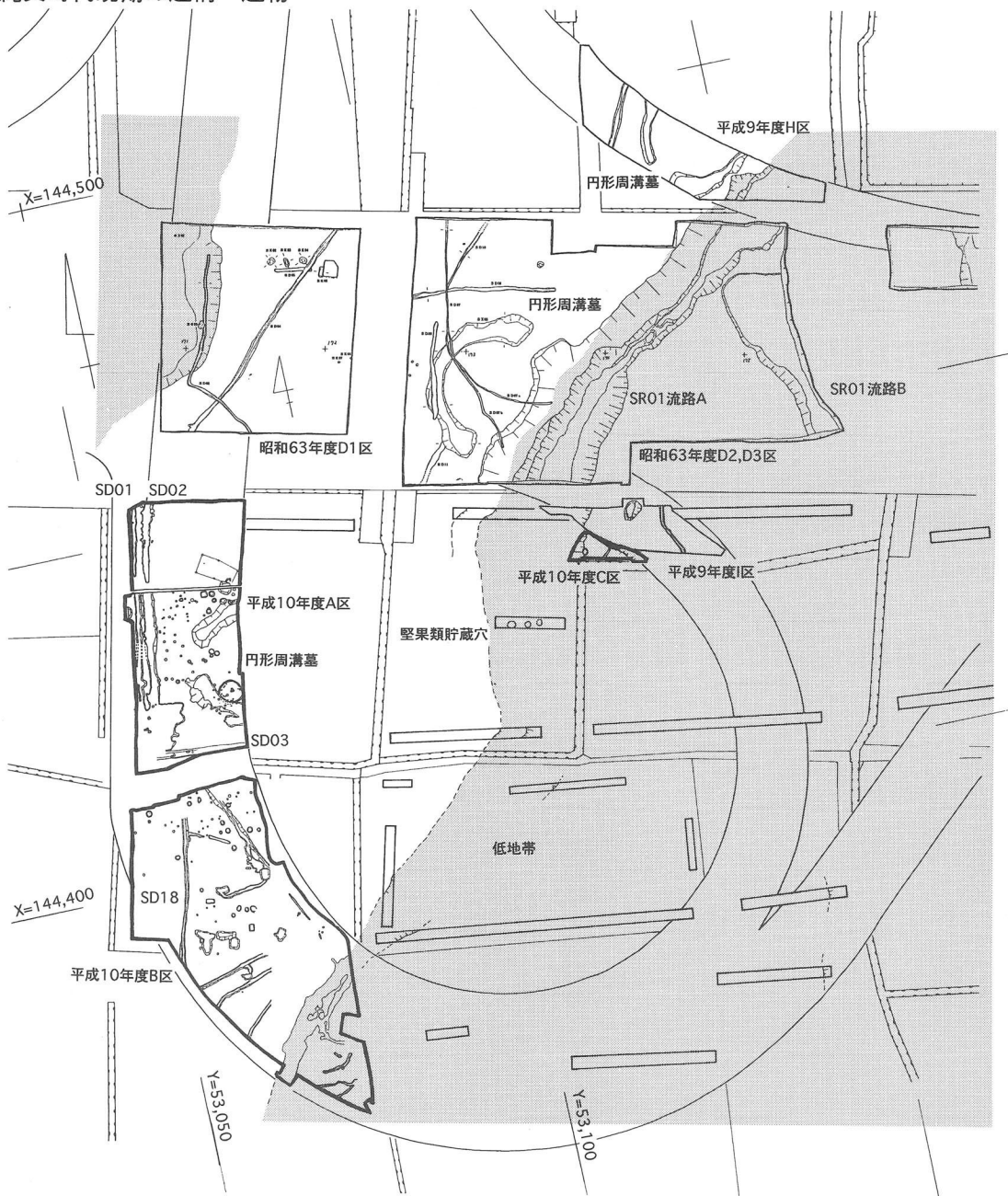
写真6 A区黄色粘土層旧石器出土状況(北から)

# 林・坊城遺跡

## 1. 調査の成果

当遺跡は昭和63年に高松東道路部分の発掘調査が行われ、縄文時代晩期末の木製農具など重要な遺構・遺物が出土した。その後、平成8年に四国横断自動車道高松中央IC（仮称）部分の予備調査、平成9年に490mの本調査が行われ、今年度は残余の1,728mの本調査を実施して当該事業に係る発掘調査が完了した。今年度の調査地はA～C区の3ヶ所に分かれており、A区は昭和63年度調査地の南に接し、B区はその南に、C区は平成9年度調査地の西に接する位置関係にある。

### (1) 縄文時代晩期の遺構・遺物



第22図 林・坊城遺跡調査地概要図 (S = 1 / 1,000)

B区およびC区で昭和63年度調査地SR01に対応する低地帯を確認した。C区の堆積状況は従前のデータと同じであるが、B区では微高地から東への低地帯の傾斜がきわめて緩慢で、明瞭な河道域が見られない。SR01流路Aに接続すると思われる流路SD10は幅1～2m、深さ0.35mでやや蛇行するものの、人工的な溝に近い形状である。SD11はSD10から東に派生する幅0.7m、深さ0.35mの溝で断面V字状に掘り直した痕跡が見られる。また、SD10北端から北西に派生するSD25は幅0.8m、深さ0.25mで断面はV字状、平面的には直線に掘削され微高地を斜めに貫く形状の溝である。両溝が派生する地点から1mほど下流にはいずれも拳大ほどの自然礫の集積が見られる。SD11側では基盤層ブロックを多く含む土砂とともに礫集積が水流を部分的に塞ぐような形状で設置される。しかし流路底面では杭跡などは見られなかった。木杭等を使用せず土砂礫を一時的に配置する簡易な導水施設の可能性が考えられよう。SD10は茶褐色粘土、黒褐色粘土、砂礫の3層に区分でき、SD11側の礫集積は下層上面、SD25側は中層上面で確認できたことから、両溝の機能した時期には前後関係がある。SD11側の礫集積の南では、丁度分岐点付近の中層で縄文時代晩期末の突帯文土器群が出土した。上層の出土遺物は小片のみで時期を示す資料に欠けるが、SD25からは橙褐色を呈し粗い砂粒を含む突帯文系甕口縁部片が出土しており、SD10上層およびSD25は弥生時代前期前半に位置づけられよう。また、B区北側ではSD25に切られて淡茶褐色系埋土の柱穴が確認された。同様の柱穴はB区北側で15個ほど、中央部分で10個ほどが確認できた。うち1つから突帯文期の浅鉢口縁部片が出土した。微高地で認められる突帯文期の希少な居住痕跡の一つである。SD10から出土した石器は砂岩製を除くとすべてサヌカイトの剥片石器で、石鏃5点、スクレイパー2点、打製石斧などがある。

なお、これらの遺構が確認された面から0.15mほど下位の面で、強く蛇行する小規模な溝状窪地を検出した。直径30cmの範囲に多量のサヌカイト剥片・碎片および砂岩叩石片が出土する一角がある。時期は突帯文期以前と推定される。昭和63年度調査では晩期中葉の遺物が少量出土していることから、その時期の可能性が现阶段ではもっとも高い。

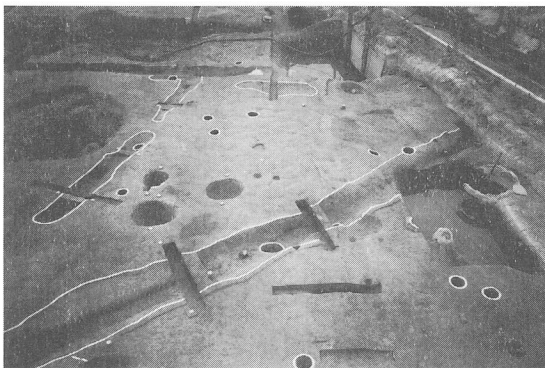
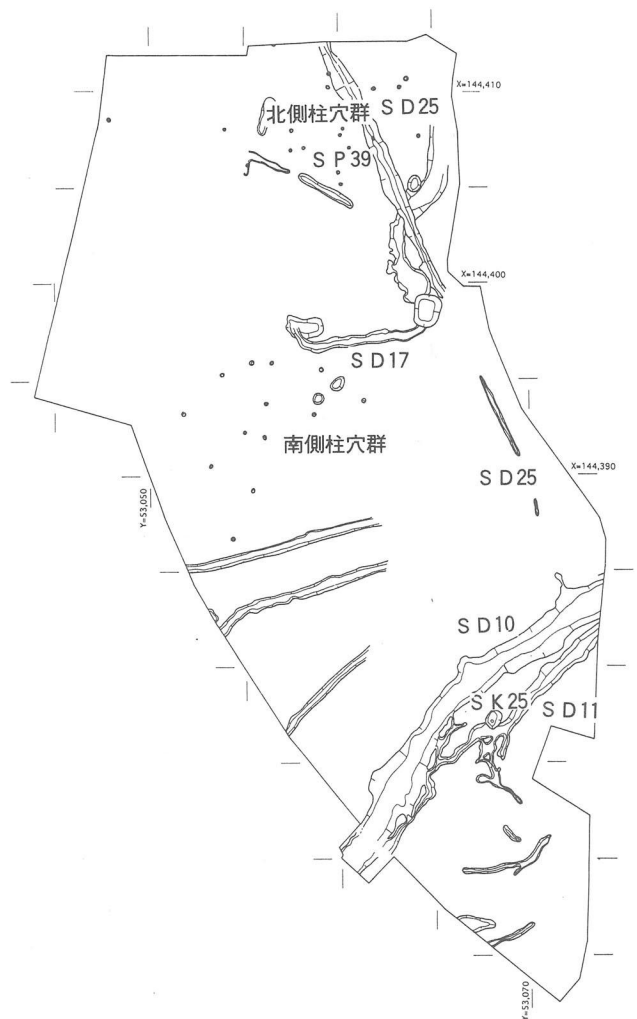
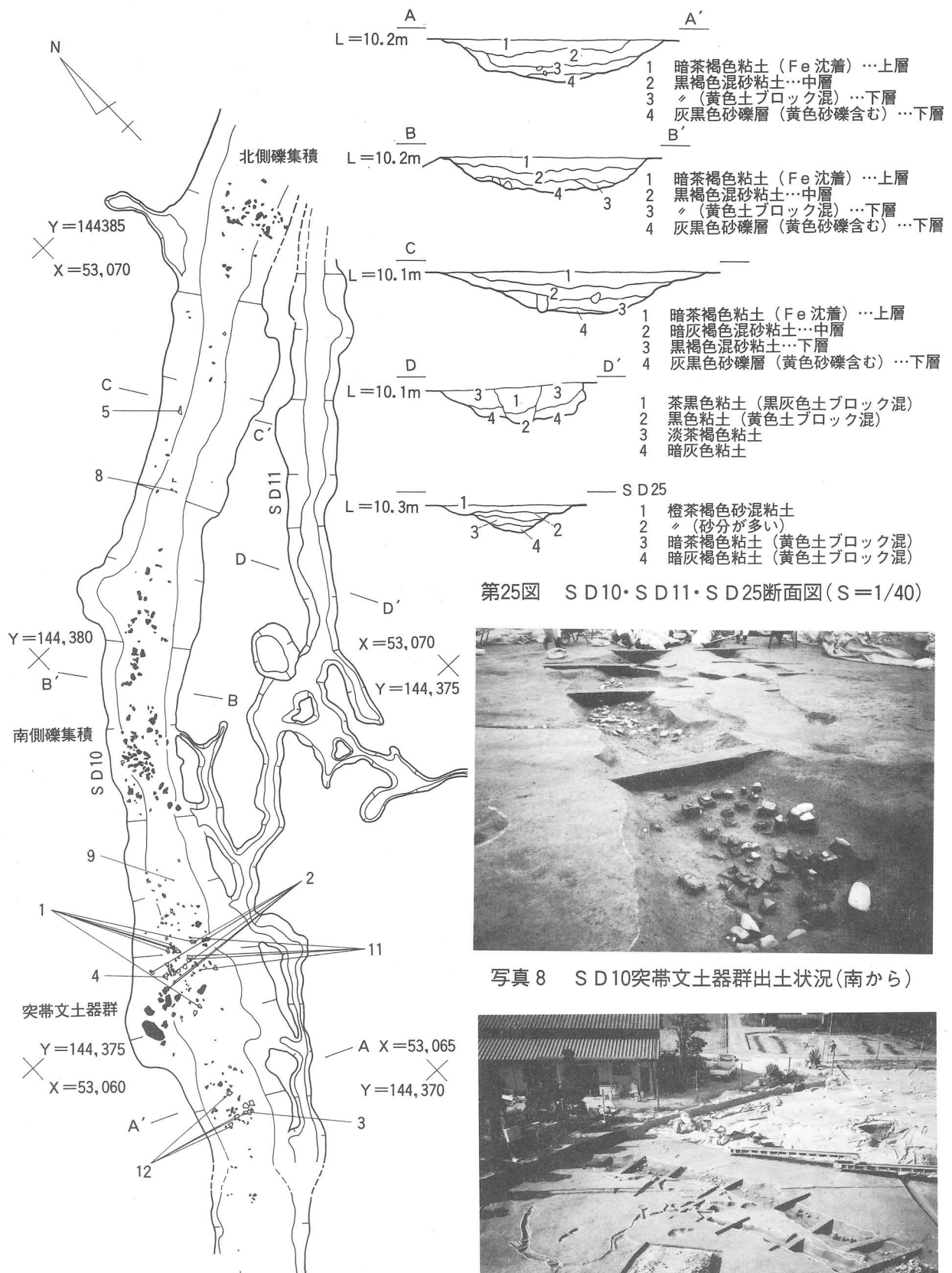


写真7 B区SD25および北側柱穴群(東から)



第23図 B区縄文時代晩期～弥生前期遺構分布図(S=1/400)



第25図 S D10・S D11・S D25断面図 (S=1/40)

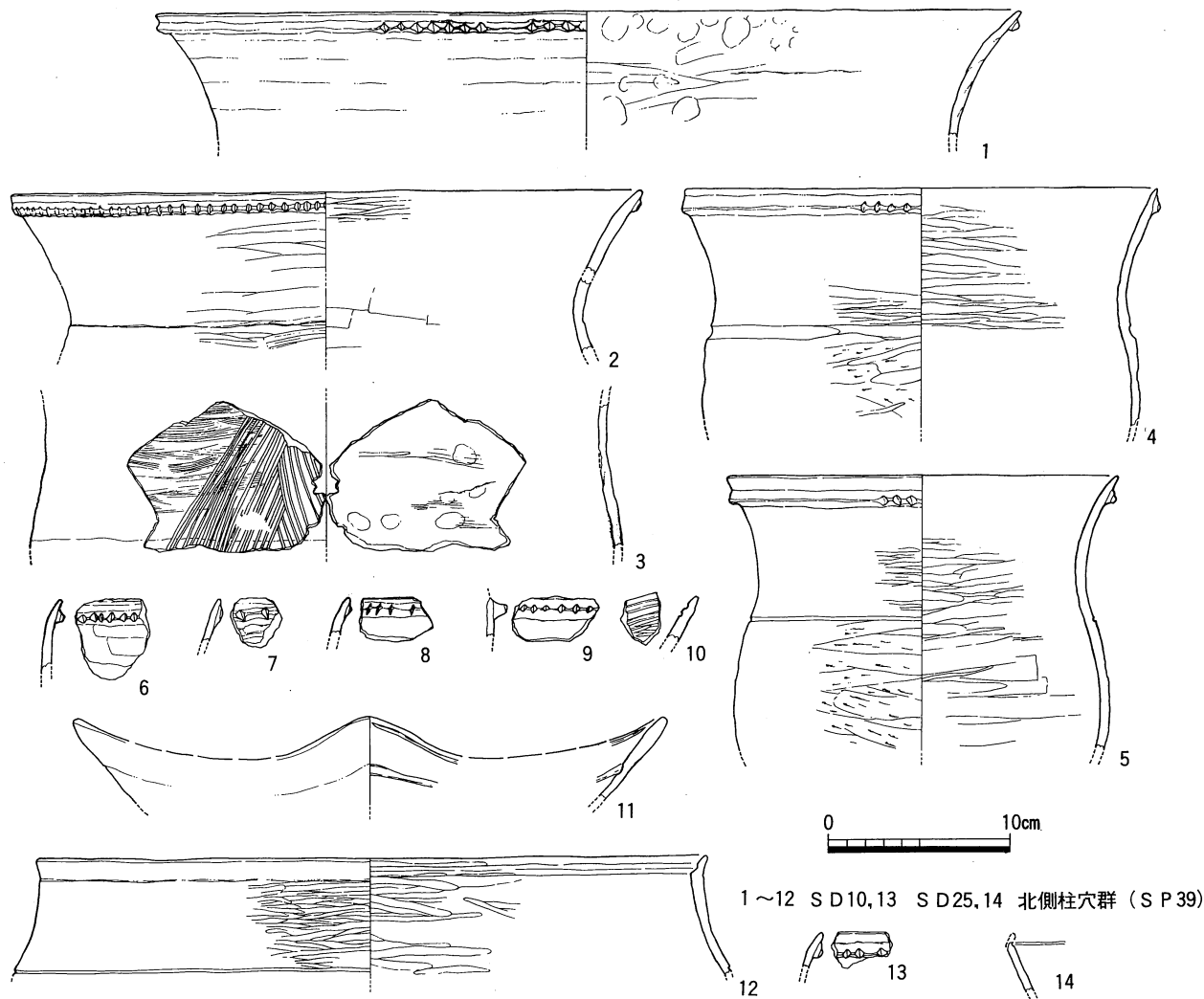


写真8 S D10突帯文土器群出土状況(南から)



写真9 S D10・S D11全景(東から)

第24図 B区S D10平面図 (S=1/100)



第26図 SD10・SD25・SP39出土器実測図 (S=1/4)

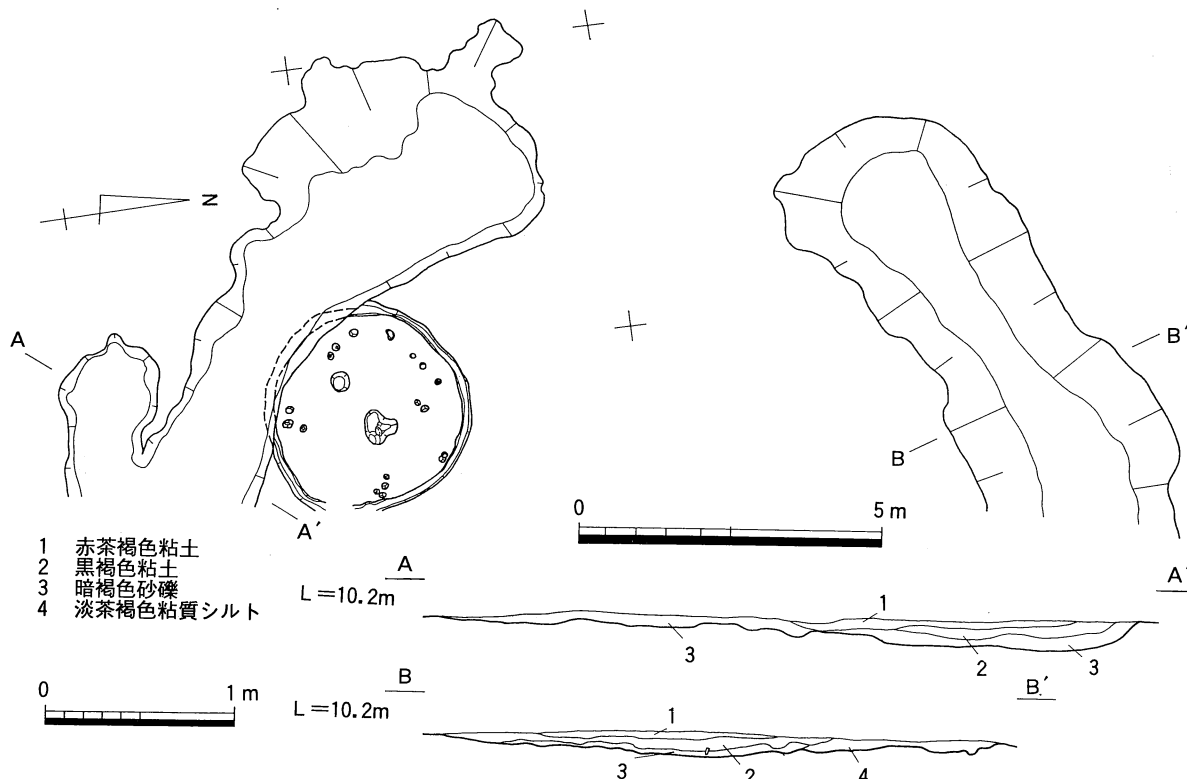
番号	遺構	器種	法量・残存度	形態の特徴	製作技法上の特徴	胎土・焼成	色調
1	SD10	深鉢	口径：47.2cm 残存：1/10	口頸部が大きく外反。口縁端部を面取りし、口縁部から5mm下がって細い突帯を貼付。刻目は深く大きい。	2cm幅の粘土紐を内傾接合。内外面を指押さへ、ナデ整形後、横方向に細かな条線を伴う板ナデ状の擦過。	0.5~1.0mmの石英・長石が多く、最大4.0mmの砂粒を含む。焼成は良好。	外面：淡灰褐、内面：黒褐、断面：黒
2	SD10	深鉢	口径：34.5cm 残存：1/8 口縁部片と頸部片を図上で接合復元	口頸部境で強くくびれて、口縁部が斜上方に直線的に開く。口縁部から3mm下がって扁平な突帯を貼付。刻目は密で縦長状。	口頸部内外面は横方向の擦過。胴部上端は二枚貝条痕。	1.0~2.0mmの石英・長石・赤色斑粒が多く、最大4.5mmの砂粒を含む。焼成は不良で、胎土中に炭化繊維を多く含む。	内外面：黄褐、断面：淡橙白
3	SD10	深鉢	胴部径：32.7cm 残存：1/10 頸部境の屈曲部で傾きを推定	頸部境の屈曲や口頸部の反転が緩慢。口頸部全体に多量の斜行沈線文を施す。	内傾接合。外面は横方向の刷毛状調整。内面は横方向の擦過。	0.5~3.0mmの石英・長石を多く含む。粒径が揃わない。焼成は良好。	内外面：暗黄褐、断面：赤橙
4	SD10	深鉢	口径：26.0cm 残存：1/8 頸部境の沈線で傾きを推定	頸部境からやや上で緩やかにくびれ、口縁部が斜上方に直線的に開く。口縁部にほぼ接して突帯を貼付。刻目は浅い。頸部境に強いナデによる太目の沈線を施す。	胴部外面は横方向のヘラケズリ。口頸部はナデ調整。口頸部内面はヘラミガキ。胴部内面はナデ。	0.5~3.0mmの石英・長石を多く含む。粒径が揃わない。焼成は不良で、胎土中に炭化繊維を少量含む。	淡褐
5	SD10	深鉢	口径21.6cm 残存：1/10 頸部境の沈線で傾きを推定	中膨らみの胴部から口頸部が緩やかに反転して外反。口縁部から8mm下がって、細い突帯を貼付。刻目はやや浅い。	胴部外面はヘラケズリ。口頸部は内外面ともヘラミガキ。胴部内面は精緻な板ナデ。	0.5~1.0mmの粒径が揃った石英・長石が多い。焼成はやや不良で、少量の炭化繊維が混じる。	内外面：淡黄灰、断面：淡灰
6	SD10	深鉢	口縁部片	口頸部が緩やかに外反し、口縁端部がやや屈曲する。口縁部から8mm下がって突帯を貼付。刻目はやや密。	内外面ナデ調整。	1.0mmの粒径が揃った石英・長石が多い。焼成は良好。	黒
7	SD10	深鉢	口縁部片	口縁部から8mm下がって扁平な突帯を貼付。刻目は浅い。	内外面ナデ調整。	0.5mm以下の微細な砂粒が多い。焼成は良好。	茶褐
8	SD10	深鉢	口縁部片	口縁部にはほぼ接して突帯を貼付。刻目は不明瞭。	摩擦のため調整不明。	0.5~2.0mmの粒径が揃った石英・長石が多い。焼成は良好。	外断面：暗茶褐、内面：淡茶褐
9	SD10	深鉢	口縁部？	内面剥離のため器形不明。突帯は太く、刻目は浅い。	摩擦のため調整不明。	1.5mmの石英・長石が少量。焼成は良好。	外面：黄橙、断面：淡灰
10	SD10	浅鉢	口縁部 器体の湾曲から波状口縁と推定	外反する口縁部の内面に2条沈線。沈線施文後ヘラミガキ。	内外面ヘラミガキ。	0.5mm以下の砂粒が少量。焼成は良好。	外面：暗茶褐、内面：黄灰、断面：茶褐
11	SD10	浅鉢	口径、傾きは推定復元	口縁部の屈曲が著しく退化。内面に2条沈線。沈線施文後のヘラミガキ。	内外面ヘラミガキ。	0.5~5.0mmの石英・長石を多く含む。粒径が揃わない。焼成は不良で、胎土中に炭化繊維を少量含む。	内外面：黒褐、断面：灰橙
12	SD10	浅鉢	口径：36.6cm 残存：1/4	内傾する口頸部の中程から口縁部がやや直立気味となる。口縁部内面に幅広い沈線。頸部境に細い沈線。沈線施文後のヘラミガキ。	内外面ヘラミガキ。	0.5~5.0mmの石英・長石を多く含む。粒径が揃わない。焼成は良好。	内外面：暗褐、断面：明橙
13	SD25	深鉢	口縁部片	口縁端部から7mm下がって突帯貼付。刻目は密で浅い。	摩擦のため調整不明。	0.5~6.0mmの石英・長石を少量含む。粒径が揃わない。焼成は良好。	内外面：橙、断面：黒褐
14	SP39	浅鉢	口頸部片	直線的に内傾する口頸部の上端に浅い沈線を1条施文。	摩擦のため調整不明。	0.5~1.0mmの粒径が揃った石英・長石が多い。焼成は不良、炭化繊維が混じる。	内外面：灰白、断面：灰

第2表 SD10・SD25・SP39出土土器観察表

## (2) 弥生時代の遺構・遺物

A区で円形周溝墓を1基確認した。墳墓の東半分は調査区から外れ、埋葬主体部も削平されて消滅する。周溝から出土した遺物はきわめて少量であるが、壺口縁部片などの特徴から後期中葉と推定される。周溝の下端から復元される墳丘の直径は13mをはかり、墳丘西側に陸橋をもつ。これまで当遺跡で確認された2基とほぼ同じ大きさで、所属時期にも大きな差は見られない。SR01の西岸に約20mの等間隔で等質的な墳墓が配置された状況が復元できる。周溝墓以外の埋葬遺構は確認されなかった。

また、周溝墓に切られて円形の堅穴住居跡が検出された。直径3.4mで中央に2穴主柱をもつ形式で壁溝をもつ。出土遺物はサヌカイト剥片1点のみで、所属時期は不明である。



第27図 円形周溝墓SR01実測図（平面S=1/125, 断面S=1/40）

## (3) 古代・中世の遺構・遺物

A区西側で南北方向の条里型地割坪界溝（SD02・03）を、B区でも同様の坪界溝（SD18）を確認した。SD02では下層の砂礫層に8世紀、上層のシルト層に古代末の土器を含む。調査区南端の坪界交点で溝は一旦途切れ、B区の中世溝SD18とは直線的には接続しない。またB区南端ではSD18に切られて北から南に向かって溝底が傾斜する8世紀の溝SD20が認められ、少なくとも初期の条里型地割施工段階ではA区坪界交点からSD20までの間の微高地を境に北と南で排水の方向が異なっていたものと考えられる。なお、東西坪界に相当するA区の中世溝SD03は現在の用水路がやや南方向にずれるのと同じ方向に乱れており、地割りの部分的な乱れが中世段階まで遡ることがわかる。

## 2. まとめ

今回の調査では、突帯文期の居住遺構や用水路関係と推定される遺構、弥生時代の円形周溝墓、初期の条里型地割坪界溝などを確認した点で意義深い。今後、予備調査データを含めた遺跡内の微地形と遺構分布の整合性について検証していく必要が認められる。

# 東山崎・水田遺跡

## 1. 調査の成果

調査対象地は国道11号線東バイパスの両側5m幅の拡幅道路部分にあたり、昭和63年度に調査を行った東山崎・水田遺跡のC区～E区に隣接する。調査対象面積は1,978㎡で、土地の引渡しが行われている部分について、平成10年7月1日～9月30日まで直営方式で調査を行った。

昭和63年度の調査時には、C・E地区で16世紀前半～末、D地区で16世紀末～17世紀代、E地区で13世紀前半～15世紀初頭の、溝で区画された屋敷地が検出された。中でもC地区で検出した屋敷地は、溝で囲まれた上に更に内部を溝により4つに区画しており、中心となる地区の掘立柱建物群は規模が大きく、富裕農民の屋敷地が想定されている。また、前回の調査では同時期の遺跡としてはやや量の多い輸入陶磁器類や呪符木簡が出土した。

### (1) C地区隣接区（A～C区）

これらの調査区は昭和63年度調査区のC地区に隣接する。C地区では周囲を溝で区画した16世紀代の規模の大きい屋敷地が検出されている。

A区からはおもに南北方向の溝群を検出した。いずれも昭和63年度調査部分の延長部分で、屋敷地の西側を走る溝である。

S D04 屋敷地の西を限る溝である。幅約2.5m、深さ60cmで、埋土中からは土師器土鍋、土師器播鉢が出土した。

S D05 S D04の東側1.6mで検出した。幅0.7m、深さ30cmである。S D05は調査区の南端で東側へ分岐するが、これらは土層から前後関係は認められず、同時併存と考えられる。昭和63年度調査のS D09の北への延長が認められないことから、S D05の分岐する溝はS D09へつながり、北側を画すると思われる。埋土中からは土師器杯、土師器土釜が出土した。

S D06 S D05の東側8mで検出した。幅2.5m、深さ30cmである。埋土中からは土師器小皿が出土した。

S D07 S D06の東側1.5mで検出した。溝の東肩は調査区外へ延びる。深さ40cm、埋土中からは土師器小皿、土師器土釜が出土した。

B区からは西端付近で溝を、その東側からは夥しい数のピット群を検出した。B区は屋敷地の中心部が想定されたが、屋敷地の北側を画する施設はなく、屋敷地はさらに北へ広がる。ピットからは土師器杯、土師器土釜、青磁椀、備前焼壺等が出土したが、ほとんどは土師器の小破片であった。

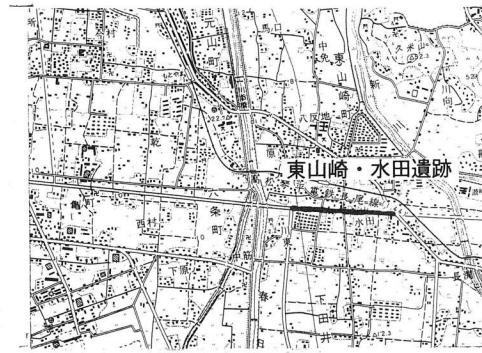
S D02 B区の西端付近で検出した。幅1.3m、深さ30cmである。この溝は屋敷地の内部を区画する溝であり、これより東で多数のピットを検出した。

C区では昭和63年度調査の延長部で、屋敷地の東側を画する溝2条を検出した。

S D01 C区の西端で検出した。屋敷地の東側を画する内側の溝である。深さ45cm、西肩は調査区外へ延びる。埋土は概ね上層と下層に分けられ、下層からは多くの植物遺体が出土した。埋土中からは土師器土釜が出土した。

S D02 C区東半部の南側と東側の調査区際に沿って検出した。溝の北東方向の部分は深さ60cm程度、溝の南・東肩は調査区外へ延び規模は不明である。埋土中からは土師質土器焙烙が出土しており、18世紀代まで機能していたようである。隣接する現在の用水路もS D02と同方向に屈曲しており、この溝の





第28図 遺跡位置図 (1/50,000)

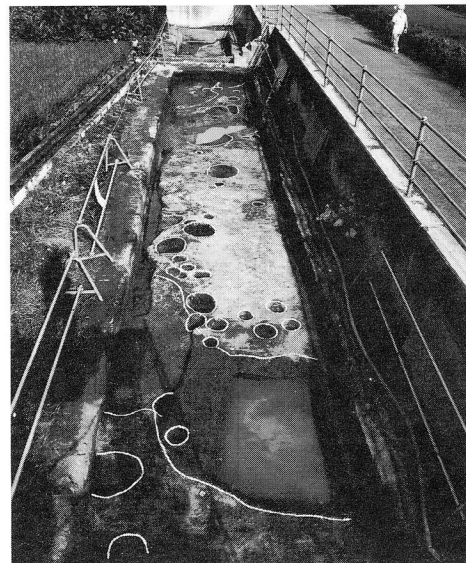
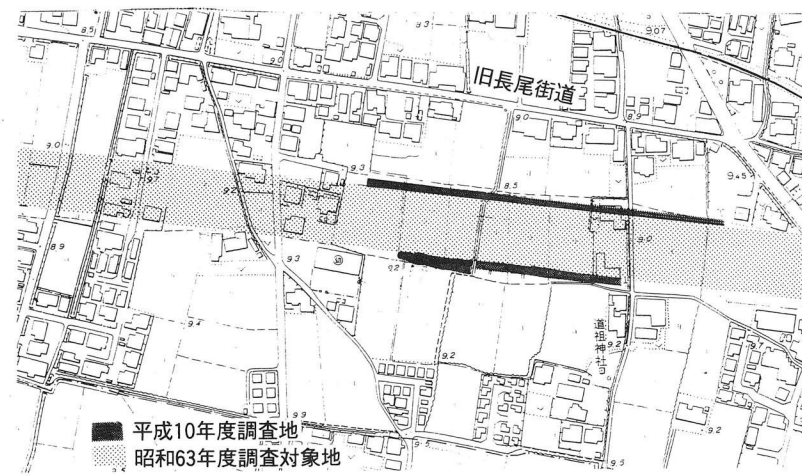


写真10 H区 全景 (西から)



写真11 H区 (東半) 全景 (東から)



第29図 周辺地割図 (1/5,000)

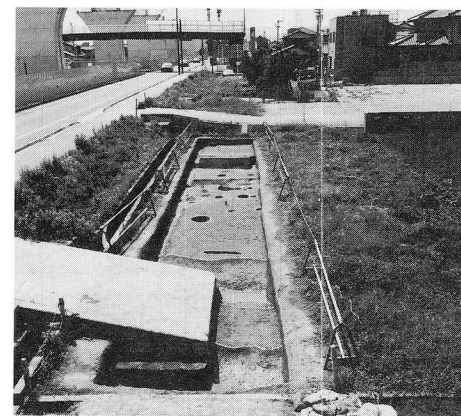
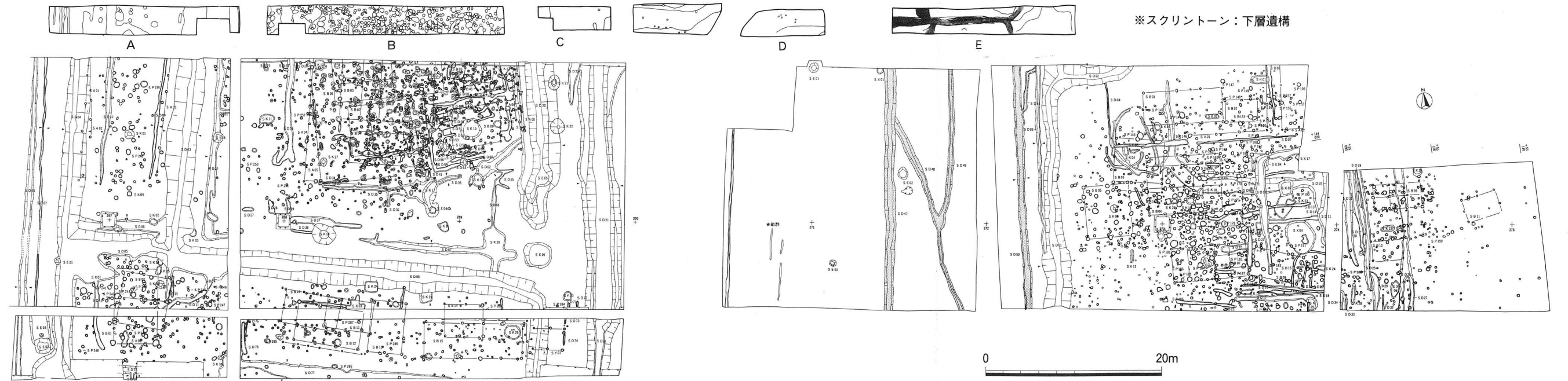


写真12 A区全景 (東から)

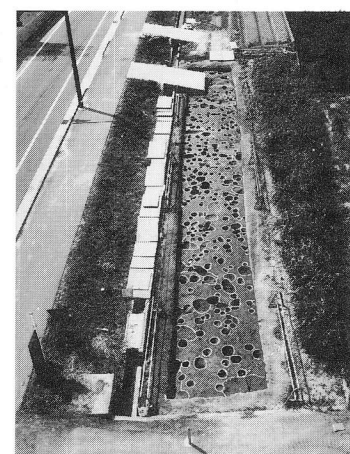


写真13 B区全景 (東から)

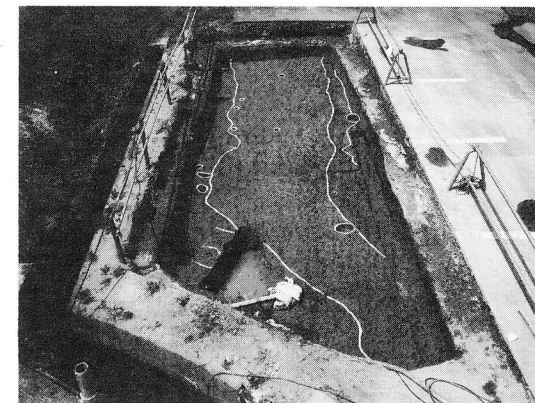


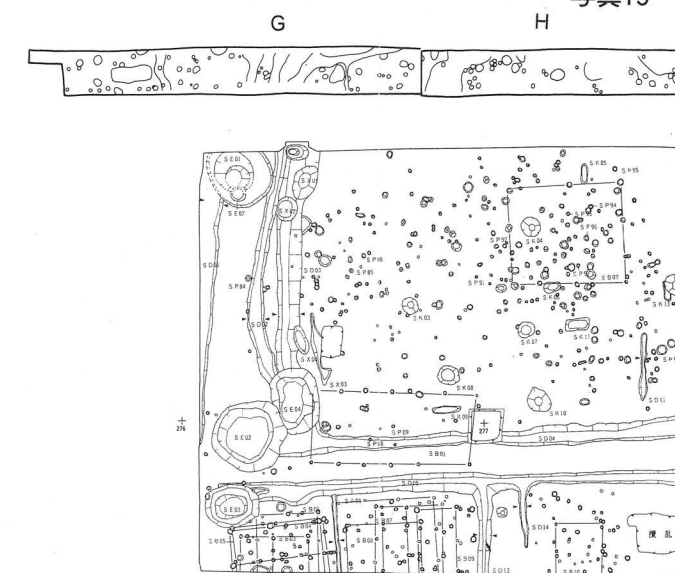
写真14 C区 (東半) 全景 (西から)



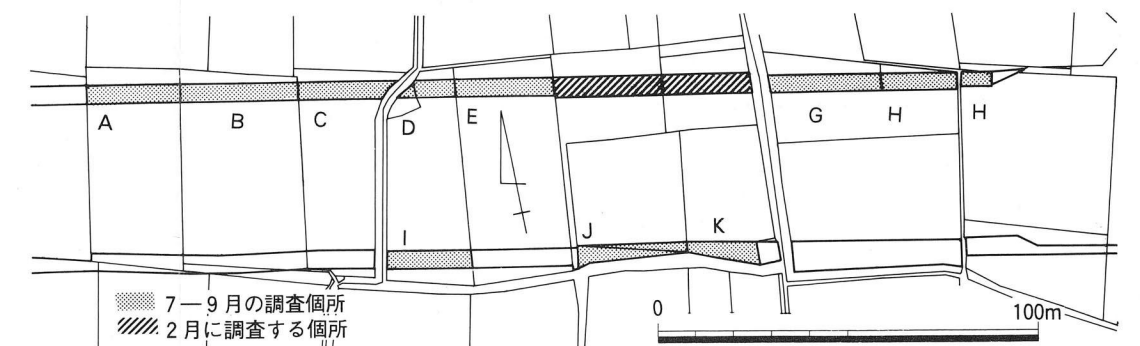
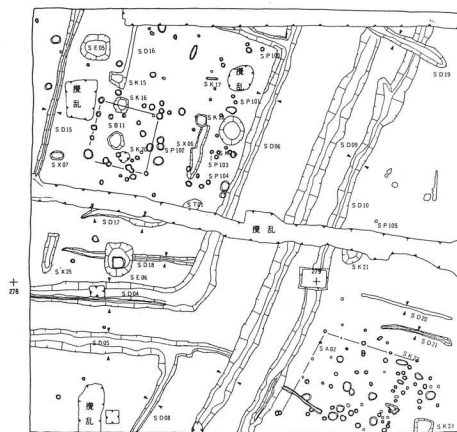
写真15 G区全景 (東から)



写真16 J区全景 (南から)



第31図 遺構配置図 (1/500)



第30図 調査区割図 (1/2,000)

方向性は現在まで踏襲しているようである。前回の調査ではこの溝の延長部分で呪符木簡が出土した。

## (2) D地区隣接区 (D・E・I・J・K地区)

これらの地区は昭和63年度調査区のD地区に隣接する。D調査区では東側を溝で区画された16世紀末～17世紀代の屋敷地が検出された。今回は屋敷地の中心部分が想定された場所は未引渡地であったため調査は行えなかった。今回の調査ではD・E区では条里型地割の坪界線と坪界線の間位置する東西方向の溝を、I・J・K区では小規模のピット群を検出した。またE区では遺構面を2面確認した。D区S D01 D区の南端で検出した東西方向の溝である。深さ35cm、幅は調査区外へ延びるため不明である。18世紀代の磁器皿、陶器播鉢が出土した。溝の時期はC区S D02と重なるが、埋土や現在の溝の方向を考えれば同じ溝とは考えにくく、C区S D02はそのまま北へ延び、D区S D01はそこから枝分かれする溝と思われる。

E区S D01 E区東端、第1遺構面で検出した南北方向の溝である。南側では幅5.4m、深さ35cmと大きい、北側では幅1.5m、深さ15cmと規模が急激に小さくなる。今回の調査区では時期の遡る遺物も多く出土しており、13世紀代の溝を破壊して溝を掘り込んだようである。

E区S D03・04 第2遺構面で検出した東西方向の溝である。2条がほぼ重複しているが、土層断面からS D03の方が古い。調査区東端付近でS D03は北側へ、S D04は南側へ屈曲する。2条とも概ね幅0.5m、深さ20cmである。S D04から瓦器椀・皿、土師質土器杯等が出土している。

I・J・K区 いずれも昭和63年度調査区D区の南側にあたる。いずれの調査区からも小規模のピット群を検出した。I区に隣接する調査区ではピット群は検出されておらず、性格は不明である。J区では隣接するD調査区に比べればピットの数少ない。K区は遺構密度はきわめて希薄で、検出しているピットは埋土から近代以降のものと思われる。

## (3) E地区隣接地区 (G・H地区)

いずれも昭和63年度調査E調査区の北側に隣接する。前回の調査では13世紀～16世紀の屋敷地が検出された。今回の調査では13世紀後半の屋敷地の西側と北側を画する溝、ピット群を検出した。ピット群は屋敷地の西側を画する溝の西側へも広がっており、これらのピットは出土遺物はほとんどないものの16世紀代の屋敷地に伴うものと考えられる。16世紀代の屋敷地の西限は、条里型地割の坪界線にあたるG区西側の道付近にあたる可能性がある。

G区S D02・03・04 G区の中央付近で検出した溝で、S D02・03は幅50cm、深さ10cm、S D04は幅70cm、深さ20cmである。S D04は調査区北端で東へ屈曲し、北側を区画すると思われる。溝からの出土物はほとんどなかったが、前回の調査から13世紀後半と考えられる。

H区S D01 H区東半部分で検出した東西方向の溝で、調査区中央付近で北側へ屈曲し、調査区外へ延びる。幅1m以上、深さ20cm以上ある。溝からは土師質土器土釜・甕、青磁椀、瓦器等が出土し、13世紀後半から16世紀のものと考えられる。

## 2. まとめ

今回の調査は高松東道路拡幅工事に伴うものであり、様々な制約から幅2m程度の調査地であったため、遺構のまともは捉えにくかったが、前回の調査の遺構の延長部分を検出したほか、D～H区では条里型地割の坪界線と坪界線の間位置する東西方向の溝を検出した。

今後はさらに今回の調査について前回の調査に照らしながら検討を加えたい。

# 前田東・中村遺跡

## 1. 立地と環境

前田東・中村遺跡は香川県のほぼ中央部にあたる高松平野の東端部，高松市前田東町145-1番地外に所在する。高松平野の東方に位置する立石山系の山裾部にあたり，三方を低丘陵に囲まれた西へ緩やかに傾斜する緩扇状地上に広がっている。標高は調査区東端で22.5m，西端で19.8mを測る。

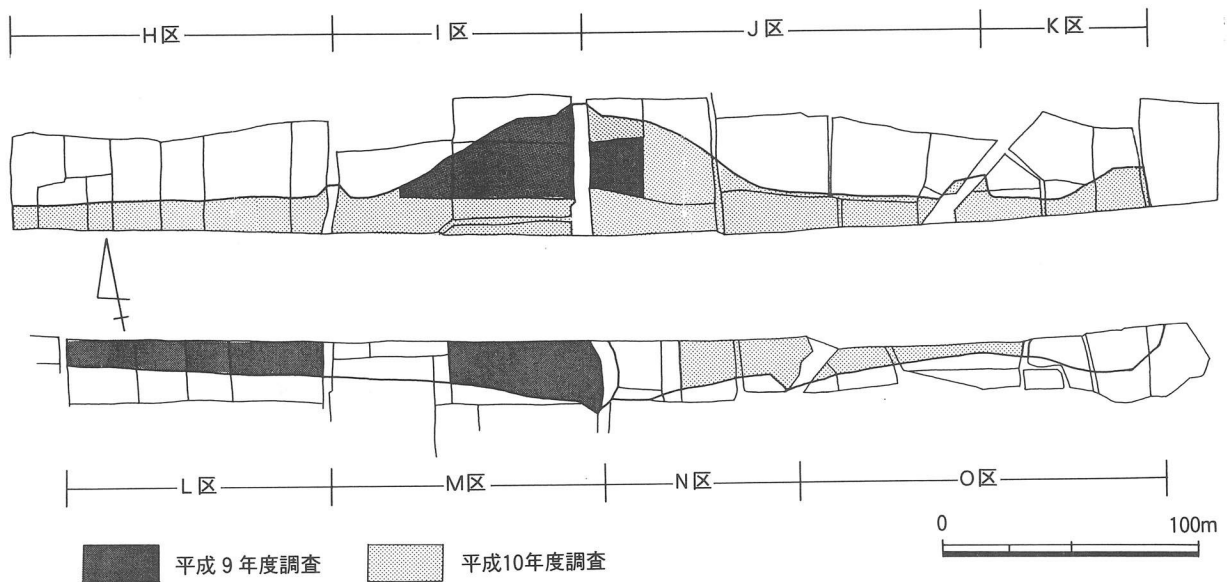
前田東・中村遺跡の近隣の遺跡としては，弥生時代後期の高地性集落である西浦谷遺跡や弥生時代末から古墳時代初頭にかけての墳墓群である権八原遺跡などが存在している。中でも白鳳期の寺院である宝寿寺跡は当該地の北方約100mの位置にあり，本遺跡との関連が期待される場所である。

## 2. 調査の成果

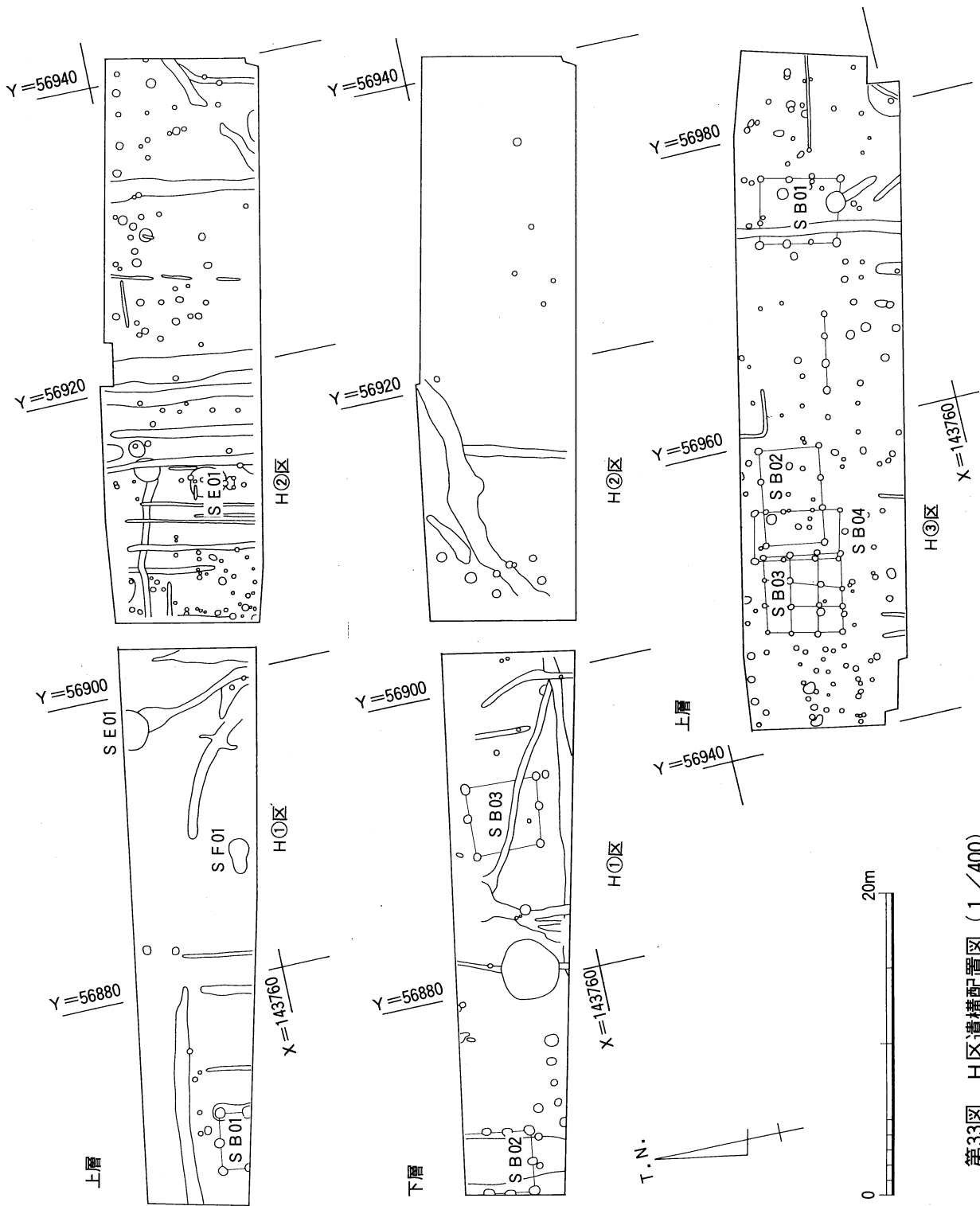
調査対象地は，四国横断自動車道の高松東インターチェンジ部分で，国道11号線高松東道路の南北両側にまたがり，東西に細長く広がっている。調査は平成9年9月から開始しているが，引き続き今年度は調査対象面積約13,000㎡のうちの7,206㎡について4月1日から調査を開始した。調査は直営方式で，11月末までは2班体制で行いその後3月までは1班体制で行った。調査区割は昨年度を踏襲し，今年度はH～K・N・O区の調査を終了した。

調査区の地形は，尾根状の2つの低丘陵(H・I区西半部，K・O区)とその間の谷状の低地部(I区東半部・J区・N区)となっており，低地部を流れていた旧河道が埋没した後は古代以降の遺構がつくられている。低丘陵上では弥生時代・古代から中世・近世の遺構を確認している。遺構面の数は基本的に低丘陵部で1面，低地部では2面となっている。低地部では下層が弥生時代の遺構面，上層が古代から中世にかけての遺構面であるが，部分的にはさらにその上に近世の遺構面が存在する調査区もある。

以下，それぞれの調査区ごとに概要を述べる。



第32図 調査区配置図 (1/3,000)



第33図 H区遺構配置図 (1/400)

## H区の概要

高松東道路の北側に位置する。表層は薄く、表土下70~80cmより遺構面が検出された。東から西になだらかに下る低丘陵地であるため部分的に包含層が薄く、同一面に時期差のある複数の遺構が検出された可能性も考えられる。H①区では2つの遺構面を検出し、井戸1基、窯跡1基、掘立柱建物跡2棟、その他溝状遺構、ピット多数を検出した。H②区では2つの遺構面を検出し、井戸1基、溝状遺構数条、ピット多数、H③区では掘立柱建物跡4棟、溝状遺構数条、ピット多数を検出した。

H①区S B02 調査区西端下層で検出した2間以上×2間の掘立柱建物跡である。柱間の距離はそれぞれ1.5m, 2mで、N7°Eの向きに主軸をとって建てられている。柱穴は径60~80cmの円形をしている。深さは30~40cmほどで、検出している7基の柱穴のうち6基に礎石を確認することができた。礎石は径あるいは一辺が20~30cmのほぼ平坦な砂岩である。埋土は黒灰色で柱穴の中からは数点の土師器片の壺および須恵器片が検出できた。遺物および埋土から、古代の建物と考えられる。

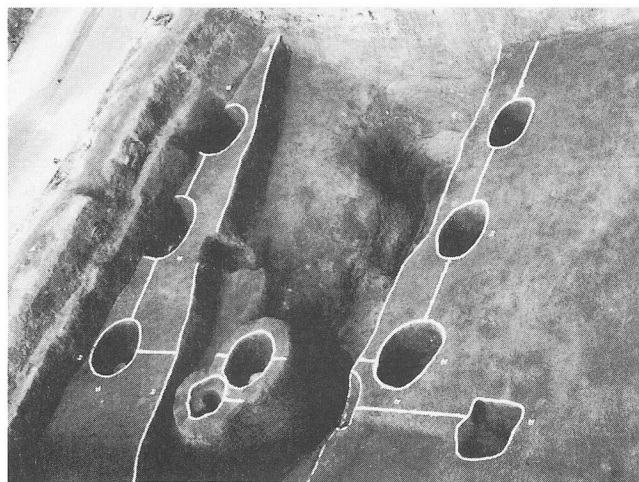
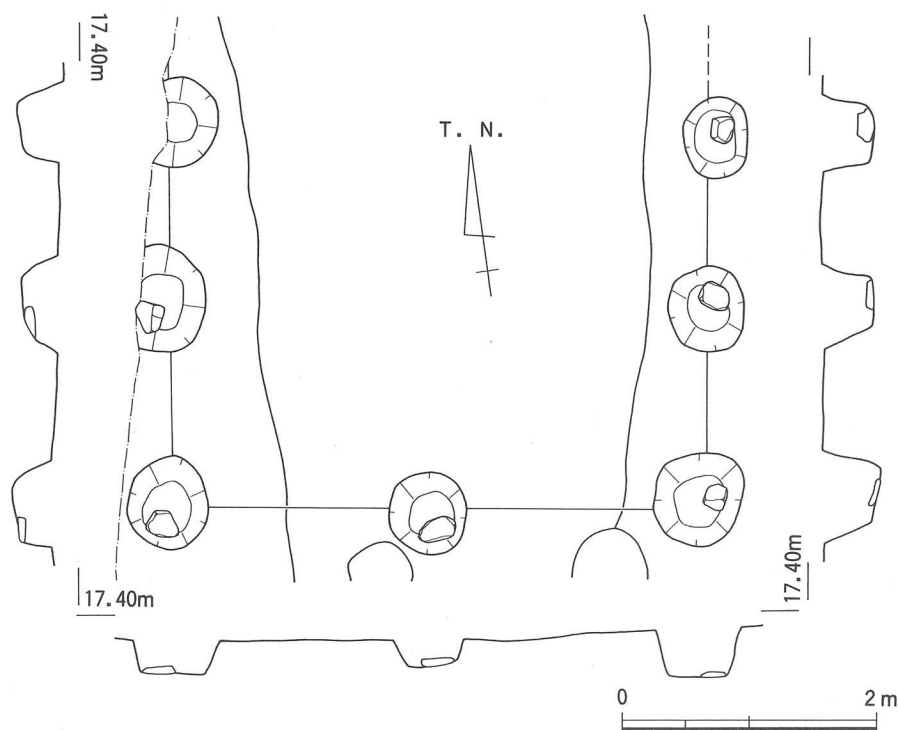


写真17 H①区S B02検出状況 (南から)



第34図 H①区S B02実測図 (1/60)

H①区 S P 68 調査区中央付近下層で検出した柱穴である。径40cm、深さ30cmの円形を呈する。

埋土は暗灰色粘性砂質土および黒色粘質土で、わずかではあるが土師器の椀片が検出できた。さらにこのピットには、長辺22cm、短辺14cm、厚さ5cmの礎板および、最大径9cm、長さ23cmの柱痕が確認できた。埋土や土器片から古代初～中頃ではないかと考えられる。

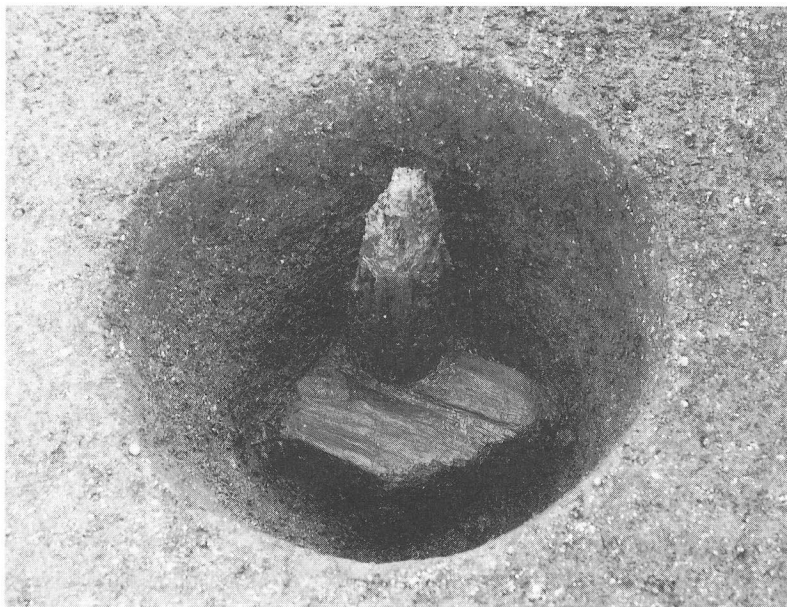
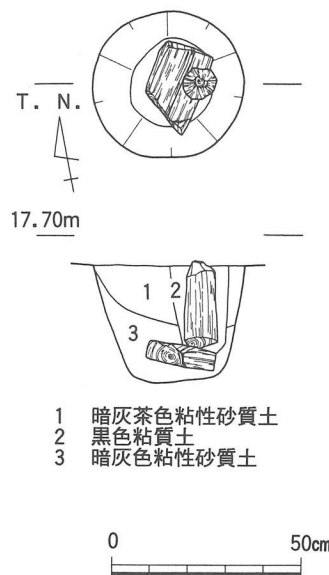


写真18 H①区 S P 68礎板・柱痕検出状況（西から）



第35図 H①区 S P 68実測図

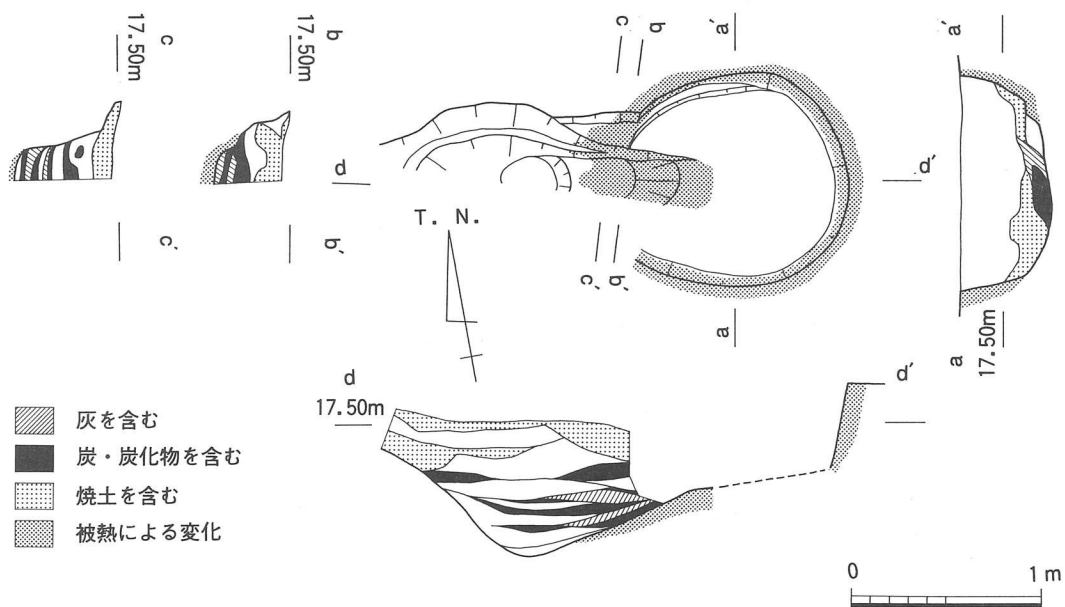
- 1 暗灰茶色粘性砂質土
- 2 黒色粘質土
- 3 暗灰色粘性砂質土

H①区 S F 01 調査区中央南で検出した土器焼成窯である。遺構面よりも上部は削平されており不明であるが、キセル状の窯であると予想される。全長は東西に2.5mを測る。形状は東側に径約1m、深さ約70cmほどの半球状の窯本体を持つ。本体内部西側には、幅約30cm、長さ50cmほどの燃焼部を持ち、硬く焼きしまっていた。燃焼部は東に向かうにつれて傾斜が大きくなるが、これは炎の流れと関連があると思われる。本体から西側には、検出面を掘り込む形で焚口が伸びる。窮屈ではあるが人間が作業できるスペースも持っている。

特徴として、窯内部北側に段が形成されており、その段が燃焼部よりも上部にあることから土器焼成時のロストルに関連したものではないかと考えられる。しかし、それ以外の場所で確認することができないため、その段の役割を検討する必要がある。出土した土器は主に焚口からで、土師器・須恵器片がわずかであるため時期の判別は難しいが、周辺の遺構などから考えて、中世初期から中頃の遺構ではないかと思われる。



写真19 H①区 S F 01検出状況（東から）



第36図 H①区S F01実測図 (1/40)

H①区S E01 調査区北東部上層で検出した井戸である。調査区北壁に切られる形での検出であるため、正確な全体像は不明であるが、検出した掘方の平面形は円形で直径2.2m、深さ1.5mである。検出面から漏斗状に下がり、底中央部に一辺60cmの方形の掘り込みを持つ。上部は径0.5mから人頭大程度の安山岩を組み合わせた形で検出された。おそらく検出面から上にも同様な石材を使って井桁に相当するものが構築されていたと思われる。その下には、長さ1.2~1.3m、幅0.2~0.3m、厚さ2~3cmほどの板材を3段に井籠組構造を持って井戸枠が形成されている。さらにその下の円形の掘り込みには曲物が据えられていた。これは径30cm、高さ20cmで二重に重ね巻きをし、さらに竹を使って縫い合わせた痕跡を持つ。掘方から10~12世紀のものと思われる杯身・黒色土器碗、井戸枠内からは7~13世紀の須恵器・土師器の碗・瓦・桃種・獣骨などが出土している。おそらく古代末から中世初めに始まり中世後半に埋没したものと考えられる。また使われている木材には、井戸構築には関係のない不自然な形での切り込み、くり貫き等が確認されており、大きな建造物の部材を転用した可能性がある。

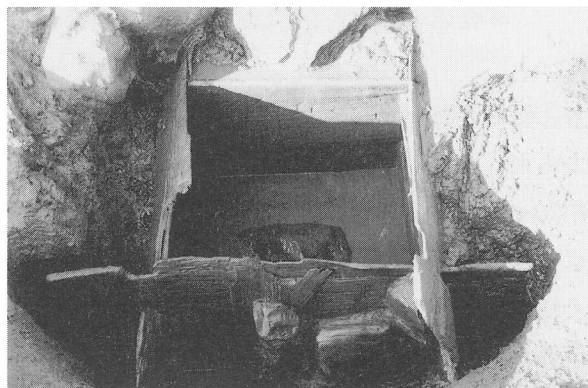
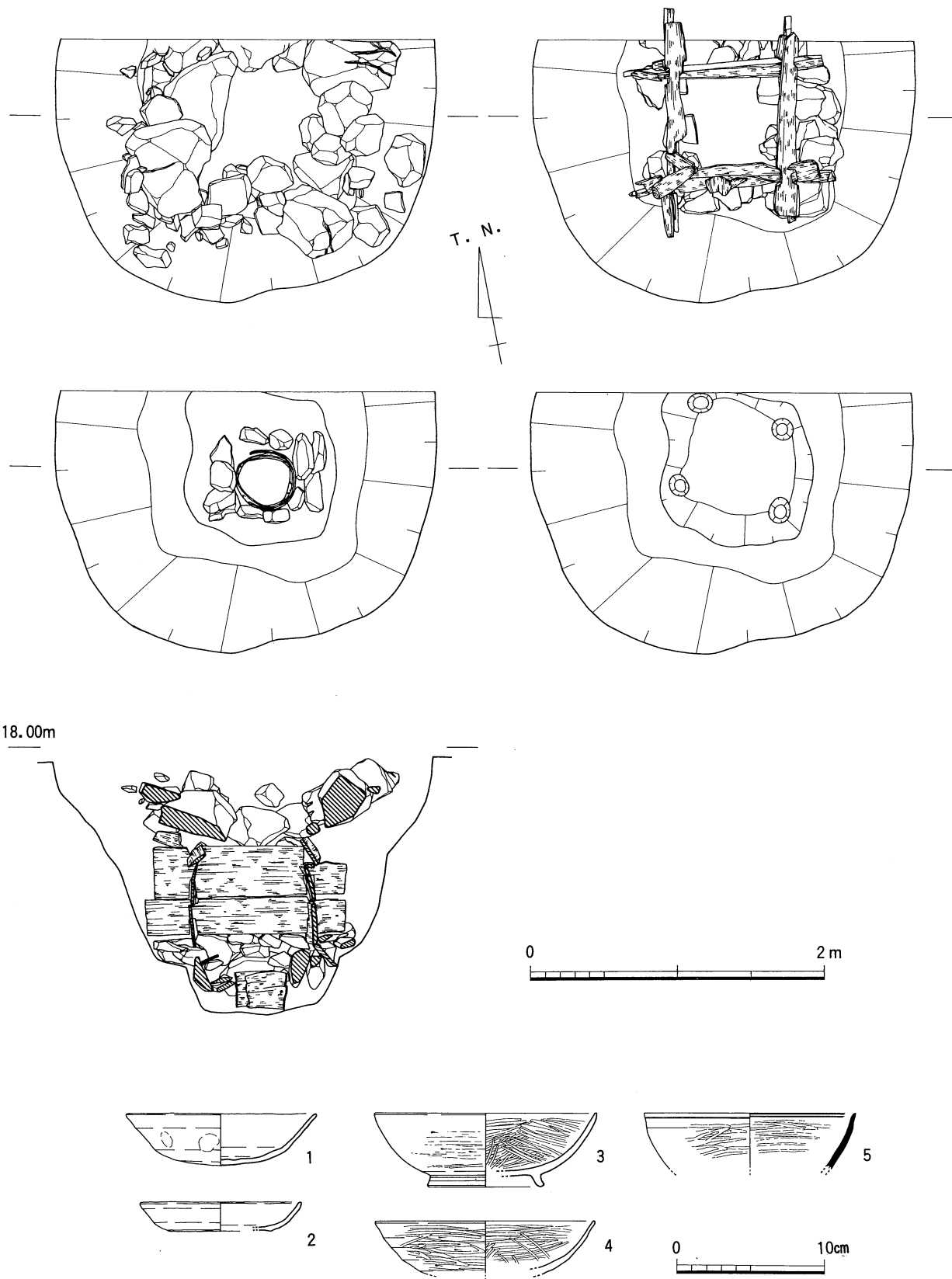


写真20 H①区S E01木枠検出状況(南から)



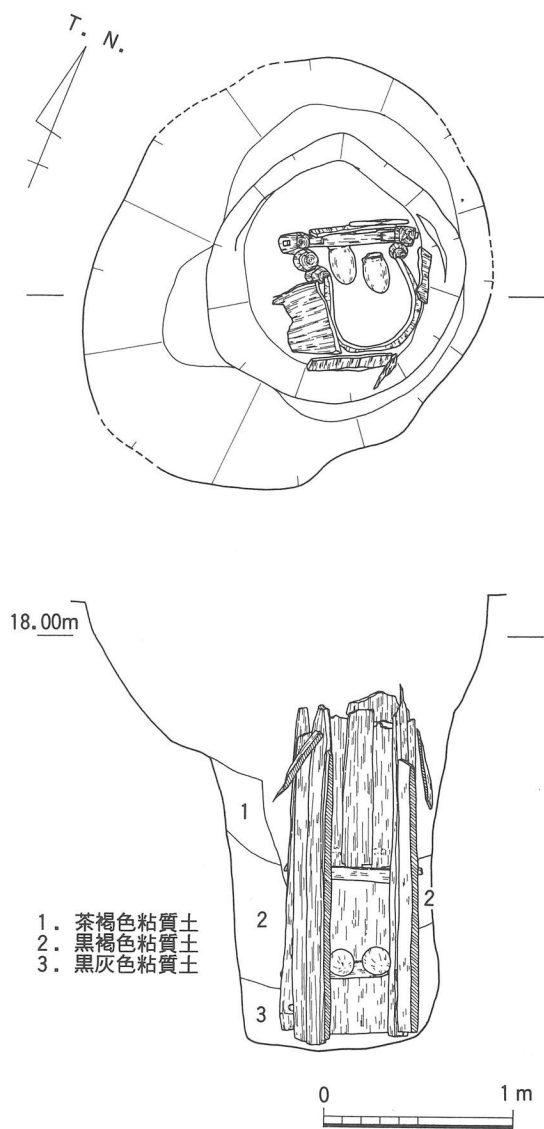
写真21 H①区S E01曲物検出状況(南から)



第37図 H①区 S E 01実測図 (1/40) ・出土遺物実測図 (1/4)



H②区S E01 調査区中央部で検出した井戸である。検出面で、径2.2m、深さ2.5mを測る。井戸本体は井筒状を呈するが北側には巡っておらず、切り込みの入った径10cmほどの柱を両側に立て固定されていた。北側には、一辺が約10cmの角材と径約10cmの丸太、さらに縦82cm、横48cm、厚さ2～4cmの板材2枚をほぞ組みした構築物が、井筒状の本体を固定する柱に押し当てられ背当てとして使われていた。掘方からは、土師器の壺・甕・皿・椀や須恵器の杯蓋・高杯脚部・杯・甕が、井戸枠内からは土師器の壺・杯・瓦・蛸壺などが出土している。これらの土器から最終埋没は中世初ではないかと考えられる。また使われている木材には、井戸構築には関係のない不自然な形での切り込み、くり貫き、面取り等が確認されており、大きな建造物の部材を転用した可能性がある。



第38図 H②区S E01実測図



写真22 H②区S E01井筒検出状況(南から)

H③区S B01 調査区東で検出した3間×1間の掘立柱建物跡である。柱間の距離はそれぞれ1.5m～2m, 4.3mでN13° Eの向きに主軸をとって建てられている。柱穴は径40～60cmの円形をしている。

H③区S B02 調査区中央で検出した1間×3間の掘立柱建物跡である。柱間の距離はそれぞれ3.8m, 2.2mでN81° Wの向きに主軸をとって建てられている。柱穴は径50cm前後の円形をしている。

H③区S B03 調査区中央で検出した3間×3間の総柱の掘立柱建物跡である。柱間の距離はそれぞれ1.6mでN12° Eの向きに主軸をとって建てられている。柱穴は径30cmの円形をしている。

H③区S B04 調査区中央で検出した3間×1間の掘立柱建物跡である。柱間の距離はそれぞれ1.5m～1.8m, 3.2mでN13° Eの向きに主軸をとって建てられている。柱穴は径30～50cmの円形をしている。

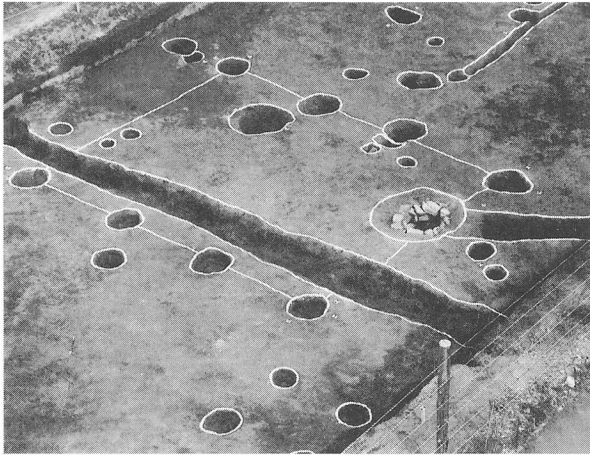


写真23 H③区S B01検出状況 (南西から)

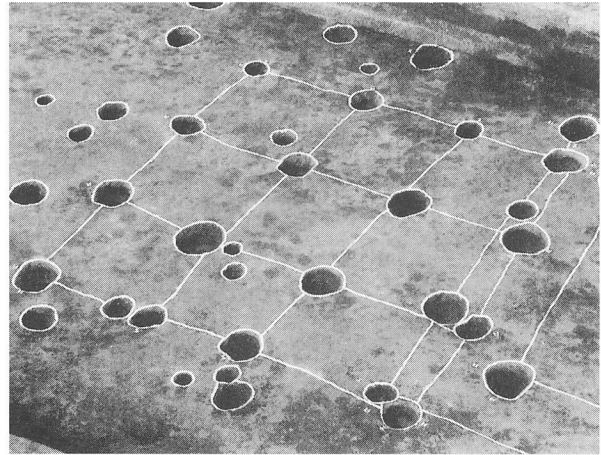


写真24 H③区S B03検出状況 (南東から)

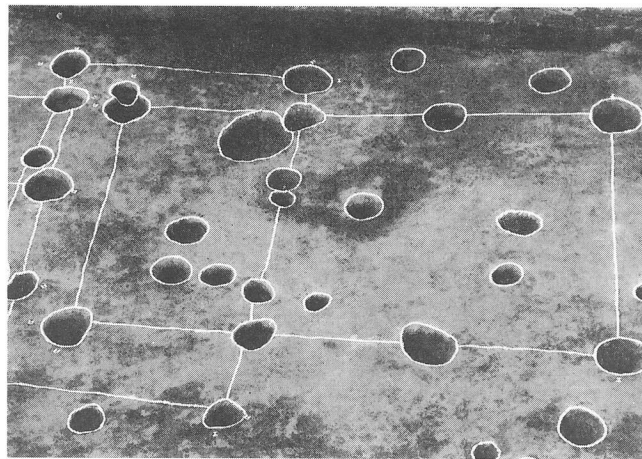
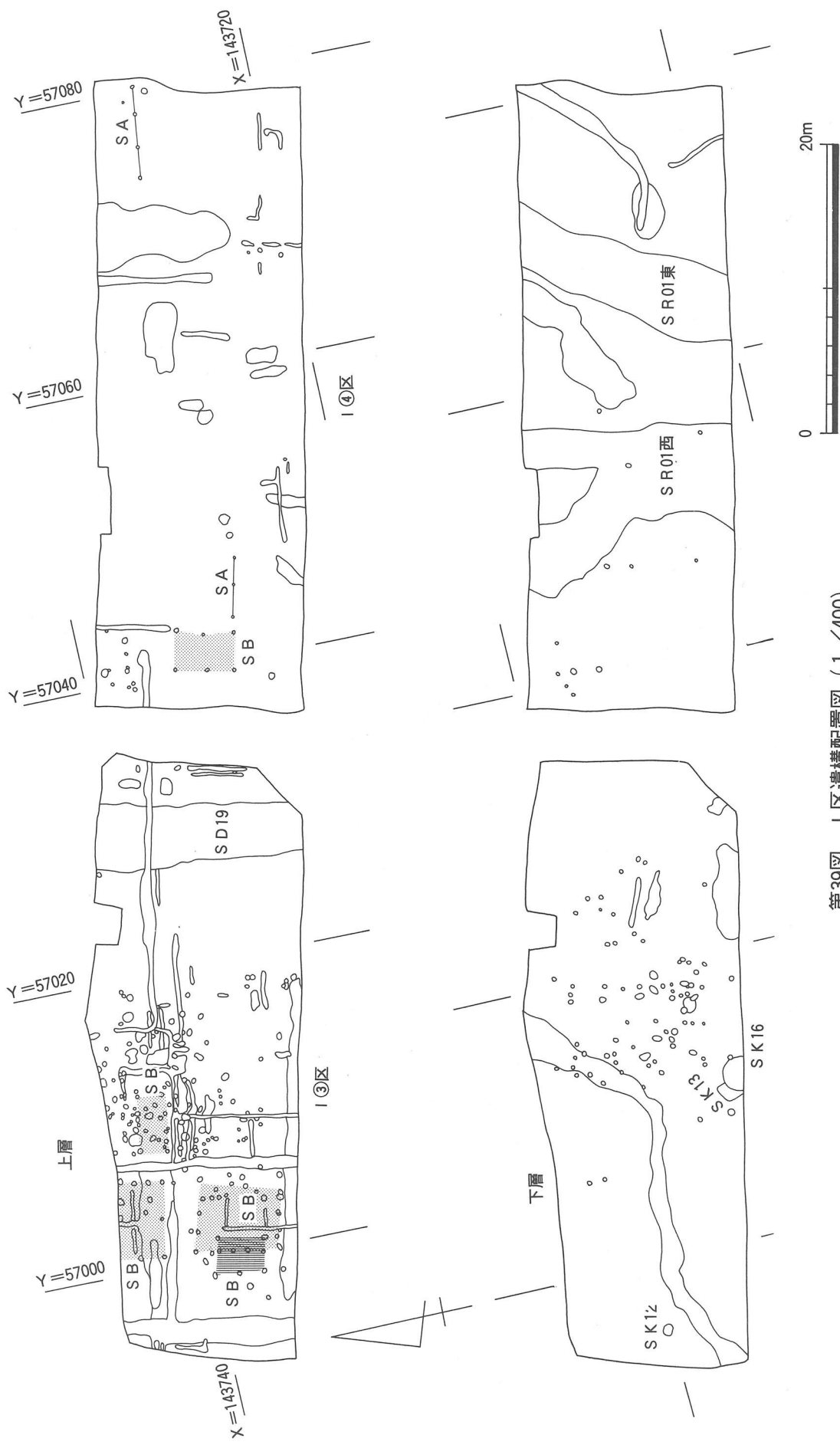


写真25 H③区S B02・04検出状況 (南から)



第39図 I区遺構配置図 (1/400)

## I 区の概要

高松東道路の北側で調査対象地のほぼ中央に位置する調査区である。北東から南西方向にかけて緩やかに傾斜する地形であったが、後世の開墾によって段状に削られており、I③区と④区では東西方向で約60cmの比高差を持つ。今年度調査を行ったI③・④区はともに2面の遺構面を確認している。耕作土下の希薄な包含層である淡黄褐色系粘質土の直下に上位の遺構面が、その下の古代から中世の遺物をわずかに含んだ茶褐色系粘質土の直下に下位の遺構面が存在している。

上層で検出した遺構は、I③区においては4棟の掘立柱建物跡を含んだ多数の柱穴をはじめ溝や土坑などがある。復原した掘立柱建物跡の主軸の方向と溝の方向は一致しているものが多く見られるが、これらは遺跡の周辺に残る地割と同じ方向である。掘立柱建物跡の柱穴からは遺物の出土がほとんど見られず詳細な年代決定は困難だが、溝の出土遺物などから概ね中世頃のものと思われる。これらの遺構の中には重複して存在するものも見られることから、いくつかの小時期に分けることができよう。I④区では掘立柱建物跡1棟と柵列2基、溝等を検出した。建物や柵列は遺物がほとんどみられないが、I③区の建物や溝と同じ方向を持ち埋土も似ていることから同様の時期が想定できよう。調査区の西半にみられる鋤溝群からは江戸時代の陶磁器片が出土しており、近世には耕作地として利用されていたことがうかがえる。下層で検出した遺構は、I③区においては柱穴や溝、井戸3基（SK12・13・16）などがある。井戸はいずれも平面が円形を呈しており、内部に井筒として曲げ物を利用している。曲げ物の内部や掘り方からは古代の須恵器・土師器片とともに桃の種子が出土している。I④区では昨年度の調査区のI②区から続く自然河川の他に、若干の溝や柱穴を検出している。



写真26 I④区上層全景（西から）

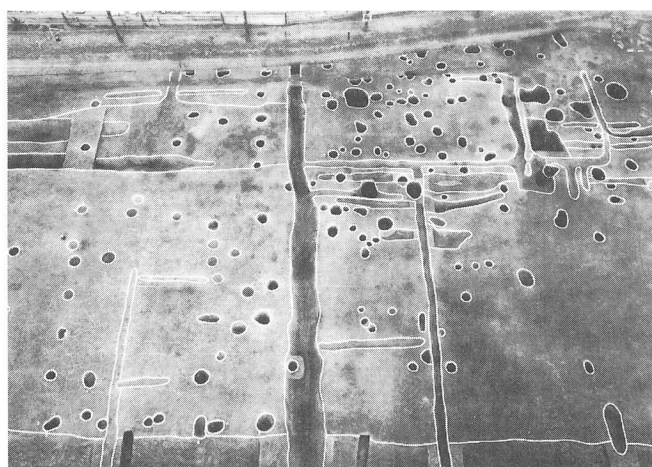


写真27 I③区S B他（南から）

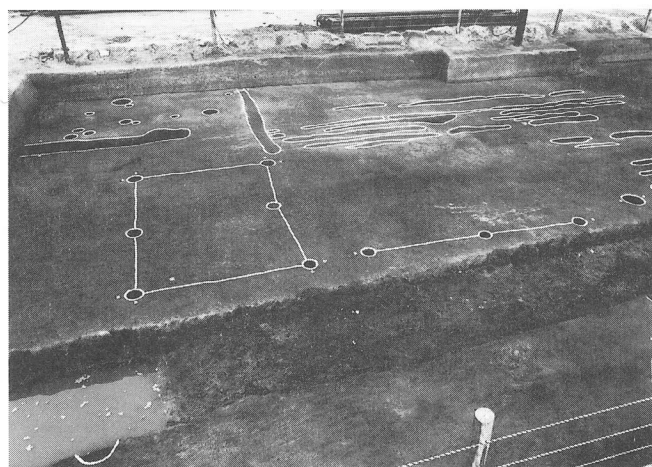


写真28 I④区S B01・S A01（南から）

I④区SR01 I④区下層で検出した自然河川で2本の流路を有する。SR01東は幅約6m、深さ約2mで粘土と粗砂が互層で堆積している。底付近の黒色粘土からは植物遺存体とともに少量の縄文時代晩期の凸帯文土器片が、上位の粘土からは弥生時代後期の土器片が出土している。SR01西は幅約8m、深さ約2.5mで下半は粗砂、上半は粘土が堆積している。上半の粘土層には古墳時代初頭の甕や小型丸底壺や高杯などの土師器が出土している。粗砂からは弥生時代後期の土器片が出土しているが、植物遺存体や凸帯文土器は出土していない。

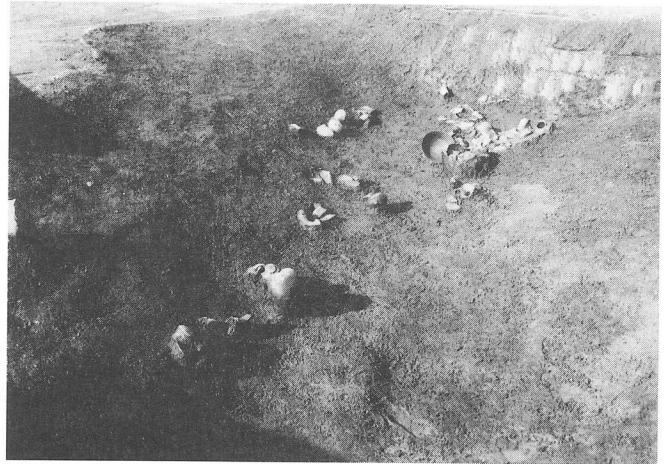
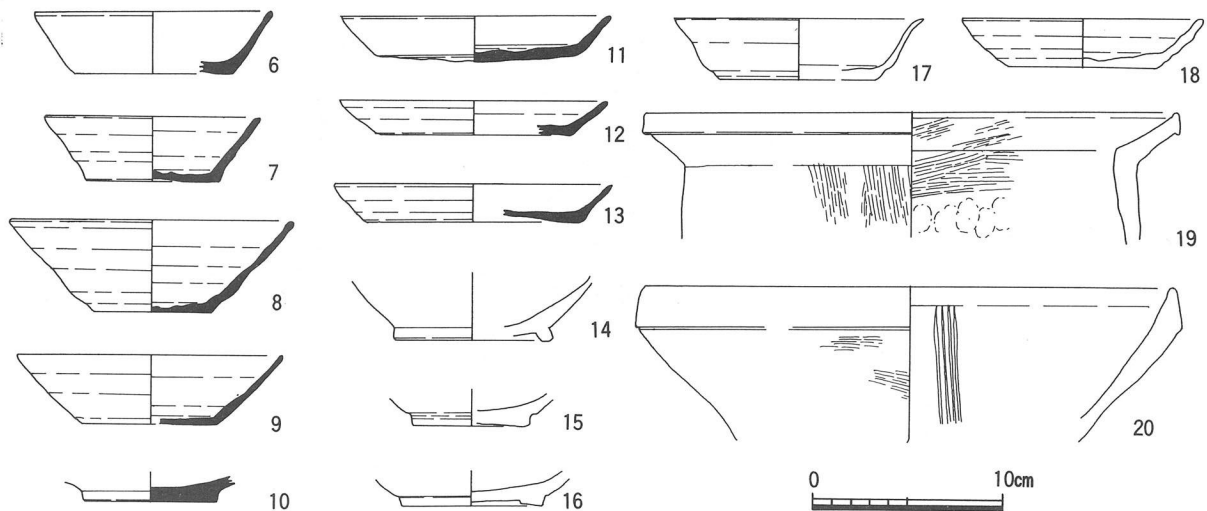


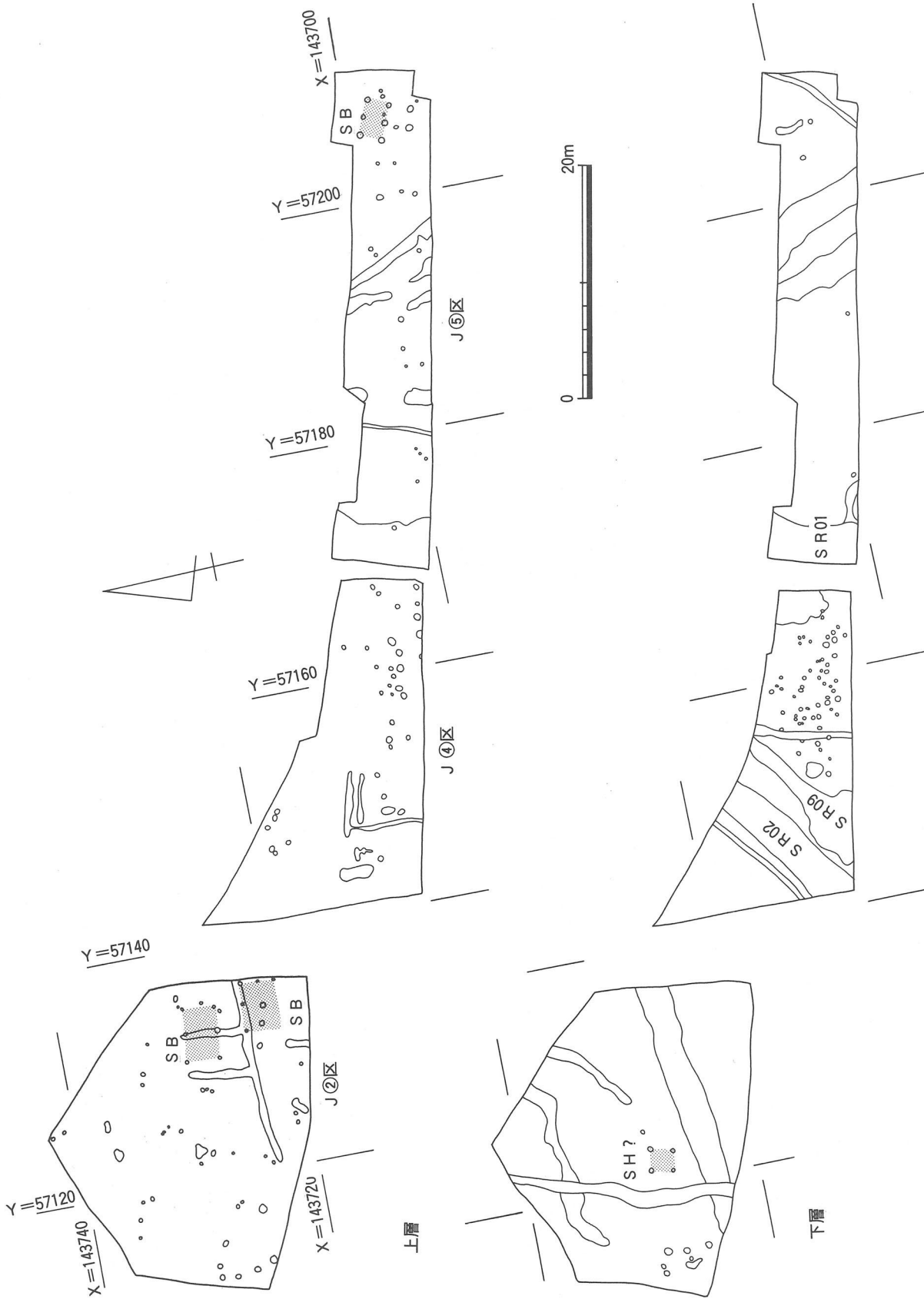
写真29 I④区下層SR01西遺物出土状況(南東から)

I③区SD19 I③区の東端付近で検出した幅約4m、深さ約0.6mの溝である。昨年度の調査区のI①区で検出した溝SD01の続きにあたる。断面の形態はU字形を呈しているが、北壁付近では底が2つに分かれてW形を呈する。土層断面の観察からは2条の溝の重複や明確な掘り直しは認められない。I③区の東西両端に位置する現在の市道部分が条里の里界と推定されており、位置的に見ると、このSD19はやや西にずれるものの1町を東西に二分する溝といえよう。

遺物は、杯・皿類の供膳具や甕などの煮沸具などの土器類の他にも、量は少ないが獣骨や平瓦片などが出土している。6から9は十瓶山産の須恵器杯で9～10世紀初頭の年代が考えられる。10は底部を糸切りした円盤状高台を持つ碗で、東播地方からの搬入品可能性が高い。11から13は須恵器皿で概ね9世紀頃のものである。14は黒色土器の碗、15と16は緑釉陶器碗の底部である。16は削り出し高台を持つ。17と18は土師器の杯で11世紀末頃のものである。19は11世紀末頃の甕である。20は瓦質に近いすり鉢で国分寺・楠井遺跡で生産されたものと思われる。これ以外にも15世紀頃の亀山焼の甕なども出土していることなどから、SD19は古代から中世(9～15世紀)にかけて存続した溝と考えられる。



第40図 I③区SD19出土遺物実測図(1/4)



第41图 J区遺構配置图

## J区の概要

高松東道路の北側でI区の東に隣接する東西に長い調査区である。I区と同様に北東から南西に向かって緩やかに傾斜している地形であるが、現状では後世の開墾によって水田・宅地化され、階段状を呈している。特にJ④区の西側の部分は大きな段状を呈しており、東西の比高差は約1mを測る。基本的に遺構面は2面存在しているが、J④区部分は遺構面を3面確認している。耕作土直下の希薄な包含層である淡黄色系粘質土直下が上位の遺構面となっており、さらにその下の淡黄色から淡灰色粗砂の下が下位の遺構面となっている。この粗砂層は調査区東半のJ④・⑤区では約20cmと薄いのが、先述した比高差約1mの段の下位にあたるJ②・③区では約50cmと厚く堆積しており、その一部は西隣のI区にまで

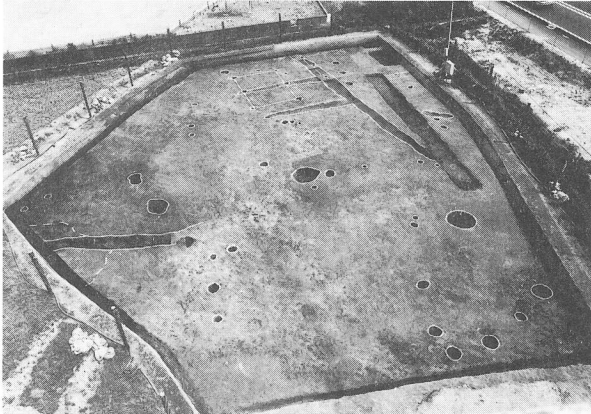


写真30 J②区上層全景（西から）

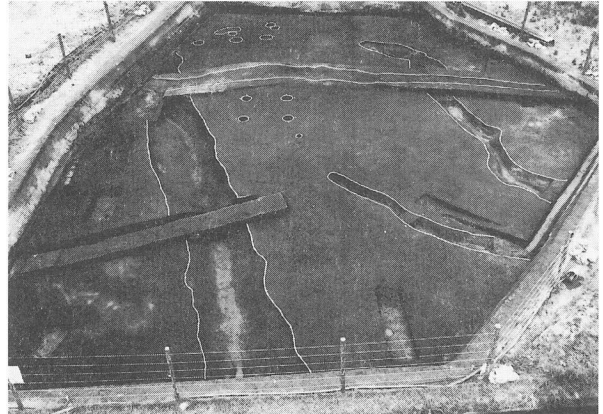


写真31 J②区下層全景（東から）

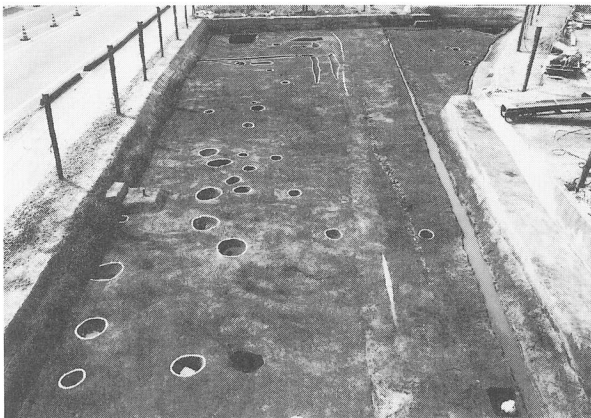


写真32 J④区上層全景（東から）

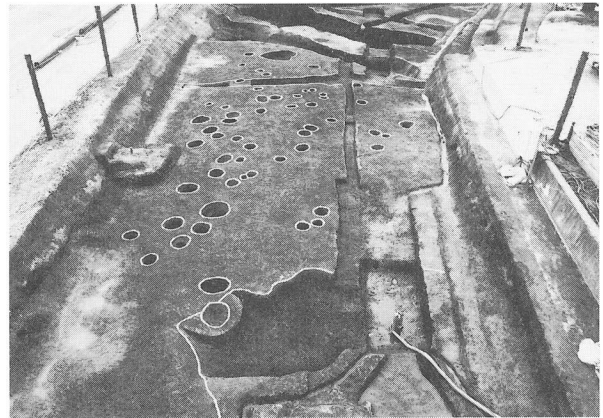


写真33 J④区下層全景（東から）

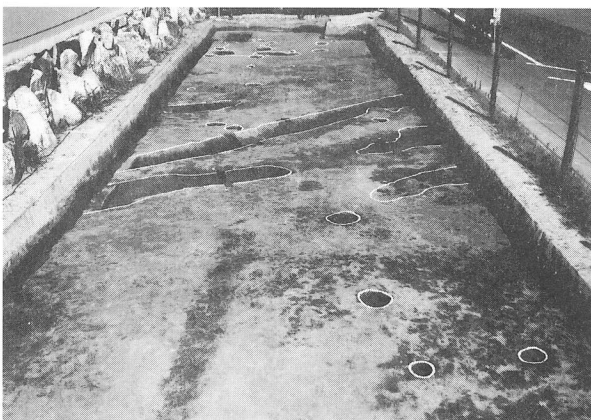


写真34 J⑤区上層全景（西から）

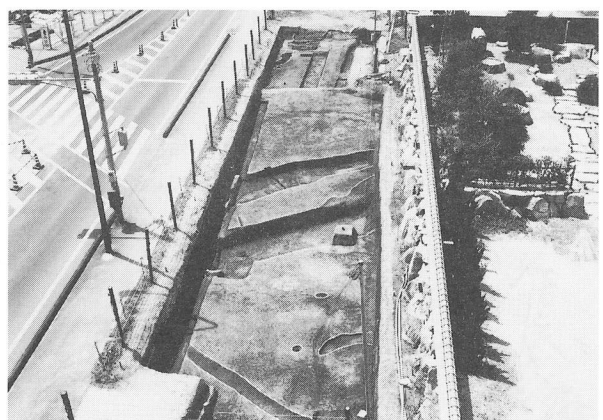
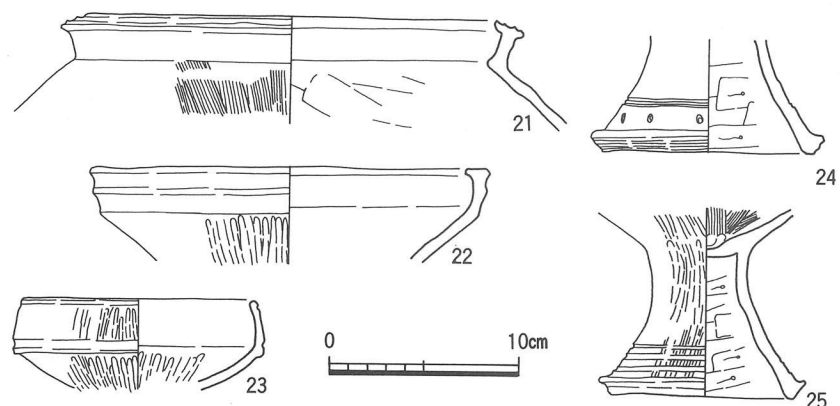


写真35 J⑤区下層全景（東から）

及んでいる。粗砂の中には拳大から人頭大の粘土塊も含まれており、大雨などの天災による土砂崩れのようなもので一度に運ばれてきたような堆積状況を示している。地形を巨視的に見てもこの部分は谷川の低地が埋積したような場所であることから、流されてきた土砂の通り道になったことは想像に難くないであろう。上層の遺構としては、J②区とJ⑤区で掘立柱建物跡を検出した以外は小規模な溝と建物の並びを示さない柱穴群などがあるが、総じて残存状況は良いとは言えず、出土している遺物も細片が多く年代の決め手に欠けるものが多い。概ね中世を中心とする時期が想定されるが、一部には近世の遺構を含んでいるものと思われる。なお、J④区のみで確認した最上層では近世の溝と柱穴がある。下層の遺構としては、J②区とJ⑤区で弥生時代後期の溝を、J④区では自然河川と古代の溝を検出した。J②区で検出した正方形に並ぶ4つの柱穴は、竪穴住居の痕跡の可能性はある。それ以外に居住遺構は検出していない。J④区では弥生時代と古代の遺構を同一遺構面で検出している。

J④区SR02 J④区の下層で検出した幅約9m、深さ2m以上の自然河川である。J④区を北東から南西方向に横断して、高松東道路の調査区のD5地区で検出したSR01に続くものと思われる。高松東道路の調査の際には、注口土器をはじめ深鉢などの縄文時代後期の土器が出土しているが、今回の調査では数点の破片が出土したにすぎない。埋没していく過程で幅約5m、深さ約1.5mの規模を持つ流路となり、洪水砂のような粗砂層で一気に埋没している。この粗砂層からは弥生時代中期から後期の土器が出土しているが、磨滅しているものがほとんど見られないことから、比較的近くから流されたものと見られる。

出土した遺物のうち、弥生時代中期後半のものの一部を図化した。21は拡張した口縁端部に凹線を持つ甕である。22から25は高杯で、いずれも凹線を施している。23の杯部は胎土に角閃石や雲母を含んでいる。25は円盤充填の高杯である。



第42図 J④区SR02出土遺物実測図(1/4)

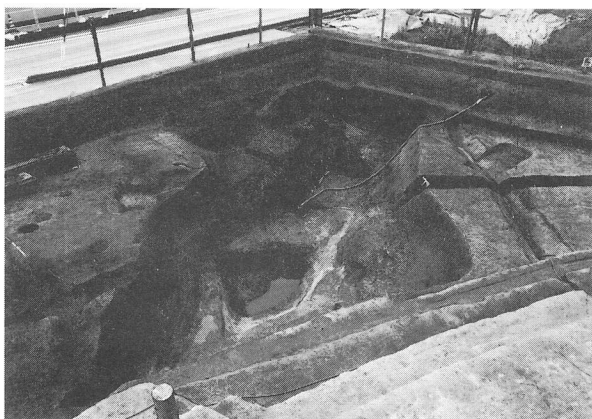


写真36 J④区SR02(北東から)

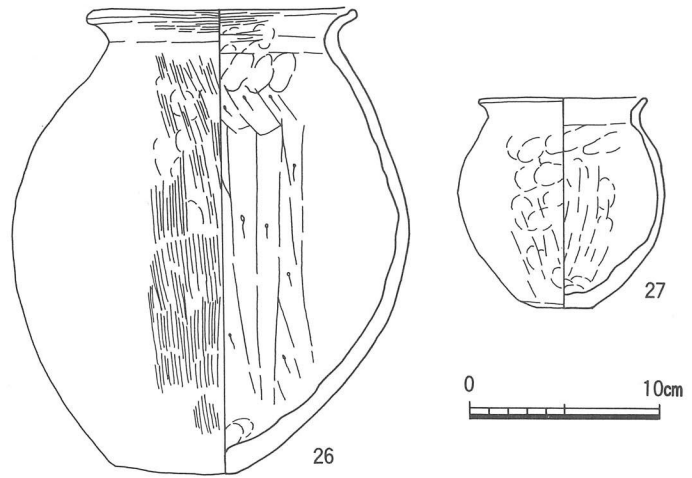


写真37 J④区SR02遺物出土状況(南から)



J④区S R01 J④区下層の東半で検出した自然河川である。幅約5m、深さ約1.8m以上を測る。高松東道路の調査区のD2・3地区で検出したS R02につながるものである。この自然河川も中～粗砂によって埋没している。調査区が狭い部分のために出土している遺物の量は少ないが、比較的残りの良い土器が見られる。

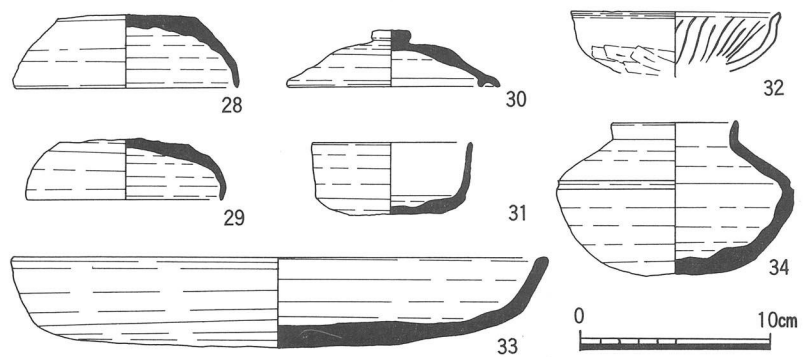
26はかなりいびつな土師器の甕である。外面には煤が付着しており、実際に使用されたことがうかがえる。27は小型の壺である。図示した以外にも大型の器台など、古墳時代初頭の土師器が出土している。



第43図 J④区S R01出土遺物実測図(1/4)

J④区S D09 J④区下層のS R02のすぐ東側で検出した北東から南西に走る溝である。北半部分は幅約1m、深さ約0.3mの規模を持つが、南壁付近では直径約4mほどの土坑状を呈している。北半部分では遺物がほとんど無いが、土坑状になる部分では図化した7～8世紀代の土器が出土しているなど、別々の遺構である可能性もある。

28と29は古墳時代終末期の須恵器杯蓋である。30と31は7世紀後半の須恵杯蓋と身である。32は7世紀代の土師器杯である。33の盤と34の短頸壺は8世紀代のものであると思われる。



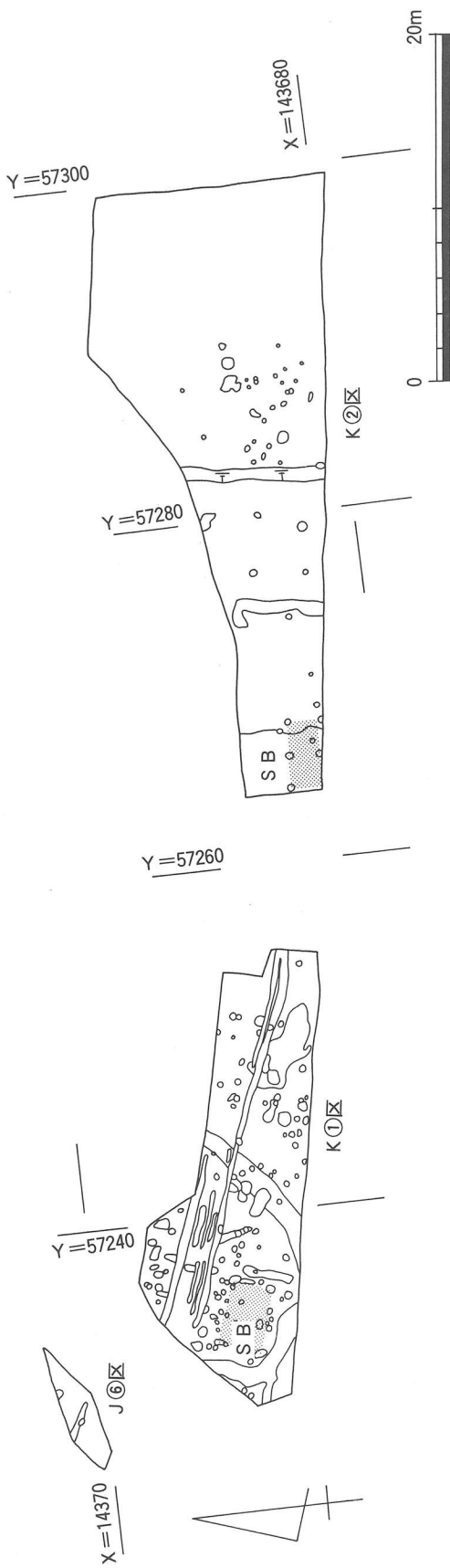
第44図 J④区S D09出土遺物実測図(1/4)



写真38 J④区S D09・S R02(北東から)



写真39 J④区S D09遺物出土状況(西から)



第45図 J⑥区・K区遺構配置図 (1/400)

### K区の概要

高松東道路の北側でJ区の東側に位置する調査区である。調査区の東西両端の比高差が約2mと他の調査区と比べて傾斜がかなりきつい。後世の開墾によって階段状に削平され、現在は田畑となっている。遺構面は耕作土直下の1面だけであった。K①区では弥生時代後期の溝や、古代から中世にかけての溝や掘立柱建物跡1棟を含む柱穴群を検出した。南隣する東道路の調査区でも同時期の集落を検出しており、その一部と見られる。K②区では耕作土直下に微高地であることを示す安定した黄色系の粘土層が見られ、多数の遺構の検出が期待されたが、削平が著しく及んでいた。そのため階段状の西端部2カ所で、古代から中世にかけての溝と掘立柱建物跡1棟を含む柱穴をわずかに検出したのみにとどまった。

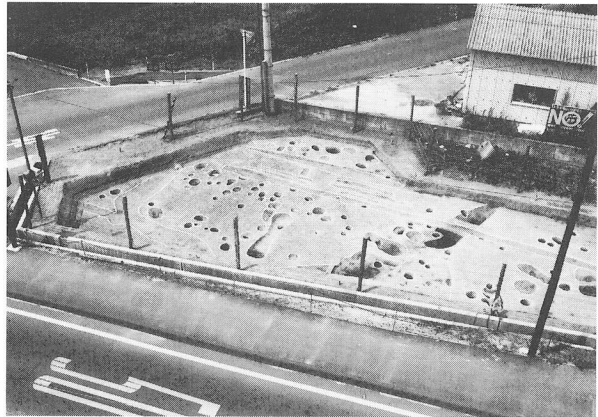


写真40 K①区全景 (南から)

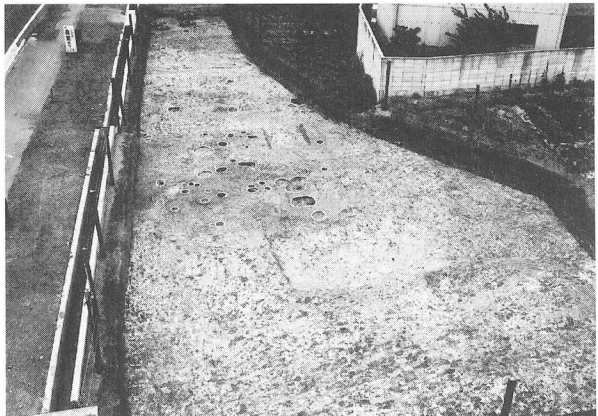
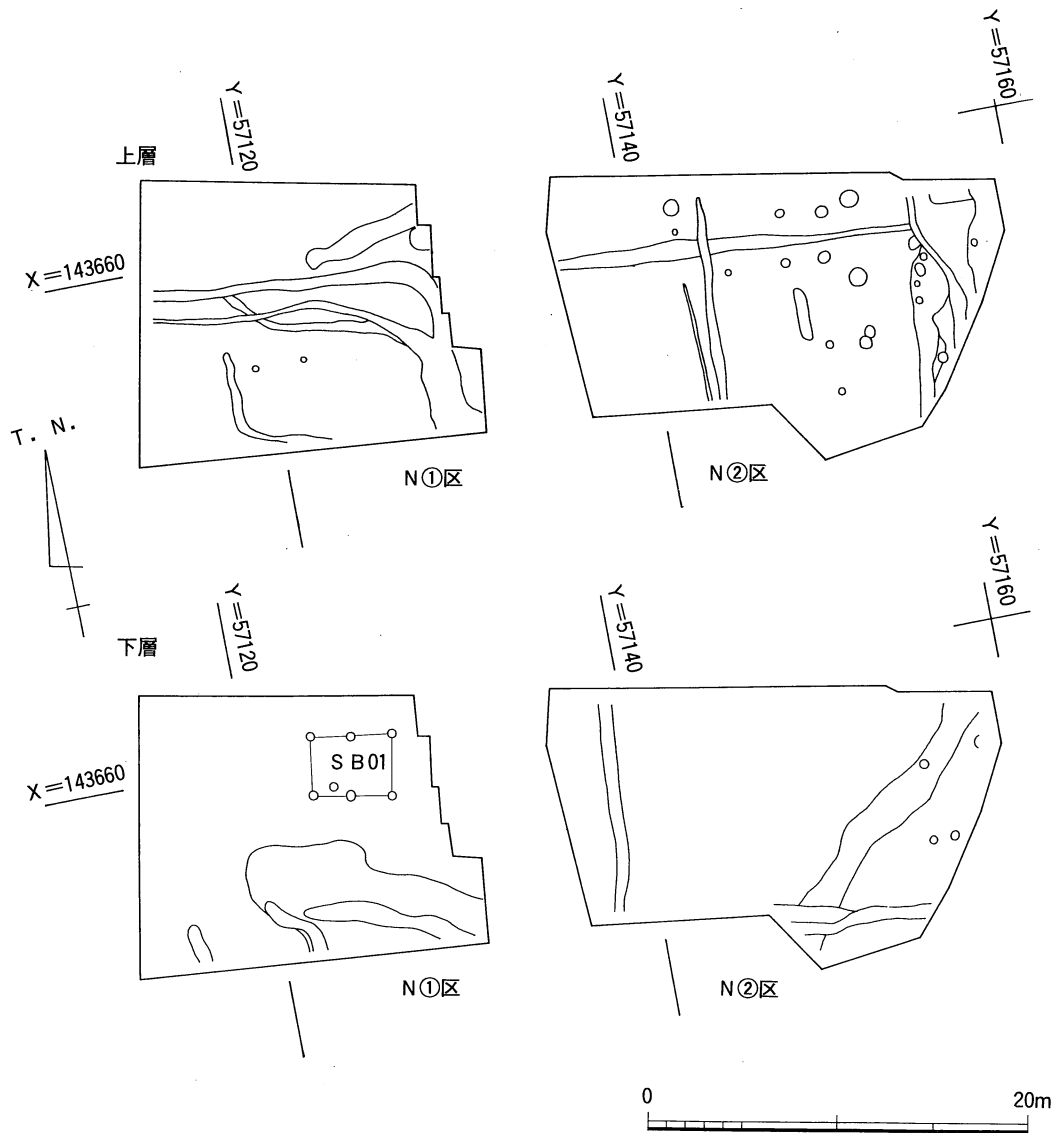


写真41 K②区全景 (東から)



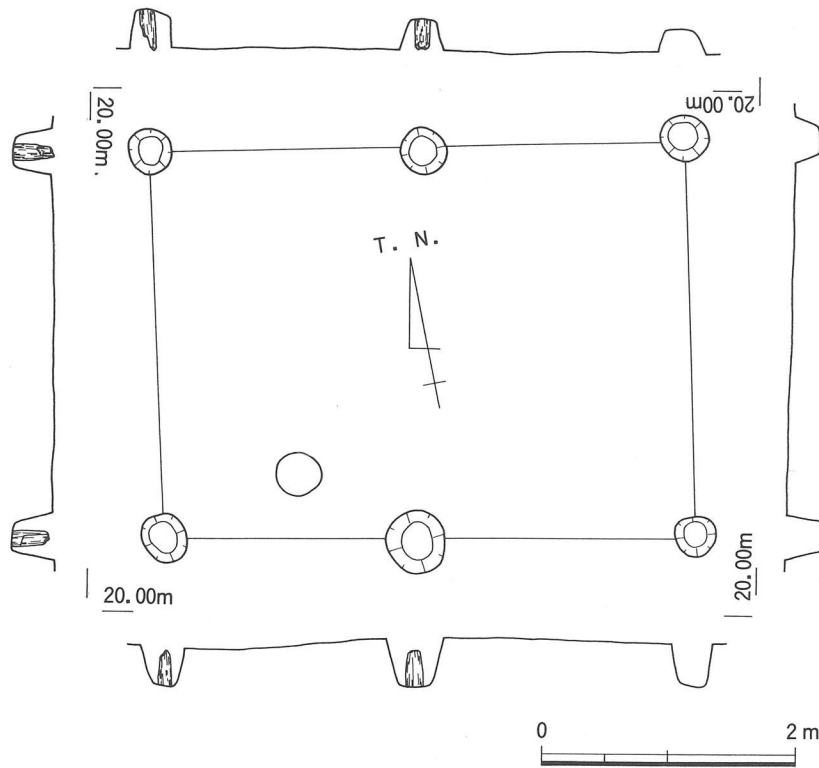
第46図 N区遺構配置図 (1/400)

### N区の概要

高松東道路南側に位置し、東西約55m、南北約15mの調査区である。ここでは2つの遺構面を確認することができた。上層は古代中頃から中世初期、下層は古墳末から古代初期のものとする。

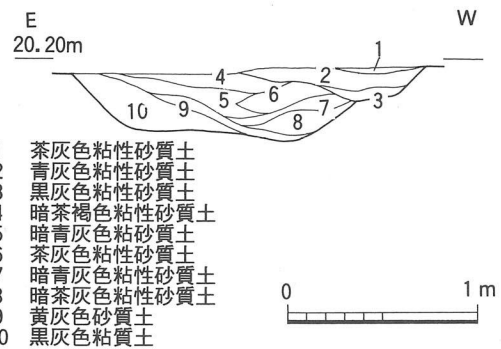
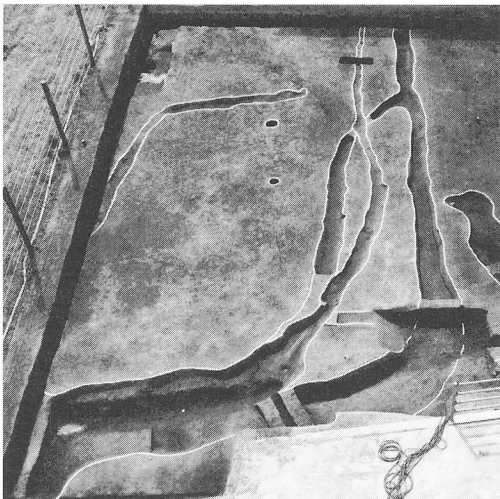
N①区では上層で条里の方向に沿う東西の溝状遺構、下層で流路の一部、掘立柱建物跡1棟、ピットが検出された。N②区では上層でN①区につながるであろうと予想される溝状遺構、ピットなどが検出され、下層でも東西へ伸びる溝状遺構、北東から南東へ下る溝状遺構を検出した。

N①区SB01 調査区北東下層で検出した1間×2間の掘立柱建物跡である。柱間はそれぞれ、3m、2mでN80°Wの向きに主軸をもつ。柱穴は径40cm前後の円形をしている。SP07・08には柱痕があり、出土した土器はわずかであるが、埋土は黒灰色粘性砂質土で、古代中期ころのものと思われる。



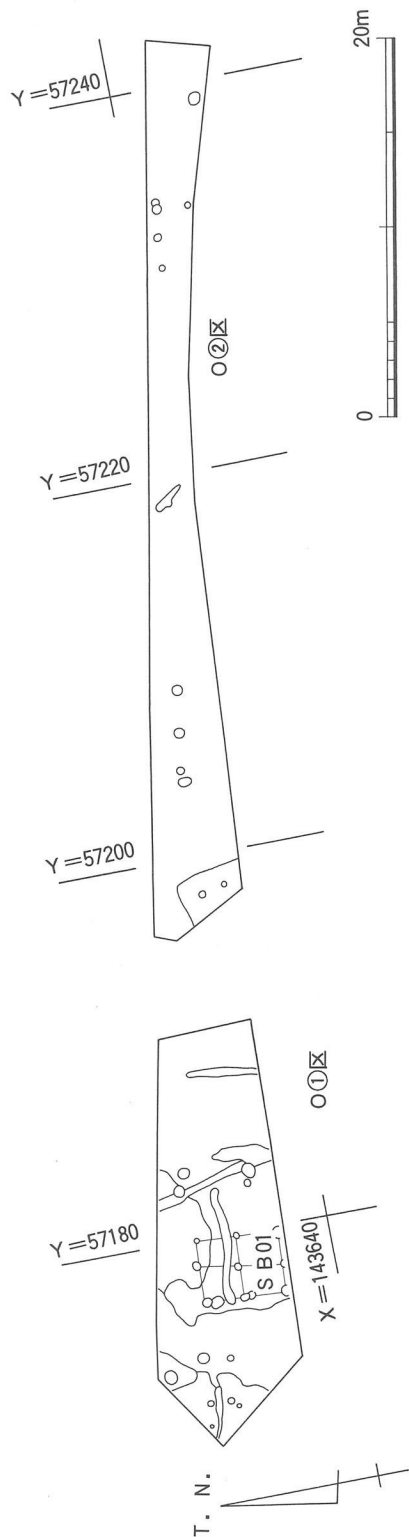
第47図 N①区SB01実測図 (1/60)

N①区SD01・02・03 調査区中央上層で検出した東西に流れる溝状遺構である。調査区東端で南へ曲折するが、古代の椀・杯・壺等が確認できた。また、N②区で検出したSD03とつながるものと思われ、条里の方向にほぼ一致する。埋土は茶褐色粘性砂質土で古代の杯・椀などが検出されたが、特に平瓦・丸瓦が他の土器の割合に比べて多く、周辺の建造物の存在、および関連が考えられる。



第48図 N①区SD01・03重複部分実測図(1/40)

写真42 N①区SD01・02・03検出状況(東から)



第49図 O区遺構配置図(1/400)

### O区の概要

高松東道路南側，N区の東側に位置する。幅2～10m，長さ80mと細長い。

O①区では流路跡，溝状遺構，掘立柱建物跡1棟，ピット等が検出できた。

O②区では掘立柱建物跡2棟，竪穴住居跡1棟，ピット等が検出できた。流路からは古墳時代からの土器等が検出できた。

O①区SB01 調査区西端下層で検出した2間×2間の総柱の掘立柱建物跡である。柱間の距離はそれぞれ2.3m, 1.7mで，N5°Eの向きに主軸をとって建てられている。柱穴は径40～50cmの円形をしている。深さは平均すると40cmほどである。遺物は少ないが，周辺の遺構から，古代中頃と考える。

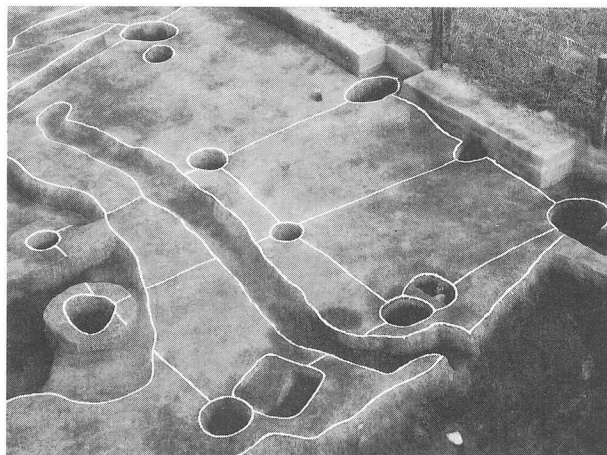
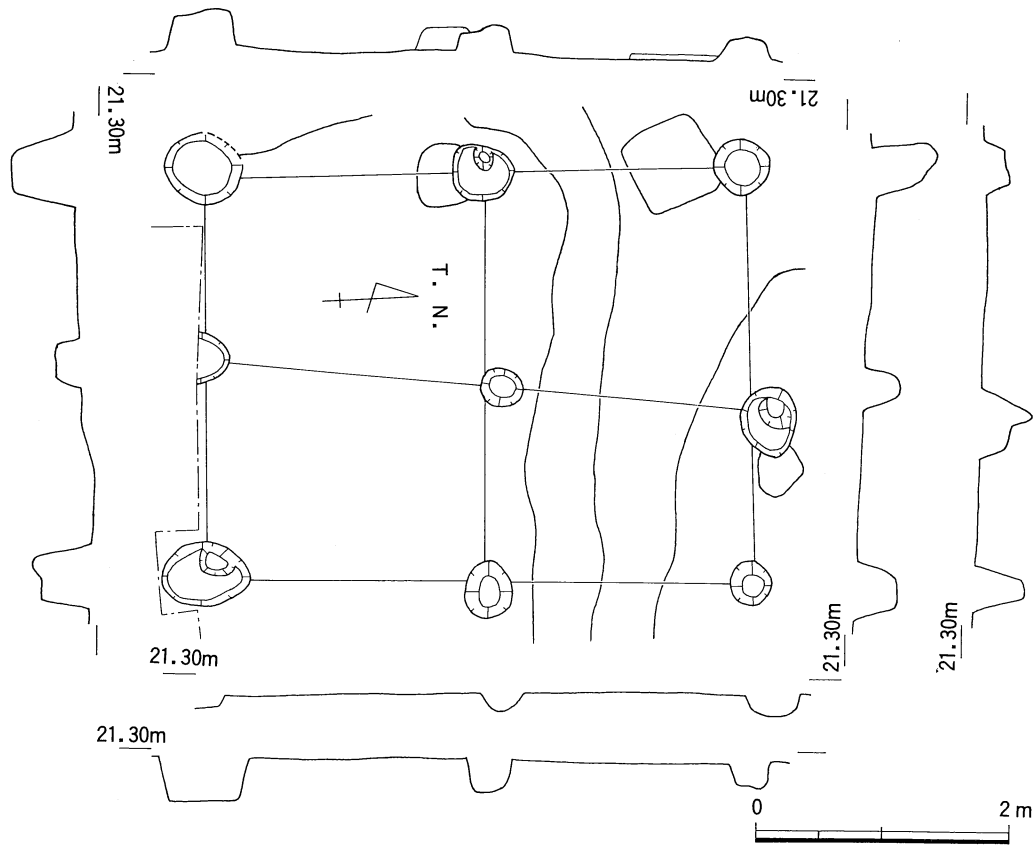


写真43 O①区SB01検出状況（北西から）



第50図 O①区 S B01実測図 (1/60)

### 3. まとめ

前田東・中村遺跡で検出した遺構・遺物は、縄文時代から近世に至るまでのものが認められるが、それらは大きく2つの時期に大別することができよう。それぞれの時期ごとに概観することで、まとめにかえたい。

縄文時代後期から古墳時代初頭 調査対象地の西端 (H①区) と中央部 (I区・J④区) において、複数の自然河川を確認している。いずれも縄文時代の遺物は少なく、その後は明確に層位を違えて弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物が出土している。J④区の自然河川は弥生時代中期後半からの遺物が見られる。これらの河川間に存在する微高地上では当該期の遺構はほとんど検出していないが、遺物の出土量からみても、後世の削平によって消滅した可能性がある。

古代から中世 この頃になると、先述した自然河川はほとんど埋没してしまい、その上にも当該期の遺構が展開を見せるようになる。とはいうものの、集落などの居住域は安定した微高地上を選地している傾向がみられる。H区では復原できた掘立柱建物跡以外にも多数の柱穴がみられ、複数の井戸を検出している。柱穴群は東隣のI③区にも連続しており、ある程度の規模の集落が想定できよう。東端にあたるK区でも柱穴群を確認しており、東道路の調査区で検出した集落の広がりを確認している。また、当該期の建物や溝は現在高松平野にみられる方格地割と同じ方向を持つものが多く、高松平野の方格地割の施行時期を考える上での資料のひとつになるう。

# 坪井遺跡

## 1. 立地と環境

坪井遺跡は、大内町西部にある鶴羽山と中山に挟まれた谷部を流れる北川の北岸に位置している。標高はおよそ23mを測るが、谷間部のほぼ扇頂部に近く、度重なる洪水により多くの土砂で埋め尽くされている。また、県道10号線の田面峠を東に下ってきたところに位置しており、推定南海道も近くを通ることから、古くから交通の要所であったと考えられる。

周囲の遺跡を見てみると、旧石器～縄文時代については与田川の上流で石器などが表採されたり、与田川の支流の古川上流にある原間遺跡で縄文土器が確認されている。弥生時代から古墳時代にかけては、竪穴住居跡や掘立柱建物で構成される集落が住居遺跡や金比羅山遺跡、原間遺跡などで確認されている。また古墳時代前期の前方後円墳である大日山古墳や片袖式の横穴式石室を有する後期の原間古墳などがある。中世においては、原間遺跡や西谷遺跡において、条里地割の坪界溝とそれを意識した掘立柱建物が確認されている。

これらの遺跡は大内町西部を流れる与田川とその支流である古川が流れる平野部とその周辺を中心として分布しており、当遺跡がある大内町東部の遺跡の密度は薄い。しかしながら、近くには善坊寺古墳があり、土居遺跡では弥生から中世にかけての土器が多数確認されていることから、今後大内町東部においても新たな遺跡が増えてくる可能性が高い。



第51図 遺跡の位置及び周辺の遺跡 (1/50,000)